2 史伝

単元のねらい

本単元は、「漢文入門」で学習した知識を確かめながら、応用力を養うことをねらいとしている。次の七点が学ぶべきこととなろう。

(1) 本文を繰り返し音読・朗読することによって、漢文特有の表現にいっそう親しむ。

(2) 受身・疑問・反語・抑揚・使役・比較・選択など訓読のきまりを理解し、主語―述語などの文の構造を意識しながら平易な現代語訳を工夫することによって、漢文の世界に親しむ。

(3) 史伝の歴史的・文化的背景を調査することによって、史伝に表現されている国と国との関係や人と人との関係などの理解に役立てる。

(4) 史伝の構成・叙述や展開を正しく踏まえることによって、内容を的確に理解する。

(5) 史伝と古典に関する文章（史伝文学）それぞれに描かれた躍動的・個性的・独創的で多彩な行動やものの見方・考え方をする登場人物を比較することによって、人（個人）の生き方や能力についての考えを広げ深めたり批判したりする力を養う。

(6) 史伝の登場人物を紹介する言語活動によって、史伝の内容を的確に解釈するとともに歴史観や人生観を問う契機とする。

(7) 史伝の登場人物を紹介する言語活動によって、自分のものの見方・感じ方・考え方をさらに深め、文章の構成・展開や文体・表現の仕方・表現の特色について評価する力を養う。

単元の構成

本単元は「十八史略」の中から「先従隗始」「鶏口牛後」「管鮑之交」「臥薪嘗胆」の四編を選んだ。この時期の生徒は、入門期を過ぎたばかりで、まだ訓読や内容読解に慣れていない。このような段階での学習には、比較的短い話で基本的な語法（句法）で表現され、現代語訳・内容読解がしやすく、話の内容が面白くテーマが分かりやすいものが適切と考え、そのような教材を選定した。当然、これら四編を短い話から長い話へと配列することが適当と考えた。

古典に関する文章は、史伝の読みを広げたり深めたりするために適したものという視点で選び、漢文教材の後に配置した。そのようにしたのは、史伝と古典（漢文）に関する文章（随筆・小説など）を読み比べたり、比較して論じたり批評したりする言語活動がしやすくなると判断したからだ。そこで、「臥薪嘗胆」の話をもとにした史伝文学である「中国英傑伝」の中の一節が適切と考え、採録した。

「登場人物を紹介する」言語活動は、その題材の内容理解をさらに深めたり自分のものの見方・感じ方・考え方をますます広げたりすることや、文章の構成や展開・表現の仕方・表現の特色について評価する力を確かなものにすることに、その目的がある。それを達成するためには、単元の最後で、この単元で学んだ教材を用いてこの活動をすることが適切と判断し、そのようにした。また、教材に登場する人物が躍動的・個性的で多彩を極め魅力的なので、「読むこと」の言語活動がしやすいとも考え、登場人物の魅力を紹介する「紹介文」を書かせることとした。

史伝

教材のねらい

1　選定の理由

ア　「十八史略」について

この単元のねらいを達成するために、「十八史略」が適切な教材であると考えられる理由は、次のようになろう。

(1) 漢文初学者が音読、現代語訳、内容読解をするのに、一話一話の分量が手ごろである。

(2) 基本句形の頻出、分かりやすいテーマと簡要にして的確な表現によって漢文訓読の基礎を確認しながら、応用力を養うことができる。

(3) 中国の歴史の要点を具体的に手際よく案配し収めてあるため、中国の歴史の大体が理解しやすい。

(4) 混乱した乱世を舞台に、登場する人物はそれぞれ躍動的・個性的・独創的で多彩を極めている。それら（個人）の生き方や考え方・創造性を学ぶことは、自分の生き方を主体的に考えたり確かめたり広げたり深めたりすることにつながる。

(5) テーマが分かりやすく登場人物が多種多彩で魅力的であるということは、「登場人物を紹介する」という言語活動に際し、人物選定がしやすく伝えたい魅力が発見しやすいと考えられる。また、自分の生き方も投影しやすいといえよう。

○「十八史略」の各教材について

ここに採った教材は、時代は異なるが、そこに活躍する人々（個人）の行動は生徒の興味をわき立たせ、それが漢文を読むことへの興味へとつながるものと思われる。

まず、戦国時代に生きる「説客」の心理や郭隗の弁舌や説得術の巧みさを描いた逸話、「先従隗始」を取り上げた。次に、戦国時代という下剋上の乱世に、巧みに鄙諺を用いて六国の君主を説得し各国を動かした遊説家・蘇秦の逸話、「鶏口牛後」を採録した。続いて、春秋時代という混乱の世にあっても、斉の桓公を五覇の一人にした名宰相・管仲と管仲の才能を認めて支え続けた鮑叔とが信頼し合う姿を描き出した故事、「管鮑之交」を取り上げた。最後に、春秋時代の南方の地、呉と楚、二国の君主の抗争を小説的に描いた逸話、「臥薪嘗胆」を取り上げた。これらはみなよく知られた逸話で、その内容展開のおもしろさや時代概観、漢文特有の力強い簡潔な表現・登場人物の人生観（人間観）などを十分に味わうことができる。そのため指導者には、語法（句形）にあまり深入りしない授業展開を望む。当然、何回も音読させ漢文の口調にも慣れさせてほしい。

イ「古典に関する文章」について

古典に関する文章については、史伝の読みを広げたり深めたりすることに寄与できるものという視点で考え、選択した。また、史伝の中に出てくる話と関連する内容のものが学習しやすいだろうとも考えた。そこで、「臥薪嘗胆」の話をもとにした「中国英傑伝」の一節が適切と考え採択した。史伝の登場人物が「中国英傑伝」では、どのように描かれているかを読むことによって、史伝の読みも広がり深まるにちがいない。

○「中国英傑伝」について

海音寺氏の「中国英傑伝」は、「臥薪嘗胆」の話をもとに、その話の中心人物、伍子胥の伯嚭に対する思いを丁寧に分かりやすく情感的に描いている。これによって、この「思い」がよく理解できよう。しかし、その「思い」は裏切られ、「臥薪嘗胆」教材にあるように、伍子胥は伯嚭に裏切られ、それによって夫差から自害を言い渡される。この残酷な人間模様が漢文には短い文で赤裸々に語られる。そこで「中国英傑伝」と「臥薪嘗胆」の二つを読むことによって、「臥薪嘗胆」教材の理解が深まることを期待したい。

「十八史略」教材の中から、魅力的な人物を探し出し、その人物の「魅力を紹介する」という言語活動は、「読むこと」に関する力を身に付け確かなものにすることにその目的がある。なので、この言語活動によって漢文教材の読解が広がるばかりか、自分のものの考え方などもさらに深まることになろう。

2　指導のねらい（漢文教材の学習すべき内容一覧表）

先従レ隗始

(1)　音読	(2)　学習すべき基本句形	(3)　歴史	(4)　内容読解	(5)　内容読解のためのキー・センテンス
範読・追い読み・黙読・一斉読み・円陣読み・一人読み・朗読	使役形 抑揚形 反語形	戦国時代の概略	(a)昭王のものの見方 (b)戦国時代に生きる「説客」の心理 (c)郭隗の弁舌の巧みさ	(a)誠得二賢士一与共レ国、以雪二先生之恥一、孤之願也。 (b)於レ是、昭王為レ隗改二築宮一、師二事之一。 (c)今王必欲レ致レ士、先従レ隗始。

鶏口牛後				
範読・追い読み・黙読・一斉読み・円陣読み・一人読み・朗読	使役形 比較形 選択形	「戦国の七雄」の概略 「合従連衡」策の概略	(a)「西向」の具体的な内容 (b)蘇秦の説得の巧みさ	(a)莫レ若二六国従親、以擯レ秦。 (b)寧為二鶏口一、無レ為牛後一。於是六国従合。
管鮑之交				
範読・追い読み・黙読・一斉読み・円陣読み・一人読み・朗読	受身形 使役形	春秋時代の概略	(a)管仲の三つの行動における鮑叔の評価とその理由 (b)管仲が鮑叔に、鮑叔が管仲に懐く心情のまとめと、管仲と鮑叔の人物像についての描き方。	(a)①嘗与鮑叔賈。…鮑叔不二以為レ貪。知二仲貧一也。 ②嘗謀レ事窮困。鮑叔不二以為レ愚。知二時有一レ利不利一也。 ③嘗三戦三走。鮑叔不二以為レ怯。知二仲有一レ老母一也。 (b)管仲→鮑叔＝生レ我者父母、知レ我者鮑子也。 鮑叔→管仲＝①…鮑叔不二以為レ貪。 ②…鮑叔不二以為レ愚。 ③…鮑叔不二以為レ怯。 ④桓公九二合諸侯一、一二匡天下一、皆仲之謀。

臥薪嘗胆

範読・追い読み・黙読・一斉読み・円陣読み・一人読み・朗読	使役形 疑問形	呉楚の興亡	(a)①夫差が「臥薪」、②句践が「嘗胆」するに至った経緯と、その結果 (b)夫差が句践に敗れた二つの理由

(a)①呉伐レ越。闔廬傷而死。…「夫差、而忘二越人之殺一レ父乎一邪。」…夫差敗二越于夫椒一。
②越王句践、以二余兵一棲二会稽山一、請二為レ臣妻為レ妾。…「女忘二会稽之恥一邪。」
(b)①太宰伯嚭受二越賂一、説二夫差一赦レ越。
②太宰嚭譖下子胥恥二謀不レ用怨望一上。夫差乃賜二子胥属鏤之剣一。

3 単元の目標

目標については、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	先従隗始	鶏口牛後	管鮑之交	臥薪嘗胆	中国英傑伝	単元の言語活動３
〔知識・技能〕							
(1)イ	常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。			○			
(1)ウ	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。		○		○		
(2)イ	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。			○			
(2)ウ	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。		○			○	○
(2)エ	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。	○	○	○	○		
	時間の経過による言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。						
〔思考・判断・表現〕							
B(1)ア	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。	○	○	○	○	○	○
B(1)イ	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。	○		○	○	○	○
B(1)エ	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。					○	

〔主体的に学習に取り組む態度〕						
進んで史伝の背景を理解し、史伝に描かれた登場人物の言動・心情・考え方や生き方を学ぼうとし、学習課題に沿って、登場人物の弁舌の巧みさについて話し合おうとしている。	○					
進んで史伝の背景を理解し、史伝に描かれた登場人物の言動・心情・考え方や生き方を学ぼうとし、学習課題に沿って、登場人物の説得の巧みさについて話し合おうとしている。		○				
進んで史伝の背景を理解し、史伝に描かれた登場人物の言動・心情・考え方や生き方を学ぼうとし、学習課題に沿って、登場人物の心情や人物の描かれ方を説明しようとしている。			○			
進んで史伝の背景を理解し、史伝に描かれた登場人物の言動・心情・考え方や生き方を学ぼうとし、学習課題に沿って、登場人物の敗因について話し合おうとしている。				○		
進んで史伝の背景を理解し、史伝に描かれた登場人物の言動・心情・考え方や生き方を学ぼうとし、学習課題に沿って、登場人物が他の登場人物にどのような思いを持っていたかまとめようとしている。					○	
進んで史伝の背景を理解し、史伝に描かれた登場人物の言動・心情・考え方や生き方を学ぼうとし、今までの学習を生かして、登場人物の紹介文を書こうとしている。						○

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

先従隗始：登場人物の弁舌の巧みさについて話し合う【〔思・判・表〕B⑵イ】

鶏口牛後：登場人物の説得の巧みさについて話し合う。【〔思・判・表〕B⑵イ】

管鮑之交：登場人物の心情や人物の描かれ方を説明する。【〔思・判・表〕B⑵イ】

臥薪嘗胆：登場人物の敗因について話し合う。【〔思・判・表〕B⑵イ】

単元の言語活動３「登場人物の魅力を紹介する」：登場人物の紹介文を書く。【〔思・判・表〕B⑵イ】

指導計画案

	指導上の重点目標	学習活動と指導上の留意点
		導入
1	【先従隗始】 正確な訓読に習熟させ、基本句形を理解させる。	①「戦国時代」の概略と燕の混乱した理由を理解する。
2	平易な現代語訳を工夫させる。	②「十八史略」の概要を理解する。 ①②ともに、漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせる。
		展開
3	要旨をまとめさせる。	①本文を黙読する。その後、範読を聞く。
4	「戦国時代」の概略を理解させる。	②一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。
5	「十八史略」の概要を理解させる。	③「先従隗始」の本来の意味と、現在使われている意味の違いをグループで調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめ、発表する。**知技**〔「言葉と表現」１〕
6	「戦国時代」に生きる「説客」の心理を理解させる。	④要旨をノートにまとめ、発表させる。 現代語訳をする。**知技** 第一段落と、第二・三段落に分けて現代語訳させる。
7	昭王のものの見方を本文に即してまとめさせる。	⑤内容読解をする。 次のア～オのポイントに注意させる。ア「先王之恥」とは何か、イ燕の昭王がなぜ賢者を求めるのか、ウ「千里馬」「死馬」は、それぞれ誰をたとえているか、エ「先従隗始。」とは、誰が誰に何を求めたのか、オ昭王が郭隗のために邸宅を新しく築いて、師事した効果。
8	郭隗の説得の巧みさを理解させる。	⑥戦国時代に生きる「説客」の心理をグループで話し合い、代表が発表する。
9	故事成語の意味を理解させる。	⑦昭王のものの見方や考え方を、本文に即してまとめる。**思判表**〔「学習のポイント」１〕 昭王のものの見方や考え方は、昭王の言葉の中に表現されているので、その言葉をグループで吟味させる。
		まとめ
		①郭隗の弁舌の巧みさがどこにあるかをグループで話し合い、代表が発表する。**思判表** **主態**〔「言語活動」１〕 郭隗の用いたたとえ話を昭王が共感したから、郭隗を登用することになる。どのような点に共感したかをグループで話し合い、その巧みさを理解させる。
		②①で発表した自グループの考えについて、他グループからの質問や意見を受け、それに対する返答のための検討をする。また、返答の仕方も工夫する。
		③まとめの朗読をする。
		○テストを実施する。
		○語句・句形問題を実施する。

【鶏口牛後】 1　正確な訓読に習熟させ、基本句形を理解させる。 2　平易な現代語訳を工夫させる。 3　要旨をまとめさせる。 4　「春秋戦国時代」「戦国の七雄」「諸子百家」「合従連衡」の概略を理解させる。 5　「西向」の具体的な内容を理解させる。 6　蘇秦の説得の巧みさはどこにあるか話し合わせる。 7　故事成語の意味を理解させる。	**導入**	①　「春秋戦国時代」「戦国の七雄」「諸子百家」の概略と「合従連衡」の言葉の意味・その策の概略とを辞書・インターネット・資料集などを利用して調べる。**知技**〔「学習のポイント」１・「言葉と表現」１〕
	展開	①　本文を黙読する。その後、範読を聞く。 ②　一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。 ③　「鶏口牛後」の意味を調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめ、発表する。〔「言葉と表現」１〕 要旨をノートにまとめ、発表させる。 ④　現代語訳をする。**知技** ⑤　内容読解をする。 次のア～ウのポイントに注意させる。ア「遊説」とは、どのようなことをするのか、イ「西向」とは、具体的にどのようにすることか、ウ「鶏口」と「牛後」が指す具体的な内容。
	まとめ	①　蘇秦の説得の巧みさはどこにあるかをグループで話し合い、代表が発表する。**思判表**　**主態**〔「言語活動」１〕 六国の諸侯たちのどのような気持ち・時代気風・時代風潮を利用したところに巧みさがあるか、考えさせる。 ②　①で発表した自グループの考えについて、他グループからの質問を受け、それに対する返答のための検討をする。 また、返答の仕方も工夫する。 ③　「寧ろ」を用いた短文を作り、グループ内で発表し合う。**知技**〔「言葉と表現」２〕 ④　まとめの朗読をする。 ○　テストを実施する。 ○　語句・句形問題を実施する。

1	【管鮑之交】 正確な訓読に習熟させ、基本句形を理解させる。	導入
2	平易な現代語訳を工夫させる。	
3	要旨をまとめさせる。	
4	斉の桓公が活躍した「春秋時代」の概略を再確認させる。	展開
5	管仲の三つの行動における鮑叔の評価とその理由をまとめさせる。	
6	管仲が鮑叔に、鮑叔が管仲に抱く心情をまとめさせる。その上で、管仲と鮑叔は、それぞれどのような人物として描かれているかを説明させる。	
7	対偶表現を抜き出し、その効果を説明させる。	
8	故事成語の意味を理解させる。	
9	同訓異義語を理解させる。	まとめ

① 斉の桓公の活躍した春秋時代の概略を確認する。漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせる。

① 本文を黙読する。その後、範読を聞く。
② 一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。
③ 「管鮑之交」の意味を調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめ、発表する。要旨をノートにまとめ、発表させる。
④ 現代語訳をする。知技
第一段落と、第二・三段落に分けて現代語訳させる。
⑤ 内容読解をする。思判表【学習のポイント】1
次のア～キのポイントに注意させる。ア小白が子糾よりも早く斉に到着することができた理由、イ鮑叔が管仲を桓公に薦めた理由、ウ「置怨」の意味、エ管仲の三つの行動における鮑叔の評価と、その理由、オ「知我者鮑子也。」から読み取れる、管仲の気持ち、カ「対偶」表現の指摘と、その効果、キ本文に登場する人物の関係。

① 管仲が鮑叔に、鮑叔が管仲に抱く心情を、本文に即してまとめる。そのうえで、管仲と鮑叔は、それぞれどのような人物として描かれているか、グループで話し合い、代表が発表する。思判表 主態【「言語活動」1】
次のような話し合いのポイントを指示してもよい。ア管仲の鮑叔に対する心情は、『管仲曰、生我者父母、知我者鮑子也。』に描かれている。イ鮑叔の管仲に対する心情は、『管仲字夷吾。…知仲有老母也。』に描かれている。

② ①で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。

③ 「管鮑之交」とは、どのような関係か、グループで話し合い、代表が発表する。知技【「言葉と表現」1】

④ 「謀る」「図る」「計る」「測る」「量る」「諮る」の意味の違いを調べる。知技【「言葉と表現」2】

⑤ まとめの朗読をする。

○ テストを実施する。

○ 語句・句形問題を実施する。

【臥薪嘗胆】

1 正確な訓読に習熟させ、基本句形を理解させる。
2 平易な現代語訳を工夫させる。
3 要旨をまとめさせる。
4 夫差が「臥薪」し、句践が「嘗胆」するに至った経過と、そうすることによって得られた結果について整理させる。
5 夫差の子胥に対する気持ちの変化を整理させる。
6 夫差が句践に敗れた理由を話し合わせる。
7 故事成語の意味を理解させる。
8 四字熟語を創作させる。

導入	① 「春秋時代」の呉楚の抗争の概略を理解する。 漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせる。
展開	① 本文を黙読する。その後、範読を聞く。 ② 一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。 ③ 「臥薪嘗胆」の意味を調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめる。**知技**〔「言葉と表現」1〕 要旨をノートにまとめ、発表させる。 ④ 現代語訳をする。**知技** 「臥薪」部分と、「嘗胆」部分に分けて現代語訳させる。 ⑤ 内容読解をする。**思判表**〔「学習のポイント」1・2〕 次のア～コのポイントに注意させる。ア「入郢」とは誰が何のためにそうしたのか、イ夫差が「薪中」で寝起きした理由、ウ「請為臣妻為妾。」から読み取れる句践の気持ち、エ子胥が「不可。」と言った理由、オ太宰伯嚭が夫差に越王句践を許すよう助言した理由、カ句践が「仰肝嘗之」した理由、キ夫差が子胥に「属鏤之剣」を与えた理由、ク遺言から読み取れる子胥の気持ち、ケ夫差の子胥に対する気持ちの変化、コ夫差が「吾無以見子胥。」と言った理由。
まとめ	① 夫差が句践に敗れたのはなぜか。その理由をグループで話し合い、代表が発表する。**思判表** **主態**〔「言語活動」1〕 ② ①で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。 本文に即して、グループで丁寧に吟味させる。 ③ 四字熟語を創作し、発表する。また、その作品の意味と使い方も解説する。〔「言葉と表現」2〕 ④ まとめの朗読をする。 ○ テストを実施する。 ○ 語句・句形問題を実施する。

【中国英傑伝】 第一次・第二次感想をまとめさせる。 本文中の漢詩を正確に訓読させる。 本文中の漢詩の平易な現代語訳を工夫させる。 作品に描かれた伍子胥の思いを知るため、漢文教材「臥薪嘗胆」との比較読みをさせる。 作品に描かれた登場人物の心情、考え方や生き方を学ばせる。	1 2 3 4 5		
導入		**展開**	**まとめ**
①　作者について理解する。 知技		①　本文の黙読をする。 ②　第一次感想をノートにまとめ、その後、発表しする。 ③　内容読解をする。〔「学習のポイント」1〕 思判表 次のア～オのポイントに注意させる。ア「同じこと」とは、具体的にどのようなことかをグループで話し合い、代表が発表する。イ（　）内の書き下し文を現代語訳し、朗読する。ウ板書した現代語訳について、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。その返答の仕方も工夫する。エ（　）内の書き下し文を、その意味を考えながら、グループ内で朗読し合う。オ「ずっとずっと後年、子胥はそれを思い知るのである。」とあるが、どのようなことを「思い知る」かを漢文教材「臥薪嘗胆」をもとに、グループで話し合う。	①　伍子胥は伯嚭に対して、どのような思いを持っているかをグループで話し合いながら本文に即してまとめ、発表する。〔「学習のポイント」2〕 思判表 主態 ②　①で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。 ③　本文の意味を考えながら、グループ内でまとめの朗読をする。 ④　第二次感想をノートにまとめ、発表する。 ○　テストを実施する。

【単元の言語活動３　登場人物の魅力を紹介する】

1 「史伝」作品や文章の、歴史的・文化的背景などを調査させる。

2 生徒自身が主体的に、作品や文章の内容をより深く広く理解しようとする読み解きをさせる。

3 人に伝わるよう、紹介文を的確にわかりやすく書かせる。

4 作品や文章に対して自分の意見や感想を持たせ、相互評価や自己評価をさせる。

導入	展開	まとめ
①	①	①
ワークシートと振り返りシートを配布する。 活動の目的を説明する。	紹介する人物一名を選び、その人物の魅力を探る。 知技 思判表 ア その人物の、ものの考え方や生き方、おもしろかった場面や言動などを多面的に分析し、その魅力を探り出させる。 イ 辞書・インターネット・資料集などで人物の略歴やエピソード・人物像などを調べ、分析の参考資料にさせる。 ウ 探り出した人物の魅力を、箇条書きにしてまとめさせる。	振り返りシートに記入する。
	②	
	紹介する人物の魅力を伝えるために、表現のしかたを工夫させる。 思判表 ア 人物の魅力を伝えるために、人物紹介文を書き上げさせる。 イ アを踏まえて、書き上げた人物紹介文を、推敲させる。 ウ アを踏まえて、書き上げた人物紹介文を、発表し合う。 主態	
	③	
	アグループを作り人物紹介文を発表し合い、相互評価させる。 イ 相互評価をもとに、人物紹介文を加筆訂正させる。 ウ 加筆訂正した人物紹介文の自己評価を行わせる。	

十八史略

作者

曽先之

一二四一年頃～一三三二年頃。字は孟参（一説に、従野）、号は立斎。廬陵（江西省吉安市）の人。一説に、吉水（現在の江西省吉水県）の人ともいう。咸淳元（一二六五）年、進士に及第した。地方官を歴任したが、宋の滅亡後は隠居して元に仕えず、九十二歳で卒したといわれる。

彼の故郷の長江南部は、異民族支配に抵抗して民族文化の伝統を守ろうとする気風が強く、いわゆる「江南の処士」たちが活躍していた。科挙が廃止され、伝統文化が危機にさらされている中で、曽先之が初学者のために民族の歴史を伝えようとしたのも、このような気風と関係があるように思われる。このように「十八史略」は初学者のために作られたので、「郷塾訓蒙」（初学の児童の教科書）の史籍として流行した。しかし最近では、明代に通行したテキストと原本との異同から「十八史略」はむしろ元朝の漢人懐柔のための文教政策に呼応して書かれたものとする説も提出されている。

出典

十八史略

元の曽先之の撰であるが、二巻本と七巻本がある。曽先之生前刊行の二巻本には「古今歴代十八史略」、「増修宋季古今十八史略」がある。七巻本には陳殷が音釈を加え、後これを劉剡が補足し、王逢が点校した「立斎先生標題解註音釈十八史略」がある。今日これが一般に通行し、「十八史略」の名で呼ばれている。「十八史略」とは十八史の要略の意味で、太古から南宋滅亡まで四千年の史実を簡略に記したものである。その十八種の史書とは、次のようなものである。

1 史記　2 漢書　3 後漢書　4 三国志　5 晋書　6 宋書　7 南斉書　8 梁書　9 陳書　10 後魏書　11 北斉書　12 後周書　13 隋書　14 南史　15 北史　16 新唐書　17 新五代史　18 続資治通鑑長編・続宋編年資治通鑑

実際には十八の史書にない話も採録されていて、例えば、堯・舜・禹の時代は多く材料を「荘子」「列子」「淮南子」「韓非子」などの諸子類に求めている。また、直接正史から取ったものよりも、宋の司馬光の「資治通鑑」から引用したものが多い。ところで、宋代の史料については「宋史」（一三五年完成）はまだ完成し

ていないので用いられていない。そこで18の二つの史書を一つに数えて史料とした。しかし、この二つには南宋滅亡後に至る五十余年の記事は記載されていないので、ここについては何か別のものを用いたと考えられているが定説はない。

中国の正史、すなわち「史記」から「明史」までに至る二十四史（「新元史」を含めて二十五史ということもある）は、紀伝体の形態をとっており、本紀（帝王の伝記）・世家（諸侯の伝記）・列伝（個人の伝記）と分けて記録されている。しかも時代が下がるに従って、史書の量が激増し、時代の流れを把握するという面では非常に困難になってきていた。そのため、宋・元の頃から年代順に史実を記した「資治通鑑」などの編年体の史書が数多く作られるようになった。「十八史略」も編年体の史書の一つである。これは、太古から南宋滅亡までの史実を初学者向けに簡略に記しているが、その簡略さは、抽象的に概説したものではなく、要点だけを具体的に示すという方法によっているので、本書を読めば、歴代治乱の大体、将相・賢哲の行跡、故事・格言の典拠について、初学者の知っているべきことが興味深く網羅されており、歴史のみならず、文学・思想の書を読むうえでの必須の基礎知識を得るにも最も便利な書物である。本単元で「十八史略」から教材を選定した理由の一つがここにある（「単元のねらい」参照）。

「十八史略」が中国全地域で読まれたかという点については問題であるが、江南の地方で読まれたことは事実のようだ。これに対し、日本には室町時代に伝来して以来、手軽な中国史として歓迎され、特に江戸時代には「唐詩選」「論語」と並んで初学者の必読書として盛行した。明治以後も小中学校の東洋史・漢文の教科書で親しまれ、その流れが今日の漢文教育の場まで続いてきているわけである。本教科書は明治書院「新釈漢文大系　十八史略上」によった。

参考文献

❊ **教師用**

▽**注釈書**

「十八史略」（漢文大系）　冨山房　明四十三（昭四十八再刊）
「十八史略・史記・漢書」林秀一　学燈社　昭四十一
「十八史略」（新釈漢文大系）林秀一　明治書院　昭四十二
「十八史略」（中国古典新書）市川任三　明徳出版　昭四十三
「傍訳漢文史伝（十八史略史記）」中里義夫・川村廣通　明治書院　昭四十六
「十八史略」丸山松幸他　徳間書店　昭五十
「十八史略」（中国の古典）今西凱夫　学習研究社　昭六十
「十八史略」（鑑賞中国の古典）竹内弘行　角川書店　平元
「研究資料漢文学８　歴史Ⅱ」監修鎌田正・田部井文雄　明治書院　平五

❊ **生徒用**

「小説十八史略　（一）～（六）」陳舜臣　毎日新聞社　昭五十六～六十二
「語法詳解十八史略」（古典解釈シリーズ）新開高明　旺文社　昭五十八
「十八史略詳解（上）（下）」辛島驍・多久弘一

明治書院　平十六
「十八史略」（角川ソフィア文庫　ビギナーズクラシックス中国の古典）竹内弘行　角川学芸出版　平二十四

先従レ隗始メヨ

要旨

燕国再建のための人材招致策を昭王から諮問された郭隗は、「まず私を厚遇することから始めてください。そうすれば、私より有能な天下の優れた人物は争ってやって来るでしょう。」と進言する。それが見事に成功し、多くの有能な人材が燕を目指して集まってきた。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め〜P一三四・6〈得二身事一之。〉	燕の昭王は、斉に打ち破られ疲弊した自国を再興するために、ともに国を治めることのできる賢者の推薦を郭隗に諮問した。
第二段	P一三四・7〈隗曰〉〜P一三五・3〈豈遠二千里一哉。〉	死んだ名馬の骨を買って帰り、後に生きた名馬を呼び寄せることに成功した涓人の話を持ち出した郭隗は、自分を厚遇すれば自分より優れた人物は必ずやって来ると昭王に進言する。
第三段	P一三五・4〈於レ是〉〜終わり	昭王は進言どおり郭隗を厚遇したところ、優れた人物は先を争って燕に駆けつけた。

訓読と現代語訳

【第一段】①燕人太子平を立てて君と為す。②是れ昭王たり。③死を弔ひ生を問ひ、辞を卑くし幣を厚くして、以て賢者を招く。④郭隗に問ひて曰はく、「斉孤

【第一段】①燕の人々は太子の平を位に即けて君主とした。②これが昭王である。③（昭王は）戦死者を弔い、生存者を慰問し、へりくだった言葉遣いをし、多くの進物を用意して、（天下の）賢者を招こうとした。④（そこで）郭隗に質問して言った、「斉は私の国が乱れているのに乗じて、不意に攻め込んで（我が）燕を攻め破った。

の国の乱るるに因りて、襲ひて燕を破る。孤極めて燕の小にして以て報ゆるに足らざるを知る。誠に賢士を得て与に国を共にし、以て先王の恥を雪がんこと、孤の願ひなり。先生可なる者を視せ。身之に事ふるを得ん。」と。

【第二段】⑤隗曰はく、「古の君に、千金を以て涓人をして千里の馬を求めしむる者有り。死馬の骨を五百金に買ひて返る。君怒る。涓人曰はく、『死馬すら且つ之を買ふ、況んや生ける者をや。馬今に至らん。』と。期年ならずして千里の馬至る者三。今王必ず士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ。況んや隗より賢なる者、豈に千里を遠しとせんや。」と。

【第三段】⑥是に於いて、昭王隗の為に宮を改め築きて、之に師事す。⑦是に於いて、士争ひて燕に趨く。

私は（我が）燕が小国で（今の国力では）仕返しをするのに力不足であることを十分に承知している。ぜひとも賢士を得て（その人と）共に国を治め、そして先代の王の恥辱をすすぐことが、私の願いである。先生、適当な人物を推薦していただきたい。私は自らその方を師として（敬い）仕えたい。」と。

【第二段】⑤（それを聞いた郭）隗が言った、「昔ある国の君主で、千金を持たせて涓人（君主のそば近くに仕え、日常の世話をする者）に一日に千里を走る名馬を（買い）求めさせたことがありました。（ところが、その涓人は）死んだ名馬の骨を五百金で買って帰って来ました。君主は怒りました。（すると）涓人が（答えて）言いました、『死んだ名馬（の骨）でさえ（高い値で）買った（のですから）、まして生きている名馬ならなおさら（もっと高い値で）買ってくれる（と人々は考える）でしょう。（ですから）馬はすぐにもやって来るでしょう。』と。（その言葉どおり、）まる一年もたたないで一日に千里を走る名馬が三頭もやって来たということです。今王様がぜひとも優れた人物を招きたいとお思いならば、まずこの（郭）隗からお始めください。（私のようなものでも厚遇されたとなれば）ましてこの隗より賢い人は、どうして千里の道のりを遠いと思いましょうか（、いや、思いません）。」と。

【第三段】⑥そこで、昭王は（郭）隗のために邸宅を新しく築いて、彼を先生として（敬い）仕えた。⑦こうして、（これを聞いた）天下の優れた人物は先を争って燕に駆けつけた。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶「戦国時代」の概略と燕の混乱した理由を理解する。
❷「十八史略」の概要を理解する。

❶漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせる。この調査や説明に、多くの時間を費やすことができないので指導者が事前にまとめたプリントを用意し配布する。また、そのポイントだけを板書して理解させてもよい。「戦国時代」の概略については、後出「解説―戦国時代の概略―」を利用してプリントを作成する。（「鶏口牛後」の「学習のポイント」1参照。）燕の混乱した理由については、斉によって昭王の父・噲（かい）が殺され、燕が大敗し混乱した経緯を理解させる。
❷漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせたものや教科書P一四三の説明を用いて理解させる。また、時代を強く生きた人々の、興味深いエピソードで「十八史略」が組み立てられていることに注意させる。

展開

学習活動のポイント

❶本文を黙読する。その後、範読を聞く。
❷一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。
❸「先従隗始」の本来の意味と、現在使われている意味の違いをグループで調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめ、発表する。知技(2)エ【「言葉と表現」1】
❹現代語訳をする。知技(2)ウ
❺内容読解をする。
❻戦国時代に生きる「説客」の心理をグループで話し合い、代表が発表する。
❼昭王のものの見方や考え方を、本文に即してまとめる。思判表B(1)イ【「学習のポイント」1】

❶範読はゆっくり丁寧に読む。
【注意させる読みの箇所】
「有下以二千金一使三涓人求二千里馬一者上」「死馬且買レ之、況生者乎。」「況賢二於隗一者、豈遠二千里一哉。」
❷大きな声で読むよう指導する。
❸辞書で調べた「先従隗始」の本来の意味と現在使われている意

味を確実に把握し、それを参考に、要旨をノートまとめ、発表させる。（五十字程度。）要旨の発表は、黒板に板書させてもよいし、口頭で発表させてもよい。

【評価】「言葉と表現」1を行い、古典の言葉と現代の言葉とのつながりを理解しているか、ノートや提出物などにより確認する。

❹第一段落と、第二・三段落に分けて現代語訳をする。生徒数名を指名し、現代語訳させる。難解な箇所については、生徒の発表状況を見て指導者が補足する。

・第一段落

【注意すべき語句】「弔レ死問レ生」「卑レ辞厚レ幣」「孤」「与共レ国、以雪二先王之恥一」

・第二・第三段落

【注意すべき句形】「使三涓人求二千里馬一者」（使役形）「死馬且買レ之、況生者乎。」（抑揚形）「況賢二於隗一者、豈遠二千里一哉。」（反語形）

【注意すべき語句】「涓人」「千里馬」「致レ士」「師事」

【評価】【注意すべき語句】を正確に現代語訳できているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。

❺次の**ア**～**オ**のポイントに注意する。**ア**「先王之恥」とは何か、**イ**燕の昭王はなぜ賢者を求めるのか、**ウ**「千里馬」「死馬」は、それぞれ誰をたとえているか、**エ**「先従レ隗始。」とは、誰が誰に何を求めたのか、**オ**昭王が郭隗のために邸宅を新しく築いて、師事した効果。それぞれグループで話し合い、代表が発表してもよい。

アイ…第一段落の昭王の会話に注意させ、そこから考えさせる。

ウ…内容より考えさせれば解答は出よう。

エ…「『始』の意味するところは、郭隗の要求を表現している。どのような要求をしたか。」という助言を与える。

オ…「郭隗でさえも厚遇するということが、戦国時代に生きる『説客』たちをどういう気持ちにさせたか。あなたが『説客』だったらどう思うか。『説客』の心理を考えてみよう。」という助言を与える。

❻グループで話し合わせる際、「『戦国時代の概略』プリントから戦国時代の風潮や時代の気風を読み解き、その中に生きる説客の気持ちや心意気を説明しよう。」という助言を与える。

❼昭王のものの見方や考え方は、昭王の言葉の中に表現されているので、その言葉をグループで吟味させる。その際、昭王がどのような立場から、どのような視点で何を目的にしていたかを話し合わせる。その際、当時の時代背景や風潮・気風を参考にさせること。この当時の時代背景や風潮が、このような話を生んだことも理解させる。

【評価】昭王のものの見方や考え方を捉えているか、話し合いの観察などにより確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶ 郭隗の弁舌の巧みさがどこにあるかをグループで話し合い、代表が発表する。思判表B(1)ア　主態〔「言語活動」1〕

❷ ❶で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。

❸ まとめの朗読をする。

❶「郭隗が用いたたとえ話に昭王が共感したから、郭隗を登用することになる。この話の、どのような点に共感したかを考えれば、その巧みさが理解できよう。」という助言を与え、グループで話し合わせる。

【評価】・郭隗の弁舌の巧みさについて、本文の内容をもとに的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

・郭隗の弁舌の巧みさについて、グループ内で主体的な態度で話し合い、また、自分の考えをグループ内の他者に分かりやすく伝えようとしているか、分析する。

❷他グループの質問や意見を十分に検討させることは、生徒たちに考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。そこで、指導者は「他グループの発表を聞きながら、各グループはその理解に対する疑問点・質問や意見を考え、メモしておくこと。後ほど、それに対する話し合いをします。」という注意を与える。生徒が考えを深めるためには、他からの意見と自分たちの考えを検討するという「言語活動」が大事となる。

❸大きな声で各文の意味を考えながら、朗読させる。

発問例

●一三四ページ

問　**「卑辞」（3行目）の意味は何か。**

答　へりくだった言葉遣いをして。礼を尽くして。

問　**「以招二賢者一。」（3行目）について、**

[1]　「以」は上に述べたことを受けている。ここでは具体的にどのようなことを受けているか。

[2]　「昭王」が「招二賢者一」理由を簡単に述べよ。

答　[1]礼を尽くし、俸禄を高くすること。

[2]自国の再興と斉への報復のために、自分の補佐役となって国政を運営してくれる有能な人材を求めたから。（「賢者」と共に国力を高め、領土を奪われた先代の恥をすすぎたいから。）

補　戦国時代は、弱肉強食の時代である。君主は自国を強大にしなければ他国から侵略されることとなる。そのため、自国を強大にしてくれる、多くの優秀な人材が必要だったのだ。だから、君主は優秀な人材を厚遇したのである。

問　**「与」（5行目）の下に省略されている語を示せ。**

答　賢士

語句の研究

●一三四ページ

1先従レ隗始　賢者を招くには、まず私（郭隗）のような劣った者から厚遇しなさい。現在では、言い出した者からまず始めなさいの意に用いられる。

2燕　西周以来の国家。戦国の七雄の一つ。現在の河北省にあり、薊（現在の北京市）に都があった。西周創業期の功臣である召公奭が封じられた国家。

2人　ここの「人」は全ての人ではなく、一定以上の地位にある人である。「民」とは異なる。

2太子平　燕王噲の太子、名は平。諡は、昭王。前三一一年に即位し、前二七九年まで在位。燕王噲は、斉の使者として燕に来た蘇代（蘇秦の弟）の「堯・舜が賢者として後世尊敬されるのは、国を賢者に譲ったからです。王も国を宰相の子之に禅譲なさいませ。子之は受けようとしませんから、実質は失わずに禅譲したという美名を受け、王は堯・舜と同じになることができます。」という進言を受け入れ、だまされて全権を委ねてしまった。計略に成功した子之はこれをよいことに独裁政治を行ったために、国内は大混乱となった。かねて燕侵攻をねらっていた斉は、太子平に援助を約束し、挙兵を進めた。それによって、太子平は将軍市被と共に子之を攻めたが成功せず、やがて市被とも争うようになって、国内は内乱状態となった。斉はこれに乗じて燕に侵攻し、噲を殺し、子之を醢（塩漬けの刑）にした。結果、燕は大敗した。太子平が即位したのはそれから二年後である。

2昭王　前三一一年〜前二七九年在位。名は平。昭は諡。

2弔レ死問レ生　戦死者を弔い、生存者を慰問する。これは昭王の仁愛の厚さを示す表現。

3卑レ辞厚レ幣　へりくだった言葉遣いをし、多くの進物を用意する。「幣」は進物。ここは、俸禄でもよい。

3郭隗　生没年未詳。当時は燕の師傅（君主の師として、助言し補佐する役。教育顧問）であった。

3斉　西周以来春秋戦国時代にわたる大国。現在の山東省にあった。都は臨淄。周の初めに、文王・武王の功臣であった太公望呂尚が封ぜられた、姜姓の国家であった。春

問　**「共レ国」（5行目）とは、どうすることか。**

答　共に国政を運営し、国力を高めること。

問　**「先王之恥」（5行目）とは、どういうことか。**

答　**A**　**本文の内容から判断して答えよ。**
B　**実際の出来事を踏まえて答えよ。**
A斉によって燕が完膚なきまでに打ち破られたこと。
B昭王の父が斉の軍によって殺されたこと。

問　**「可者」（6行目）の意味を答えよ。**

答　よいと思う者。適格な人物。

問　**「得二身事一之。」（6行目）について、**
1　**「之」とは、何を指しているか。**
2　**「得二身事一之」という言い方には、「昭王」のどのような気持ちがうかがわれるか。**

答　1可者（適当な人物）
2ぜひともよい人物（賢士）を招きたい、という気持ち。

問　**「使三涓人求二千里馬一」（7行目）は使役形で「（　①　）に（　②　）させた」の意である。空欄①②を補え。**

答　①涓人　②千里の馬を買い求め

問　**なぜ古の「君」は怒ったのか。**

答　涓人が死馬の骨を買ってきたことを知った古の王は、自分の命令を守らなかったばかりか、たぶらかしたと思って怒った。

問　**「千里馬」（一三五ページ1行目）と「死**

秋時代には桓公が現れ、管仲を用いて覇者となった。しかし、彼の死後は国力が振るわず、しかも後には、陳からの亡命貴族である田氏に実権を奪われ、前三八六年には田和によって姜姓の斉は滅ぼされた。これ以後の斉を一般的に田斉と呼ぶ。田斉は戦国の七雄の一つとして活躍し、特に威王・宣王の時期（前四世紀末）に繁栄をするが、後しだいに衰え、前二二一年、秦の始皇帝に滅ぼされた。

3孤　私。諸侯の謙称。「寡徳曰レ孤」ことから「徳の寡ない者」という意味。「寡人」ともいう。

4報　仕返しをする。報復する。あだを討つ。復讐する。

4誠　ぜひとも。本当に。実に。

5与共国　「与」の後ろに「賢士」が省略されている形。「与二賢士一共レ国」（賢士と一緒に国を治め）の意。

5雪二先王之恥一　先代の王の恥をそそぐ。「雪」は、拭う。洗い清める。「先王」は、斉に殺された昭王の父、燕王噲のこと。「恥」は、斉に燕が完膚なきまでに打ち破られたこと。「指導上の注意点」参照。

6可者　適当な人物。これはよいと思う者。

6得二身事一之。　私自らその方を師として（敬い）仕えたい。「得」は「〜したい」という願望の気持ちを表す。「身」は自ら、自分自身。「事」は師として仕える。「之」は「可者」を指す。

7千金　金千斤。一斤は約一一〇グラム。

7使三涓人求二千里馬一　千金を持たせて涓人に一日に千里を走る名馬を（買い）求めさせたことがありました。「涓人」は君主のそば近くに仕え、日常の世話をする者。また、取り次ぎなども行う。「千里馬」は一日に千里を走る名馬。駿馬。当時の「一里」は、約四〇五メートル。古来、才能のある者のたとえに用いられる。「使」は「使二AB一」（AヲシテBセシム）は、AにBさせる。使役形。後出「句法」参照。

8死馬且買レ之、況生者乎。　死んだ名馬の骨でさえ（高い値で）買ったのですから、まして生きている名馬ならなおさら（もっと高い値で買ってくれると人々は考える）でしょう。「死馬」は、死んだ名馬。「A且B、況C乎」（Aスラ且ツB、況ンヤCヲヤ）は抑揚形。Aでさえもである、ましてCはなおさらである、とAを抑えて、Cを強調する句法。後出「句法」参照。

馬」（一三四ページ8行目）とは、それぞれどういうことを指すか。

答　「千里馬」は「賢人・賢者」であり、「死馬」は「郭隗」である。

問　「死馬且買レ之（スラヲツカフ）」（8行目）の意味と表現について説明せよ。

答　「死んだ馬でさえ買った」の意。「且」は「…（スラ）かツ」と読み、軽いものを挙げ、次に重いものを導き出す表現。

●一三五ページ

問　「況生者乎（ヤ）。」（1行目）の意味と句法を説明せよ。

答　「まして生きているものなら（もっといい値で）買ってくれるでしょう。」の意。「況…乎」は「いはンヤ…（ヲ）や」と読み、「まして…は言うまでもない。」の意。

問　「欲レ致レ士（セバサントヲ）」（2行目）とは、どういう意味か。

答　立派な人材を招こうとするなら、の意。

問　◉「先従レ隗始（ブリメヨ）。」（2行目）とは、誰が誰に何を求めたのか。

答　郭隗は昭王に自分のことを賢者として登用することを求めた。

補　「言語活動」解答例参照。

問　「豈遠（ニーセン）ニ千里（ヲ）一哉。」（3行目）は反語形であるが、普通の言い方で訳すとどうなるか。

答　千里の道を遠しとしない。

問　昭王が郭隗のために邸宅を新しく築いて、彼に師事した効果とはどのようなものか。

答　昭王が、郭隗のために邸宅を新しく築いて師事するという話題性のあるアピールをすることによって期待できる効果は、二つ考えられる。①このアピールによって、有能な人材を求める本気度を「戦国の説客」に対して示すことができるという効果が期待できる。さらに、②郭隗くらいでも登用したという話題性のあるアピールによって、自分も必ず昭王に登用されるはずだと考える「戦国の説客」の心を動かすことができるという効果が期待できる。結果、①②のアピールの効果によって、昭王のもとに多くの説客が集まることとなった。

補　「言語活動の解答例」参照。

問　「先従レ隗始（ブリメヨ）。」（2行目）について、⑴本来の意味、⑵現在、一般に使われている意味、を述べよ。

答　⑴賢者を招くには、まず私のような劣った者から重く用いなさい。
⑵まず言い出しっぺの君からやりなさい。
（手近なことから始めなさい。）

●一三五ページ

1期年　「期」は本来、月が一巡することを表し、一か月の意。転じて一定の時を表すようになった。「期年」は、まる一年。「期月」は、まる一か月。

2致レ士　優れた人物を招く。「致」は、まねく。あるものをそこに持っていく。「士」は賢士。優れた人物。賢者。

2況賢ニ於各隗一者、豈遠ニ千里一哉　「況…乎」の抑揚形と「豈…哉」の反語形が重なった形。後出「句法」参照。「況賢ニ於各隗一者」の上に「隗且用レ之」（隗すら且つ之を用ゐる＝郭隗でさえ登用したのだ）が省略されている。

キー・ポイント　反語の表現　「十八史略」は「豈遠二千里一哉。」と郭隗の言葉を反語形を用いて表現している。反語形は文意を強めるための強調表現であるから、ここは、「賢士は必ずどのように遠くからでもやって来る。」という郭隗の強い自信を表現したものと考えられる。結果、言葉どおり多くの賢士が先を争って燕にやって来た。郭隗は、有能な「戦国の説客」の心理を熟知していたからこそ、このように言えたのである。これは、文面には出てこない

が、郭隗は時代の風潮を鋭く分析する知見があったことを物語っている。

4 於是　こうして。そこで。それまでの記述を「こうして」と受けて、以下にある結末を述べる。

4 宮　邸宅。屋敷。古くは貴賤の別なく住居を宮といった。ここは、郭隗のために築いたのであるから、大きな建物であろう。

4 士争趨燕　「趨」は貴人の前を腰をかがめて早足に通り過ぎること。ここでは、駆けつけるの意。魏から楽毅（将軍。昭王は彼を亜卿として実権を与え、後に彼を使って、斉に対する復讐に成功する）、斉から陰陽五行説で有名な鄒衍、趙から劇辛が来た。「史記」孟子荀卿列伝によると、鄒衍が来たときには、昭王は自ら箒を取って道を清め、邸宅を新しく築いて師事したという。

句法

使二涓人求一二千里馬一　「使AB」（AにBさせる）の意の使役形。

死馬且買レ之、況生者乎。　「A且B、況C乎」（Aでさえも Bである、ましてCはなおさらである。）の意の抑揚形。

況賢二於隗一者、豈遠二千里一哉。　「況…乎」の抑揚形と「豈…哉」の反語形が重なった形。「況」の関係する範囲は「賢二於隗一者」までである。下に反語の文が続いているため、途中で、呼応すべき「ヲヤ」が消えてしまった形。「ましてこの（郭）隗より賢い人は、どうして千里の道のりを遠いと思いましょうか。（いや、遠いと思わず必ずやってくるでしょう。）」の意。

解説

戦国時代の概略

戦国時代になると、鉄製農具の相当な普及と農業技術の進歩による生産力の著しい増大、さらに、大規模な治水や灌漑工事、これらによって広大な土地が新たに開墾されるようになった。それまで氏族制の下で公田耕作という名の奴隷労働に従事していた農民たちは、氏族の束縛を離れてこの新しく開墾した土地を私有あるいは租借して耕作し始めたのである。その結果、諸侯は公田を開放したり、大夫などの私有財産を大幅に認めざるを得なくなってしまった。それは、諸侯・卿・大夫・士という封建的な身分秩序が崩壊していくことを意味するのと同時に、上も下も互いに利を求め激しく争い合う下剋上の世の中になっていくことも意味している。春秋時代から進んでいたこの弱肉強食の時代傾向は、この時代になるとさらに激しさを増し、諸侯の中にはその実権を大夫などに奪われる者もあった。春秋時代には、まだ西周の名目的な権威が残っており覇者の主宰する会議によって一応の秩序は保たれていたが、独立国の実質を備えた国はそれでも十四を数えた。諸侯を統率する覇者がなくなり、完全に力と力の闘いとなった戦国時代には、燕・趙・韓・魏・斉・楚・秦のいわゆる「戦国の七雄」と、僅かに生存する宋・魯・衛などの弱小国のみに淘汰され、西周はただ洛陽付近を領する一諸侯に成り下がってしまった。そして、これら生き残った諸侯たちは、他国との侵略戦争に勝つために富国強兵と中央集権の確立の必要性に迫られ、そのため、氏

族制に固執する旧勢力の排除と、新開墾地ばかりでなく卿・大夫の領地までも直轄地に組み入れていくこととなった。また、農民の支配形態も、氏族を媒体とするものから、「法」による直接的、画一的な統治へと変化した。

このような時代の変化は政治上では、君権の強化を目的とする諸侯と、世襲の特権を温存しながら自己の実力強化を図る貴族勢力との対立として現れ、しばしば内紛へと発展していった。

そこで、諸侯はこれらを制圧し強力な中央集権を確立するために自らの手足となって働く官僚を重用し、国内を直接統治する郡県制度を導入するなどの行政制度の整備に努めた。この新勢力の中心となった官僚の多くは世襲貴族ではなく、支配階級の最下層にあった「士」階級に属する人々であった。彼らは自国の君主だけでなく、自分を認め登用してくれる君主があれば遠い他国へも出かけていった。これがいわゆる「戦国の説客」たちであり、その中から「諸子百家」と呼ばれるさまざまな思想家たちが生まれ活躍した。「史記」はその主なものを六つに分類している。

儒家（孔子・孟子・荀子）、墨家（墨翟）、道家（老子・荘子・列子）、法家（管仲・韓非）、名家（恵施・公孫竜）、陰陽家（鄒衍）、

このほか縦横家（蘇秦・張儀）、農家（許行）、兵家（孫子・呉子・楽毅）、雑家、小説家などがある。

戦国時代という名称は、戦乱が続いたから、あるいは、この時代の十二の諸国の事跡や遊説の士の言説・外交の駆け引きなどの大半を国別に記した「戦国策」という書名によるものとする。

参考

昭王が即位するまでの経緯については、「史記」燕召公世家、楽毅については「史記」楽毅列伝が参考になる。そして燕と斉との対立抗争の話は、「史記」田単列伝まで続くことになる。また、斉の燕侵攻については孟子がかかわっていたことが、「孟子」梁恵王下篇に記されている。これは燕に大勝した後、これを合併すべきか否かについての孟子の考え方を述べたものであるが、「史記」燕召公世家には、侵攻の前に「今伐レ燕、此文武之時、不レ可レ失矣。」と述べたことになっている。

参考までに、「史記」楽毅列伝の一節を掲載しておく。

[本文]

楽毅者、其先祖曰二楽羊一。楽羊為二魏文侯将一、伐取二中山一。魏文侯封二楽羊一以二霊寿一。…（中略）…封二楽毅於昌国一、号為二昌国君一。於レ是燕昭王収二斉歯獲一以帰。而使二楽毅復以レ兵平二斉城之不レ下者一。

[書き下し文]

楽毅は、其の先祖を楽羊と曰ふ。楽羊、魏の文侯の将と為り、伐ちて中山を取る。魏の文候楽羊を封ずるに霊寿を以てす。…（中略）…楽毅を昌国に封じ、号して昌国君と為す。是に於て燕の昭王斉の歯獲を収め以て帰る。而うして楽毅をして復た兵を以ゐて斉の城の下らざる者を平らげしむ。

[現代語訳]

楽毅は、その先祖を楽羊と言った。楽羊は魏の文候の将軍となり、中山国を攻め敗った。魏の文候は楽羊に霊寿の地を領地とし

て与えた。…（中略）…楽毅を昌国に封じ、昌国君を号したのである。そして燕の昭王は斉からの戦利品を取りおさめて帰って行った。楽毅には再び軍勢を率いて斉の城市で降伏せぬものを平定させた。

《板書例》

■昭王のものの見方・考え方を、本文に即してまとめてみよう。（学習のポイント1）

▼話し合うポイント▲

①昭王は燕をどのような立場・視点からものを見ていたか。

②昭王は燕の現状改革のために必要な政策は何だと考えていたか。

全段落

《①昭王の立場・視点とは？》

・立場→**燕の君主**

・視点→**君主という視点**から自国（燕）の政治状況を把握

《②昭王の考える現状改革のために必要な政策とは？》

《㊟昭王は燕に対してどのような**現状認識**であったか？》

・燕が**弱小国**であることを君主の視点で理解―「燕**小**」

・燕が**乱れている**ことを君主の視点で理解―「孤之国**乱**」

・他国からの侵略を受けていることを君主の視点で理解―「斉因二孤之国乱一、而襲破レ燕。」

《㊟昭王の願いとは？》

・昭王が望んでいること―「**雪二先王之恥一**、孤之**願**也。」

《㊟昭王のいう燕の**現状改革**のための策とは？》

・**富国強兵策**……経済発展を図り、軍事力を強化する政策。

《㊟富国強兵策を実施するのために必要なことは何か？》

・**有能な人材の登用**――「以招二**賢者**一」

「得二**賢士**一与共レ国」

「今王必欲レ致レ**士**」

《㊟どのような人材招致策を実行したか？》

・郭隗の助言を取り入れる。

―「於レ是、昭王**為レ隗改二築宮一、師二事之一**。」

まとめ

昭王は**君主の立場・視点**から、燕を強国にするためには**富国強兵策**が重要だという認識のもと、その政策実行の手助けをする**「有能な人材」を登用したい**と考えた。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　昭王のものの見方や考え方を、本文に即してまとめてみよう。

【答】「昭王」は、「王（君主）」という視点からものを見ているし、考えている。そして、その視点の目指すものは、昭王が「斉因二孤之国乱一、而襲破レ燕。孤極知二燕小不レ足二以報一。」（P一三四・3～4行目）というように、弱小燕国を強国にして斉に報復するための富国強兵にあるといえよう。また、富国強兵に必要な有能な人材の登用についても「以招二賢者一。」（P一三四・3行目）、「得二賢士一共レ国」（P一三四・3～4行目）、「今王必欲レ致レ士」（P一三五・2行目）とあり、これらの言葉もその視点からの発言であることは読み取れよう。昭王は、王（君主）として、富国強兵を目指して、ものを考えものを見ていると言えよう。

▼ポイント▲　「昭王」は「王（君主）」という視点からものを見たり考えたりしているということと、それが富国強兵につながっていることに気付かせることが大事。「本文に即して」とあるのでその根拠となる本文を示しながら、昭王のものの見方や考え方を説明させたい。昭王の言葉をこのような視点から吟味してみると、その意味するところが理解しやすくなる。また、よき人材は富国強兵策のためであり、富国強兵策は国を強くするためである。国を強くするための基本が人材招致にあるという考えは、当時の「王」（諸侯たち）の共通する考え方であり、このような時代風潮の中で「先従隗始」という逸話が生まれたことも理解させたい。「解説―戦国時代の概略―」参照。

言葉と表現の解答例

1　「先従（ゾリ）レ隗始（メヨ）」の本来の意味と、現在使われている意味の違いを調べてみよう。

【答】「先レ従レ隗始」は、本来、「賢者を招くには、まず自分のような愚かな者を優遇せよ。」という意味であったが、現在の日本ではその意味が転じて「何かを行う場合、まず言い出した人から始めなさい。」と使われている。

▼ポイント▲　国語辞書・漢和辞典やインターネット、図書館にある参考資料などを用いて調べさせる。

言語活動の解答例

1　郭隗の弁舌の巧みさはどこにあるか、話し合ってみよう。

【答】「郭隗」の「弁舌の巧みさ」とは、昭王の共感を得るための巧みな話しぶりにある。そこで、どのようにして、納得や共感を手に入れたか分析してみる。

「郭隗」は、富国強兵に必要な人材招致策の諮問を受けたとき、「死んだ名馬の骨に大金五百金を払って、一日に千里を走る天下の名馬を首尾よく三頭も手に入れることができた」という「古之君」の話を持ち出して（①「事実」）興味を持たせ、その上で、実行しやすい人材招致策（②「具体例」）を示し、その策を受け入れるよう説得する。結果、「昭王」はこの説得に共感し納得し、人材招致策を受け入れることになる。つまり、この話の「弁舌の巧みさ」は、①成功した「事実」に基づく話で昭王に興味を持たせて共感を得るための下地を作ったことと、②実行しやすい人材招致策の「具体例」を示し、共感を得たことにあるといえよう。もう少し言うなら、①の「事実」が最大の説得力を持つことは事実で、それを知って話題に用いているところに「弁舌の巧みさ」があると考えられる。②は、近くにいる自分（郭隗）を登用することから始めればよいという、実行しやすい「具体例＝人材招致策」を提示している。「具体例＝人材招致策」は、適切でわかりやすく実行しやすければしやすいほど聞き入れられやすく共感も得やすい。それを知って説得をするところに「弁舌の巧みさ」があるといえよう。さらに、この弁舌によって郭隗は、自分自身の利益をも得ている。優秀な人材を集める方法を提案するという体裁をとって、自分自身を重用させることにも成功しているのだ。

結果、昭王は郭隗の巧みな説得により、「改㆓築宮一、師㆓事之一」という具体的な行為をし、郭隗であろうとも登用するという自分（昭王）の人材登用の本気度を「説客」に示した。すると、その具体的行為に説得された「戦国の説客」たちは「士争趨燕」となった。

▼ポイント▲　ここは、グループや隣同士で、その巧みさについて話し合わせ、他の人の様々な意見や視点を聞かせ、自分の意見を作り上げさせる活動が大事となろう。そのグループでまとめた意見は、必ず全体に発表させる。その際、自グループでまとめた意見に対する他のグループからの質問や意見が出ると授業は活発化するし、深化する。

さて、指導者はこの活動の前に、場合によっては、話し合うポイントを指示してもよい。それは以下のような助言となろう。「『弁舌の巧みさ』とは、相手の共感を得るための巧みな話しぶり（説得の話術）ということ。どのような話しぶりによって、共感を得たか。」など。

（前田　康晴）

鶏口牛後

要旨

戦国の世、超大国となった秦は絶えず他の諸侯を脅かしていた。そこで生き残りをかけた六国は、蘇秦の提唱する「合従策」に理解を示し同盟することとなる。その時、蘇秦が説得に用いた鄙諺が「鶏口牛後」であった。

構成

全一段落。

訓読と現代語訳

①秦人諸侯を恐喝して、地を割かんことを求む。②洛陽の人蘇秦なるもの有り。③秦の恵王に遊説して用ゐられず。④乃ち往きて燕の文侯に説き、趙と従親せしむ。⑤燕之に資し、以て趙に至らしむ。⑥粛侯に説きて曰はく、「諸侯の卒、秦に十倍す。力を并せて西に向かはば、秦必ず破れん。大王の為に計るに、六国従親して、以て秦を擯くるに若くは莫し。」と。⑦粛侯乃ち之に資し、以て諸侯に約せしむ。⑧蘇秦鄙諺を以て諸侯に説きて曰はく、「寧ろ鶏口と為るとも、牛後と為ること無かれ。」と。⑨是に於いて六国従合す。

①秦王は諸侯をおどして、領土を割譲することを要求した。②（この頃）洛陽出身の人で蘇秦というものがいた。③（初めは）秦の恵王のところに行って（自らの策を）説いたが採用されなかった。④そこで（次に）燕の文侯のところに行って（自らの策を）説き（勧めて）、趙と南北に同盟を結ばせようとした。⑤燕（の文侯）は（その意見に賛成して）蘇秦に（遊説の）資金を与えて、趙に行かせた。⑥（蘇秦がその趙の）粛侯に説いて言った、「諸侯の兵士（の数）は、秦の十倍もおります。（諸侯が）力を合わせてもし西（の秦）に立ち向かったならば、秦はきっと破れるでしょう。大王様のために（策を）立ててみますと、六国が南北同盟を結んで、秦を（押し出して）のけ者にするのにまさるものはない（と思われます）。」と。⑦粛侯はそこで蘇秦に（六国連盟を成立させるのに必要な）資金を与え、諸侯に同盟を結ばせた。⑧蘇秦は（説得するときに）世間で言い習わされていることわざを引用して諸侯に説いて言った、「どちらかと言えば鶏のくちばしになっても、牛の尻になってはなりません。」と。⑨こうして六国は南北に同盟し（秦に対抗することとなった）。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶「春秋戦国時代」「戦国の七雄」「諸子百家」の概略と「合従連衡」の言葉の意味・その策の概略とを辞書・インターネット・資料集などを利用して調べる。知技(2)イ

〔学習のポイント〕1・〔言葉と表現〕1

❶多くの項目を調べなければならないが、多大な時間を費やすことができないので、グループでそれぞれの項目を分担し、辞書・インターネット・資料集で調べさせ、それをプリントなどにして発表させるのがよい。また、「戦国の七雄」の解説は、「先従隗始」のとき配布した「戦国時代」の概略プリントの中に記述されているのを用いてもよい。（「先従隗始」「解説ー戦国時代の概略ー」参照。）以下、それぞれの項目について、簡略にポイントのみを記す。プリント作成の参考にして欲しい。

○**春秋戦国時代の概略**

・**春秋時代**＝周室の支配力が次第に衰え、諸侯が覇者になり武力をもって天下に号令するようになり、列国が富強を争った時代。特に、「春秋の五覇」は有名。

・**戦国時代**＝周室の支配力は完全に衰え、諸侯の勢力が強大になり、全期間を通して群雄割拠の戦乱（弱肉強食・下剋上）の時代となり、「**戦国の七雄**」（燕・斉・趙・韓・魏・秦・楚）が争う世となった。「戦国の七雄」はそれぞれが改革を行い、国力を充実させて周囲の小国を併呑し、勢力を拡大していく。また、この時代は、農業や工業が発展し、文化的にも「諸子百家」が活躍し、多くの思想が花開いた。

・**諸子百家**＝春秋時代の末から戦国時代にかけて、周王朝の権威が衰え、言論思想の発表が自由になると、多くの思想家が現れ、いろいろな学説を発表した。最も古いのは儒家で、仁を説く孔子に始まり、孟子・荀子らによって継承され、支配階層の政治道徳として発展していった。また、博愛主義を説く墨家、無為自然を尊ぶ道家（老子・荘子など）、刑名法術により天下を治めようとする法家（韓非子・李斯など）、一種の論理学派といえる名家、政治的な外交政略を説く縦横家、さらには農家・雑家・小説家などの、多数の学派があった。（詳細は、「学習のポイントの解答例」❶参照）

【評価】「春秋戦国時代」「戦国の七雄」「諸子百家」の概略と「合従連衡」の言葉の意味・その策の概略などの、歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶本文を黙読する。その後、範読を聞く。
❷一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。
❸「鶏口牛後」の意味を調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめ、発表する。〔**言葉と表現**　1〕
❹現代語訳をする。知技(2)ウ
❺内容読解をする。

❶範読はゆっくり丁寧に読む。
【注意させる読みの箇所】「求レ割レ地。」「不レ用。」「従親」「至レ趙。」「莫レ若二六国従親、以退擯一レ秦。」「寧為二鶏口一、無レ為二牛後一。」
❷大きな声で読むよう指導する。
❸辞書で調べた「鶏口牛後」の意味を参考に、要旨をノートにまとめ、発表させる（五十字程度）。黒板に板書させてもよいし、口頭で発表させてもよい。
❹生徒数名を指名し、現代語訳させる。難解な箇所については、生徒の発表状況を見て指導者が補足する。
【注意すべき句形】「不レ用。」（受身）「説…、従親。」（使役）「…至レ趙。…約二諸侯一。」（使役）「西向」（仮定）「莫レ若…」（比較）「寧～無レ…」（選択）
【注意すべき語句】「求レ割レ地。」「従親」「卒」「従合」
【評価】【注意すべき語句】【注意すべき句形】を正確に現代語訳できているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。
❺次の**ア**～**ウ**のポイントに注意する。**ア**「遊説」とは、どのようなことをするのか、**イ**「西向」とは、具体的にどのようにすることか、**ウ**「鶏口」と「牛後」が指す具体的な内容。それぞれグループで話し合い、代表者が発表してもよい。
ア…「遊説」の意味を辞書やインターネットで調べ、説明させる。その際、この行為の主体は、「諸子」で、その「諸子」が自説を諸侯に説いて回り、大いに活躍していたことにも気づかせたい。まさに「百家争鳴」の時代であったことを表現する言葉なのだ。
イ…「P一三六『戦国時代要図』を参考にして、六国の西の方向に、何という国があるか。蘇秦は、その国と六国がどのような関係にあった方がよいと考えているか。『向』の意味に注意する。」という助言を与えるのはよい。
ウ…本文に即して、グループで丁寧に吟味させる。

■ まとめ

学習活動のポイント

❶ 蘇秦の説得の巧みさはどこにあるかをグループで話し合い、代表が発表する。思判表B⑴ア 主態〔「言語活動」1〕

❷ ❶で発表した自グループの考えについて、他グループからの質問を受け、それに対する返答のための検討をする。また、返答の仕方も工夫する。

❸「寧ろ」を用いた短文を作り、グループ内で発表し合う。知技⑴ウ〔「言葉と表現」2〕

❹ まとめの朗読をする。

❶「次に述べる二点から、蘇秦の説得の巧みさを話し合ってみよう。①六国の諸侯たちのどのような気持ちを利用したところに巧みさがあるか。②六国の諸侯たちのどのような時代気風・時代風潮を利用したところに巧みさがあるか。」という助言を与え、グループで話し合わせる。

【評価】・蘇秦の説得の巧みさについて、本文の内容をもとに的確に捉えているか、話し合いの観察などにより確認する。・蘇秦の説得の巧みさついて、グループ内で主体的な態度で話し合い、また、自分の考えをグループ内の他者に分かりやすく伝えようとしているか、分析する。

❷ 他グループの質問や意見を十分に検討させることは、生徒たちに考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。そこで、指導者は「他グループの発表を聞きながら、各グループはその理解に対する疑問点・質問や意見を考え、メモしておくこと。後ほど、それに対する話し合いをします。」という注意を与える。生徒が考えを深めるためには、他からの意見と自分たちの考えを検討するという「言語活動」が大事となる。

❸ グループ内で、それぞれが作った「寧ろ」を用いた短文を発表させる。

(例)「彼は天才というより寧ろ努力家だ。」「そんなものは寧ろないほうがましだ。」など。

【評価】 本文の例を意識して「寧ろ」を用いた短文を作り、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

❹ 大きな声で各文の意味を考えながら、音読させる。

発問例

●一三六ページ

問　**「秦人」（２行目）は、単なる「秦の人」もしくは「秦人」と称する人がいたのではない。ここでは、実際には何を意味しているか。**

答　「秦王」もしくは「秦国」。

補　語注「１秦人」を確認させる。

問　**「求レ割レ地」（３行目）とは、どのような意味か。**

答　領土（の一部）を割譲することを要求する。

問　**「遊説」（４行目）について、**

①　**どのようなことをするのか。**

②　**「遊」「説」のそれぞれの意味、及び「遊説」で認められるとどうなるのか。**

答　①諸国を巡って、諸侯に自分の意見・政策の正当性を説得する。

②「遊」は旅行の意で、他国に出かけて行くこと。

「説」は人に自分の意見を説いて従わせること。

諸侯に意見を説いて採用されると、衣食の費用が給せられ、また仕官がかなうなど、立身出世して富貴になることもあった。

補　①「遊説」という行為が自説を「説く」と「喝」は「嚇」（おどす）と同じで、「脅嚇」ともいう。

語句の研究

●一三六ページ

2秦人　ここでは秦王の意。戦国時代（「先従レ隗始」「解説」Ⅰ参照）中期、秦の孝公（前三六一年～前三三八年在位）は、法家の商鞅（しょうおう）を登用すると、彼の改革政策と信賞必罰による厳格な法治主義を用いて、富国強兵の実をあげ、強力な中央集権体制を確立した。このように国力が増大すると、戦国の七雄（「先従レ隗始」「解説」Ⅰ参照）随一の強国となり勢力を誇った。この孝公を継いだのが恵王（後出「秦恵王」参照）で、そのときに蘇秦は活躍するのである。

「秦」は現在の甘粛省、陝西（せんせい）省西部にまたがった地域に居住した西戎（せいじゅう）出身の遊牧民で、西方に偏在したため東方諸国からは野蛮な国と見られていた。そのため、侮蔑の意味を込めて「王」と記さず「人」として軽んじたのである。また、ここを「秦の国」とも考えられる。それは国名の次にくる「人」は「ヒト」と読み、「…の国・…の国の人」とするからである。

2恐喝　おどす。ここは軍事力で脅迫し威圧すること。「恐」は「脅」（おどしつける）、「喝」は「嚇」（おどす）と同じで、「脅嚇」ともいう。

2諸侯　もと周王朝の封建制のもとで設けられた「公・侯・伯・子・男」という五階級の第二番目の爵位。ここでは、秦に圧迫された六国（燕・趙・韓・魏・斉・楚）のこと。

3割レ地　領土の一部を割き譲り与える、割譲すること。「割」はわる・さく。「地」は領土・国土。

3洛陽　地名。東周の都。現在の河南省洛陽市。洛水（陝西省に発し洛陽の辺りを過ぎて黄河に注ぐ川）の陽（北岸）に位置しているのでいう。（太陽の光を受ける所が陽で、受けない所が陰である。川の場合、北側が陽、南側が陰。山の場合、南側が陽、北側が陰。陽はひなた、陰はひかげ。）周代は洛邑といい、武王がここを東都とし、周の平王の東遷（前七〇年）後、都となった。

4蘇秦　生年未詳～前三一七年。戦国時代の遊説家。「史記」蘇秦列伝によると、「初め鬼谷先生を師とし、権謀術数や雄弁の術を学んで数年間天下を遊説した。しかし、その策は用いられず、困窮して家に帰り、妻・兄嫁などに嘲笑され発奮し、部屋に閉じこもって書を読み、「周書陰符」（兵書）

いう意味と同時に、「諸子百家」が自説を諸侯に「説得」して回り、大いに活躍していたという時代風潮を暗示していることにも気づかせたい。

問 **[従親(ジュウシン)]（6行目）について、**
[中]具体的にはどうすることか。
[中]その目的は何か。

答 2 1
1（燕・趙（・斉・楚・韓・魏）を）南北に同盟させること。
2同盟を結んで大国秦に対抗すること。

問 **「資レ之」（6行目）とはどういうことか。**

答 燕の文侯が蘇秦の合従策に賛成し、趙の粛侯と交渉させるための旅費や遊説に必要な資金を与えたこと。

補 語注「8資之」を確認させる。

問 **「西向(ニシカバ)」（9行目）について、**
[中]具体的にどのようにすることか。
[難]なぜ「西」という方角が示してあるのか。

答 2 1
1西の秦に立ち向かうこと。（西の秦に敵対すること。）
2秦の国は函谷関以西にあり、六国側から見ると西の方向にあるから。

補 1「六国の西の方向にどの国があるか。蘇秦は六国はどのような関係にあったほうがよいと言っているか。」というヒントを与えるのはよい。

問 **「計(ルニ)」（10行目）の「計」の意味を次の中から、揣摩(シマ)の術（他人の気持ちを推し量り、我が嚢中に導入する術）を案出し、再び天下を遊説した。まず、周の顕王に国家経営の策を、次に秦の恵王に富国強兵の策を説いたが用いられなかった。そこで、趙に行き、合従の策を説くがまた用いられず、燕に行き、一年余りたって文侯に会い、合従の策を説いて用いられた。そこで文侯から金品の援助を受けて、再び趙の粛侯に合従して秦にあたるべきことを説いた。この策を受け入れた粛侯の後援のもとに、韓・魏・斉・楚に説き、六国を合従させることに成功した（前三三年）」とある。

4遊説　諸国を巡って、諸侯に自分の意見・政策の正当性を説得する。「遊」は修学・見物・仕官のため他国に出ていく。「説」は人に説いて自分の意見に従わせる。この場合、訓読の伝統として、音は「ゼイ」。

4秦恵王　前三三七年～前三一〇年在位。秦の孝公（前出「秦人」参照）の子。即位してまもなく孝公を補佐した商鞅を謀反の罪で誅した。即位後十三年（前三五年）で、秦は従来の「公」の称号をすてて「王」を称した。これより二年後、韓・燕も「王」を僭称し、全く天下は乱れた。「戦国策」秦策に詳しい。

5不レ用　「史記」蘇秦列伝によると、「秦ではちょうど商鞅を処刑したばかりのときで、遊説の士を憎み、蘇秦を任用しなかった。」とある。「用」は有能なるものとして登用する。ここの主語は、蘇秦なので文脈上から受身に読む。「ら」は受身の助動詞「る」の未然形（後出「句法」参照）。

5乃　そこで。時間の経過を表す。

5説二燕文侯一、与レ趙従親　ここは、使役を暗示する動詞「説」があるので、下の句を「従親せしむ」と使役に読む。「説」の主語は蘇秦（後出「句法」参照）。「与」は、返読文字。「と」と読む。並列と従属の意味がある。ここは、Withの意味を表す。いわゆる従属の用法。「燕」は、戦国の七雄の一つ。現在の河北省地方にあり、薊(ケイ)（現在の北京市の北西）に都があった。西周創業の功臣である召公奭(セキ)（成王を周公旦とともに補佐する。人望が厚かったので召伯ともいう。）が封ぜられた国。「燕文侯」は、前三六一年～前三三三年在位。桓公の子で、文公ともいう。「趙」は戦国の七雄の一つ。晋を権臣の趙氏が韓氏・魏氏とともに三分して建てた国。現在の山西省東部・河北省

ら選べ。

(ア)計算する　(イ)決算する　(ウ)計画する
(エ)計上する　(オ)処置する

答　(ウ)

●二三七ページ

問　**「莫レ若」（1行目）は「A莫レ若B」という比較形で、次のような意味である。本文ではAに該当する言葉が省略されているが、A・Bに該当する内容は何か。**

（　A　）よりも（　B　）にまさるものはない。

答　A趙一国の力で大国秦に対抗する
B六国が南北に同盟して秦に対抗し、秦を退ける

問　**「寧為二鶏口一、無レ為二牛後一。」（2行目）について、**

1 **[中]「寧」の用法・意味は何か。**
2 **[中]「鶏口」「牛後」の元来の意味（原義）は何か。**
3 **[難]「鶏口」「牛後」は、それぞれ、何を例えたものか。**
4 **[難]言葉で蘇秦が言いたかったのは具体的にどのようなことか。**
5 **[難]この言葉は、「鶏口」と「牛後」の本来的な意味の際立った対比において強い説得力を発揮した。どのような意味の対比か。**

答　1選択・比較を表す副詞。「どちらかと言

南部・河南省黄河以北の地で、邯鄲（現在の河北省邯鄲市）に都した。「従親」は「従に親しむ」の意で、南北に同盟を結ぶこと。「従」は「縦」と同じでたてに伸びた線、南北のこと。ここの、北方の燕と南方の趙とが同盟するということは六国が同盟して秦に対抗することをいう。「従合」・「合従」ともいう。「合従」の対は「連衡（横）」。張儀の説。六国が東西（横）に連なって秦に仕える。

6 資レ之　「資」は、金品などを与えて援助する。ここでは、遊説の資金を与えること。主語は燕王。「史記」蘇秦列伝には、「蘇秦に車馬金帛を資し以て趙に至らしむ」とある。

7 粛侯　趙の第五代の王。前三四九年～前三二四年在位。成王の子。

8 諸侯之卒　六国の諸侯の兵士。「卒」は下級の兵士。

9 西向　「西」は秦のこと。秦は、現在の陝西省の地にあたり、函谷関以西にあった。そのため六国からみると西方であるから「西」という。「向」は、立ち向かう、刃向かう、敵対するの意。

10 必破矣　「矣」は、断定・強調の語気を表す文末の助字。

●二三七ページ

1 莫レ若二六国従親一、以擯レ秦　「莫若…」は、「…に若くは莫し」と読み、「…にまさるものはない・…に及ぶものはない」の意。「若」は及ぶ。優劣を比較し最上のものを取り出すときの句法。最上級の比較の表現。「六国」は燕・趙・韓・魏・斉・楚。「擯」は、（押し出して）のけ者にする。しりぞける、擯斥する。「斥」・「棄」と同じ。

2 鄙諺　世間で言い習わされていることわざ。ここでは次に出てくる「寧為二鶏口一、無レ為二牛後一」を指す。

2 寧為二鶏口一、無レ為二牛後一　「寧…」は、「どちらかと言えば…のほうが望ましい」の意。二つの事柄を比較して、その一つを選択する表現。「鶏・牛」は大・小、「口・後」は貴・賤の比喩で、「鶏口」は小国（六国それぞれ）の君主を例え、「牛後」は大国（秦）の臣下を例える。「史記正義」には「鶏口は小なりと雖も、猶ほ食を進む。牛後は大なりと雖も、乃ち糞を出だすなり。」とある。小国の君主になるのはよいが、大国の臣下にはなるなという意から、後世は一般に「独立を重んじよ」という意味に用いられる。

えば…のほうが望ましい」の意。
[2]「鶏口」＝鶏のくちばし。
「牛後」＝牛の尻または牛の尻の穴。
[3]「鶏口」＝小さくても独立した国の君主。
「牛後」＝大国秦などの臣下。
[4]小国の王となっても、大国の家臣になってはならないということ。
[5]「鶏口」は、小さくても「きれい」で「独立」かつ「誇り」あるもの、「牛後」は、大きくても「汚い」もので、「束縛」された「屈辱的」なもの、という対比。

問 [1] **[於レ是六国従合。]（3行目）について、[中]「従合」と同義の語を本文中より二例あげよ。**

[2] **[中]「六国従合」までの蘇秦の遊説順を次の図で示せ。**

〈秦〉→（　①　）→（　②　）→〔韓・魏・斉・楚〕

答 [1]合従・従親
[2]①燕　②趙

問 **「合従策」が成立した理由としてどのようなことが考えられるか、次の二点を基にして述べよ。**
(1)当時の六国と秦との関係
(2)当時の各国の君主の時代精神

答 (1)「秦人恐ヨ喝諸侯ヘ、求レ割レ地。」とあることから、超大国の秦から六国はおどされ、領土の割譲を求められ、圧迫されており、六国は更なる圧迫・侵略を恐れ、それから逃れる最良の方策として合従策を受け入れた。
(2)蘇秦が用いた「寧為ニ鶏口一、無レ為ニ牛後一。」ということわざには六国の君主それぞれが持っていた、当時の時代精神ともいうべき自尊心・独立心・名誉心をくすぐり強調する効果があり、それによって「合従策」が君主たちの納得・賛同を得ることができた。

問 **蘇秦のような遊説家が活躍したのはどのような時代であったか、簡潔にまとめなさい。**

答 個人も国家も実力のみを頼りとする戦国の乱世であり、群雄割拠。人もまた、雄弁詭弁で世を渡ることの可能な時代であった。

一説に、「後」は「后」の意で尻の穴の意ともいわれる。また、「戦国策」の「寧為ニ鶏尸一、不レ為ニ牛従一。」の注の「尸鶏中主也。従謂ニ牛子一。」を引いて、「鶏仲間の大将になってもよいから、親牛の後にぞろぞろついて行く子牛にはなるな。」という解釈もある（「史記索隠」）。この解釈に従っても、蘇秦の意図は同じである。

3 於レ是　こうして。そこで。「ここニおイテ」と読む。

3 六国従合　「従親」と同じ。趙の粛侯の援助を受けた蘇秦は鄙諺を用いて諸侯を遊説し、その結果、前三三三年、六国の従合が成立した。

キー・ポイント　時代を表す言葉　「遊説」「説」「従合」などは戦国時代を表現する言葉である。「遊説」「説」は「戦国の説客」（後出「解説」**I**参照）が諸侯を巡り訪ねて積極的に自説を説いたことを表現したもので、説客の活躍を示している。ここでは、「説」を繰り返し用いることによって諸侯に合従策を説く過程を「略」し、さらに文章にスピード感を持たせようとした。「従合」は「合従」のことで、歴史上、その時代だけに存在した外交策を述べた言葉。

句法

不レ用　受身形。文脈から受身に読む。その場合、文語で受身を表す「る・らる」という助動詞を動詞に接続させて訓読する。

説二燕文侯一、与レ趙従親　使役形。使役を暗示する「説・命・挙」などの動詞が上にきた場合、下の動詞を使役に読む。その場合、文語で使役を表す「しむ」という助動詞を動詞に接続させて訓読する。

燕資レ之、以至レ趙。…粛侯乃資レ之、以約二諸侯一　使役形。ここは前後の文脈から判断して、使役に読む。その場合、文語で使役を表す「しむ」という助動詞を接続させて訓読する。また、同文の「資」という動詞との関連で使役に読むと考えてもよい。

西向　仮定形。ここは前後の文脈から判断して、仮定に読む。その場合、「未然形＋ば」（「ば」は接続助詞）の形を用いる。

莫レ若二六国従親、以擯レ秦　比較形。「莫若…」は「…ニシクハナシ」と読み、「…にまさるものはない・…に及ぶものはない」という意味で、最上級の比較の表現。「莫」が「無」の場合でも同じ。

寧為二鶏口一、無レ為二牛後一　選択形。「寧〜無レ…」は「むしロ〜トモ…なカレ」と読み、「どちらかといえば〜しても…するな」の意。二つのことを比較して、その一つを選ぶ。

解説

I　戦国時代の概略

戦国時代になると、鉄製農具の相当な普及と農業技術の進歩による生産力の著しい増大、さらに、大規模な治水や灌漑工事、これらによって広大な土地が新たに開墾されるようになった。それまで氏族制の下で公田耕作という名の奴隷労働に従事していた農民たちは、氏族の束縛を離れてこの新しく開墾した土地を私有あるいは租借して耕作し始めたのである。その結果、諸侯は公田を開放したり、大夫などの私有財産を大幅に認めざるを得なくなってしまった。それは、諸侯・卿・大夫・士という封建的な身分秩序が崩壊していくことを意味するのと同時に、上も下も互いに利を求め激しく争い合う下剋上の世の中になっていくことも意味している。春秋時代から進んでいたこの弱肉強食の時代傾向は、この時代になるとさらに激しさを増し、諸侯の中にはその実権を大夫などに奪われる者もあった。春秋時代には、まだ西周の名目的な権威が残っており覇者の主宰する会議によって一応の秩序は保たれていたが、独立国の実質を備えた国はそれでも十四を数えた。諸侯を統率する覇者がなくなり、完全に力と力の闘いとなった戦国時代には、燕・趙・韓・魏・斉・楚・秦のいわゆる「戦国の七雄」と、僅かに生存する宋・魯・衛などの弱小国のみに淘汰され、西周はただ洛陽付近を領する一諸侯に成り下がってしまった。そして、これら生き残った諸侯たちは、他国との侵略戦争に勝つために富国強兵と中央集権の確立の必要性に迫られ、そのため、氏族制に固執する旧勢力の排除と、新開墾地ばかりでなく卿・大夫

の領地までも直轄地に組み入れていくこととなった。また、農民の支配形態も、氏族を媒体とするものから、「法」による直接的、画一的な統治へと変化した。

このような時代の変化は政治上では、君権の強化を目的とする諸侯と、世襲の特権を温存しながら自己の実力強化を図る貴族勢力との対立として現れ、しばしば内紛へと発展していった。

そこで、諸侯はこれらを制圧し強力な中央集権を確立するために自らの手足となって働く官僚を重用し、国内を直接統治する郡県制度を導入するなどの行政制度の整備に努めた。この新勢力の中心となった官僚の多くは世襲貴族ではなく、支配階級の最下層にあった「士」階級に属する人々であった。彼らは自国の君主だけでなく、自分を認め登用してくれる君主があれば遠い他国へも出かけていった。これがいわゆる「戦国の説客」たちであり、その中から「諸子百家」と呼ばれるさまざまな思想家たちが生まれ活躍した。「史記」はその主なものを六つに分類している。

儒家（孔子・孟子・荀子）、墨家（墨翟）、道家（老子・荘子・列子）、法家（管仲・韓非）、名家（恵施・公孫竜）、陰陽家（鄒衍）、

このほか縦横家（蘇秦・張儀）、農家（許行）、兵家（孫子・呉子・楽毅）、雑家、小説家などがある。

戦国時代という名称は、戦乱が続いたから、あるいは、この時代の十二の諸国の事跡や遊説の士の言説・外交の駆け引きなどの大半を国別に記した「戦国策」という書名によるものとする。

Ⅱ　合従連衡について

兼併簒奪の戦国時代では、外交策や謀略を諸侯に遊説する縦横家が活躍した。そこには、兵士の殺し合いの戦いばかりでなく、外交・謀略による戦いも激しさを増してきたという背景が考えられる。特に、秦が超大国となったため、秦を中心とした外交策が各国にとって重要となっていった。当時、外交と謀略に長けた鬼谷子という人物がいて、その弟子に二人の秀才がいた。蘇秦（生年未詳〜前三一七年）と張儀（生年未詳〜前三〇九年）である。蘇秦は西方の秦が超大国であったので、東方の六国（燕・趙・韓・魏・斉・楚）が連合し、同盟を結びそれに対抗するという外交策、「合従策」を提唱した。従は縦で「合縦」とも書き、六国を南北（縦）に合わせたためこのようにいう（合従策は前三三三年に成立した）。合従策は秦の侵略を防ぐための防波堤となり、十五年もの間、秦は函谷関の東に兵を進めることができなかった。この合従策を嫌った秦は六国の一角を崩す策略を巡らし解体させようとした。そこで、趙をだまして合従から離間させることにした。それが成功すると、斉と魏が離間した趙を伐つこととなり、さらに斉は燕をも攻めた。もともと合従策は利害の異なる六国が結んだ条約なので、これによって六国に亀裂が生じると同盟国はたちまち互いの猜疑心によって崩壊の一途をたどることになる。斉・魏に攻められた趙に住んでいた蘇秦は、身の危険を感じて趙を去り燕に身をおくが、燕の易王の母と密通してしまいその咎を逃れるため今度は斉に亡命する。そこで、暗殺者の手に倒れることとなる。ここに、「合従策」は音を立てて瓦解することとなった。この策に対抗したのが、蘇秦と同門の張儀の、「連衡策」であった。あるとき、楚に遊説に行った張儀は宰相から璧を盗んだ嫌疑をかけられ恥辱を受ける。失意に沈む張儀を蘇秦は援助して秦に

仕えさせた。それを知った張儀は感激し「蘇秦が従合の長である限り行動は起こさない」と言った。蘇秦が趙を去り合従が解けると、張儀がこのときとばかりに、全力を注ぎ、以前にも増して激しい切り崩しを行った。六国中、最大の力を持つのが楚で、次は斉である。この二国の断交こそが「連衡策」成立の最大のポイントと考えた。張儀は、楚の大臣を抱き込むと親秦派を扶植し、合従派（特に斉との同盟を主張する親斉派）を没落させた。そして、斉を攻めさせ、仲違いをさせることに成功する。この親斉派の中に有名な屈原がいて、この現状を憂えて汨羅に身を投げたのはあまりにも有名である。次に秦は韓・趙と一国ずつ和親条約を結び、次にそれぞれの国との連衡を成立させた（前三一二年）。連衡は横に連ねる意で、六国がそれぞれ秦と東西（横）に同盟してそれぞれの諸侯が自国の安全をはかろうとした外交策である。このようにして張儀は秦の宰相となり、連衡を説き活躍したが、秦の恵王が死に、太子の頃から張儀を嫌っていた武王が即位すると失脚し位は退けられ、魏に逃れ宰相となったが一年にして没した。この策によっても六国は生き延びることができず、ついに秦によって、前二二一年の斉の滅亡を最後にして六国全てが併合され、統一が完成するのである。

Ⅲ　蘇秦の人間観について

この「鶏口牛後」の話は、「合従連衡」の言葉とともに馴染み深い史話である。この教材の後には、次のような後日談が記されている。そこには蘇秦の人間観が描かれており、おもしろい内容なのでここに記すこととする。「六国共通の宰相となって家に立ち寄った蘇秦は、家族から以前の冷遇のお詫びと功名や富貴を得るためにひたすら努力したことに対する称賛があるものと予期していた。ところが、家族は蘇秦の努力を評価せずに、現在の地位と名誉・金力といった現在そこにある外側だけの栄誉・権勢にのみ注意を注ぎ、それにひれ伏し媚びへつらい追従する。また、困窮していたときは冷淡で侮った態度で接し、富貴になったときには丁重な態度で接する。この臆面もなく態度を変える人間の情けなさ。ここに、蘇秦は人間の卑小さやあさましさを動かし難い現実として思い知らされる。これが人間だ、と。しかし、蘇秦は権謀術数を学んだ現実主義者、このような人間の実態など百も承知のはず。それが分かっていても喟然として歎息してしまう、これもまた人間か。」

参考

蘇秦については「史記」巻六十九「蘇秦列伝」や「戦国策」秦一に詳しい記述があるので参考にしてほしい。特に、「戦国策」には蘇秦が家族から冷淡な態度をとられ、発憤して学問に励んだ様子が次のように記述されている。「書を読みて眠らんと欲せば、錐を引きて自ら其の股を刺す。血流れて足に至る。曰はく、『安くんぞ人主に説きて、其の金玉錦繍を出させ卿相の尊を取る能はざる者有らんや。』と。」（読書をして眠くなると、錐を手元に引き寄せて己の股を刺した。その血が足まで流れた。痛さをこらえて言った、「どうして諸侯を説得して、その金玉錦繍の褒美を出させ公卿や宰相という尊い地位を自分のものとすることができないことがあろうか、いやできる。」と。）

ちなみに、明治十八年創業の、渦巻き型蚊取り線香でお馴染みの「金鳥」は、創業者・上山英一郎氏が「鶏口となるも牛後となる無かれ」を信条としていたため、鶏を形取ったものを会社のマークとしている。

《板書例》

■蘇秦の説得の巧みさはどこにあるか、話し合ってみよう。
（言語活動）

▼話し合うポイント▲

①共感を得るための説得に、六国の諸侯たちが持つ**気持ち**を利用したところに巧みさがある。
―「秦人恐喝二諸侯一、求レ割レ地。」より、話し合う。

②共感を得るための説得に、六国の諸侯たちが持つ**当時の気風・風潮**を利用しところに巧みさがある。
―「寧為二鶏口一、無レ為二牛後一」より、話し合う。

▼蘇秦の説得のポイントの再確認▲

①六国の諸侯たちが共感した言葉
・「幷レ力西向、秦必破矣。」
―秦に対抗しよう。
・「寧為二鶏口一、無レ為二牛後一。」
―小国の君主となってもよいが、大国の臣下になるな。
（自尊心・独立心・名誉心）

②蘇秦の巧みな説得の結果？
「於レ是六国従合。」

▼話し合いの結果▲（＊板書）
A班……
B班……
C班……

▼各班の話し合いの結果に対する疑問▲（＊疑問点のみ簡単に板書。後、口頭で説明。）
A班の、……という意見は、何を根拠にしていますか。
B班の、……は、当時の風潮を表現する言葉ではありません。
C班……

▼各班、検討の上、返答▲（＊口頭で発表）
A班、……という意見は、……を根拠にして考え、話し合いました。
B班、……という言葉は、当時の風潮を表していると考えました。インターネットや資料集で確認しまし、それを根拠としました。
C班……

▼まとめ・再検討の結果を発表▲（＊口頭）
A班……
B班……
C班……

《板書例》

▼句形▲

寧為二鶏口一、無レ為二牛後一。

・「寧（ロトモ）～　無（カレ）レ…」（選択形）

・「むしロ～トモ…なカレ」と読み、「どちらかといえば～しても…するな」の意。

二つのことを比較して、その一つを選ぶ。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **春秋戦国時代・戦国の七雄・諸子百家について、辞書・インターネット・資料集などを利用し、調べてみよう。**

【答】○「**春秋戦国時代**」**の概略**＝「春秋戦国時代」とは、紀元前七七〇年に周が東西に分裂してから、紀元前二二一年に秦が中国を統一するまでの、およそ五五〇年にわたる期間をいう。紀元前七七〇年から紀元前四〇三年を春秋時代、紀元前四〇三年から紀元前二二一年までを戦国時代と分ける。

○**春秋時代**＝周室の支配力が次第に衰えるとともに、諸侯が覇者として武力をもって天下に号令し、列国が争ったので、各地の経済的発展や文物の発展が顕著となった時代。その中でも、特に、「春秋の五覇」は有名であった。

○**戦国時代**＝周室の支配力は完全に衰え、諸侯の勢力が一層強大になり、群雄が割拠する戦乱（弱肉強食・下剋上）の時代となった。その中でも興亡を繰り広げたのが、「戦国の七雄」であった。この時代は、農業や工業が発展し、文化的にも「諸子百家」が活躍し、多くの思想が花開いた（「先従ㇾ隗始」解説Ⅰ「戦国時代の概略」参照）。

○「**戦国時代**」**の風潮**＝上述のごとく、戦国時代は、下剋上の世、弱肉強食の世であった。その中にあって、諸侯たちの中には、自尊心・独立心・名誉心などが強く意識される風潮が生まれてきた。

○**戦国の七雄**＝戦国時代になると、春秋時代とは異なり各諸侯が独力で天下を掌握しようとする。かつてのように「覇者」（春秋の五覇）が中心となって周王朝を支えるといったことはもはやなくなり、周王朝はついに名目さえも失い、洛邑付近を治めるに過ぎない小国に成り果てる。その中で、「戦国の七雄」（燕・斉・趙・韓・魏・秦・楚）はそれぞれが改革を行い、国力を充実させて周囲の小国を併呑し、勢力を拡大していく。中でも特に台頭したのが、西方の秦、南国の楚、東国の斉であった。次第に楚、斉が衰退していくと、秦の一強時代となった。紀元前二二一年、最後に残っていた斉を滅ぼし、ここに長く続いた分裂の時代は終焉を迎えることとなった。

○**諸子百家**＝先秦（秦の始皇帝より以前）時代の、諸学派、諸学者、またはその著作の総称。春秋時代の末から戦国時代にかけて、周王朝の権威が衰え、言論思想の発表が自由になると多くの思想家が現れいろいろな学説を発表した。最も古いのは儒家で、仁を説く孔子に始まり、孟子・荀子らによって継承され、支配階層の政治道徳として発展していった。また、儒家の礼楽を排して博愛主義を説く墨家（墨子）、無為自然を尊び、あるがままの自然の社会を理想とした道家（老子・荘子など）、刑名法術により天下を治めようとする法家（韓非子・李斯など）、一種の論理学派といえる名家、政治的な外交政略を説く縦横家、さらには農家・雑家・小説家などの、多数の学派があった。なお、儒家を除いて、諸子百家という場合もある。以上より、

「諸子」の「子」は先生の意。孔子・老子・荘子・墨子・孟子・荀子などをいう。「百家」の「家」は学派の意。儒家・道家・墨家・名家・法家などを指す。

▼ポイント▲　辞書・インターネット・資料集などを利用し、グループで分担して調べさせる。また、図書館にある資料で調べさせてもよい。

時代背景やその風潮を調査することは、「史伝」を理解する上では大事な言語活動になる。それは、その時代に生きた人の考え方は、その時代背景やその風潮というものに影響されるからだ。

授業の最初でも最後でもどちらでもよいので、調査させ、本文理解の一助にしたい。

言葉と表現の解答例

1　「鶏口牛後」「合従連衡」という言葉を、それぞれ辞書で調べてみよう。

【答】鶏口牛後＝大きな集団や組織の末端にいるより、小さくてもよいから長となって重んじられるほうがよいということ。

「鶏口」は鶏の口（くちばし）。弱小なものの首長のたとえ。

「牛後」は牛の尻。強大なものに隷属する者のたとえ。

合従連衡＝その時の利害に応じて、連合したり離反したりするさまざまな策の展開をいう。また、そのかけひき。もとは中国戦国時代、蘇秦の合従策と張儀の連衡策のことをいう。「合従」は南北に連なった趙・魏・韓・燕・斉・楚の六国が、縦の連合をして強国秦に対抗する策で、蘇秦が提唱した。「連衡」はこの六か国が秦とおのおの横に同盟を結ぶ策で、張儀の政策。

「従」は「縦」とも書く。

▼ポイント▲　辞書・インターネット・資料集などを利用し、グループで分担して調べさせる。また、図書館にある資料で調べさせてもよい。

2　「寧ろ」を用いた短文を作ってみよう。

【答】「彼は天才というより寧ろ努力家だ。」「そんなものは寧ろないほうがましだ。」

▼ポイント▲　「寧ろ」は副詞。どちらかといえば。いっそ。二つを比べて、あれよりもこれを選ぶという気持ちを表す。

言語活動の解答例

1　蘇秦の説得の巧みさはどこにあるか、話し合ってみよう。

【答】蘇秦の「説得」が成功した理由は、「説得の巧みさ」にある。そこで、その「説得の巧みさ」を本文に即して分析してみると、以下の二点が指摘できよう。ここで確認しておくが、「説得の巧みさ」とは、対話による巧みな働きかけ（話しぶり・説得の話術）によって、相手が自説や主張に納得し、それを受け入れ・気

持ちや行動が変わるということだ。

一点目は、蘇秦が六国の諸侯たちと秦との関係を利用して合従策の受け入れを説得したところにある。「秦人恐ヨ喝（シヲ）諸侯一、求レ割レ地（カンコトヲ）。」とあるように、六国の諸侯たちは超大国となった秦から領地の割譲を求められていた。そして、このままではさらに秦に圧迫・侵略され、自国存立が危ういと考えた六国の諸侯たちは、秦との関係に思い悩んでいた。そのようなとき、秦を排除し自国存立が可能な最良の方策が、蘇秦から提示される。「合従」策だ。すると、六国の諸侯たちは納得と共感をもってそれを受け入れることになった。

二点目は、六国の諸侯たちが共通に持っていた当時の君主の時代精神を利用して合従策の受け入れを説得したところにある。蘇秦は「寧為ニ鶏口一（ロトモ）、無レ為ニ牛後一（カレルコト）。」という鄙諺（ことわざ）を用いて諸侯たちに合従策を受け入れることを説得する。それは、この鄙諺には、当時の諸侯たちそれぞれが持っていた当時の気風（時代精神）とでもいうべき自尊心・独立心・名誉心が見事に表現されているからだ。

以上、二点より、諸侯たちは蘇秦の巧みな説得によって納得と共感をもって合従策を受け入れるのであった。

▼ポイント▲　ここでは、グループや隣同士で、その巧みさについて話し合わせ、他の人の様々な意見や視点を聞き、自分の意見を創り上げるという言語活動が大事になろう。

さて、指導者はこの活動の前に、場合によっては、話し合うポイントを指示してもよい。それは以下の通り。①説得とは「対話による働きかけによって、相手が自説や主張に納得し、それを受け入れ・気持ちや行動が変わる」こと。②①より、なぜ六国の君主から共感を得るために、「鶏口牛後」ということわざを用いたのか。さらに、諸侯たちがその説得の言葉に、なぜ「共感」したのかも話し合わせる。

話し合うための視点の提示は、黒板に板書してもよいし、プリントで配布してもよい。何も助言を与えずに話し合いをさせるのも、いろいろな視点からの意見が出てくる可能性があり、授業は活発化する。その意味から考えると、助言は意見の固定化につながるかもしれない。

（前田　康晴）

管鮑之交（ハリ）

要旨

春秋時代、斉では君主の襄公が殺害されると、子糾と小白はその位を争い、結局、小白が位について桓公となった。桓公は、鮑叔の推薦を受け入れ、自分の命を狙った管仲を重用した。推薦は、鮑叔が常に管仲を理解しその才能を認めていたからであった。管仲はそれに深く感謝した。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～一三八・8〈用レ之。〉	斉では君主の襄公が殺害されると、それまで亡命していた弟の子糾と小白はその位を争った。子糾には管仲、小白には鮑叔が守り役として付き従った。結局、小白が位につき桓公となった。桓公は、鮑叔の推薦を受け入れ、自分の命を狙った管仲を重用した。
第二段	一三八・9〈管仲字夷吾。〉～一三九・3〈鮑子也。」〉	商売の利益を自ら多く取ったり、謀り事に失敗したり、敗走したりする管仲を鮑叔は許した。それは、管仲を理解しその才能を認めていたからである。管仲はそれに深く感謝した。
第三段	一三九・4〈桓公九二合諸侯一〉～終わり	桓公は、管仲の画策によって天下の覇者となった。そして、管仲を一にも二にも「仲父、仲父」と慕うのであった。

訓読と現代語訳

【第一段】 ①斉は姜姓なり。②桓公に至りて諸侯に覇たり。③五覇は桓公を始めと為す。④名は小白。⑤兄の襄公無道なり。⑥群弟禍の及ばんことを恐る。⑦子糾魯に奔る。⑧管仲之に傅たり。⑨小白莒に奔る。⑩鮑叔之に傅たり。⑪襄公弟無知の弒する所と為り、無知も亦人の殺す所と為る。⑫斉人小白を莒より召く。⑬而して魯も亦兵を発して糾を送る。⑭管仲嘗て莒の道を遮り、小白を射て帯鉤に中つ。⑮小白先づ斉に至りて立つ。⑯鮑叔牙管仲を薦めて政を為さしむ。⑰公は怨みを置きて之を用みる。

【第二段】 ⑱管仲字は夷吾。⑲嘗て鮑叔と賈す。⑳利を分かつに多く自ら与ふ。㉑鮑叔以て貪と為さず。㉒仲の貧なるを知ればなり。㉓嘗て事を謀りて窮困す。㉔鮑叔以て愚と為さず。㉕時に利と不利と有るを知ればなり。㉖嘗て三たび戦ひ三たび走る。㉗鮑叔以て怯と為さず。㉘仲に老母有るを知ればなり。㉙仲曰はく、「我を生む者は父母、我を知る者は鮑子なり。」と。

【第一段】 ①斉は（君主の姓が）姜姓であった。②桓公の代になって諸侯の旗頭となった。③春秋時代の五人の覇者は桓公を始めとする。④名は小白。⑤兄の襄公は無道（で道に外れた暴虐な行いをする人）であった。⑥（そのため）多くの弟たちは禍が自らの身にふりかかることを恐れた。⑦（弟の一人である）子糾は魯に逃げた。⑧管仲はこの子糾の守り役であった。⑨（一方、同じく弟の一人である）小白は莒に逃げた。⑩鮑叔はこの小白の守り役であった。⑪（その後）襄公は（もう一人の）弟の無知に殺され、その無知もまた（ある）人に殺されてしまった。⑫（そこで）斉の国の人々は小白を莒より呼び戻し（君主にしようとし）た。⑬そして魯の国もまた（自国に亡命していた子糾を君主にしようと）軍隊を派遣して子糾を送り込んできた。⑭管仲は以前莒（から斉に通じる）道（で小白の行く手）をふさぎ、小白を（矢で）射て（それが）帯を締めるための金具に当たったことがあった。⑮（君位継承問題は、結局、）小白が先に斉に入国して即位し（斉の君主となっ）た。（これが桓公である。）⑯鮑叔牙は（桓公に）管仲を推薦して政治を執り行わせた。⑰桓公は怨みを捨てて管仲を重用した。

【第二段】 ⑱管仲は字を夷吾といった。⑲以前、鮑叔と商いをしたことがあった。⑳その利益を分配するのにあたって（管仲は）多く自分に利益を与えた。㉑（だからといって）鮑叔は（管仲を）欲深いとは思わなかった。㉒管仲が貧しいことを知っていたからである。㉓以前（管仲は鮑叔のために）物事を画策して（かえって失敗して鮑叔は）行き詰まり苦しんだことがあった。㉔（だからといって）鮑叔は管仲を愚か者だとは思わなかった。㉕時によい時と悪い時があるのを知っていたからである。㉖（また管仲は）以前三回戦って三回とも敗走したことがあった。㉗（だからといって）鮑叔は管仲を臆病だとは思わなかった。㉘管仲に年老いた母がいることを知っていたからである。㉙（だから）管仲は言った、「私を生んでくれたのは父母であり、私を最もよく理解してくれているのは鮑君だ。」と。

【第三段】㉚桓公諸侯を九合し、天下を一匡せしは、皆仲の謀なり。㉛一にも則ち仲父、二にも則ち仲父といへり。

【第三段】㉚桓公が諸侯を集め合わせて、天下を統一し乱れを正したのは、みな管仲の策略によるものだ。㉛（そこで桓公は）一にも仲父、二にも仲父といった。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶斉の桓公の活躍した春秋時代の概略を確認する。

❶漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせる。この調査や説明に、多くの時間を費やすことができないので指導者が事前にまとめたプリントを用意し配布するか、そのポイントだけを板書して簡単に説明してもよい。「春秋時代」の概略プリントは、後出「解説」Ⅰ春秋時代の概略を参考にして作成し、確認させるとよい。「覇者」の時代であったということに注意させる。

展開

学習活動のポイント

❶本文を黙読する。その後、範読を聞く。
❷一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。
❸「管鮑之交」の意味を調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめ、発表する。
❹現代語訳をする。知技⑵ウ
❺内容読解をする。思判表B⑴ア〔「学習のポイント」1〕

❶範読はゆっくり丁寧に読む。
【注意させる読みの箇所】「覇」「奔レ魯。」「傅」「為二弟無知所一レ弑」「中」「薦二管仲一為レ政。」「賈」「謀」「怯」
❷大きな声で読むよう指導する。
❸辞書などで「管鮑之交」の意味を調べ、それを参考に、要旨をノートにまとめ、発表させる。（五十字程度。）要旨の発表は、

黒板に板書させてもよいし、口頭で発表させてもよい。

❹第一段落と、第二・三段落に分けて現代語訳をする。ともに、生徒数名を指名し、現代語訳させる。難解な箇所については、生徒の発表状況を見て指導者が補足する。

・第一段落

【注意すべき句形】「為二弟無知所一レ弑」（受身）「薦二管仲一為レ政。」（使役）

【注意すべき語句】「覇二諸侯一。」「奔レ魯。」「弑」「中」「立」

・第二・三段落

【注意すべき語句】「賈」「謀」「怯」

【評価】【注意すべき語句】【注意すべき句形】を正確に現代語訳できているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。

❺次の**ア**～**キ**のポイントに注意する。**ア**小白が子糾よりも早く斉に到着することができた理由、**イ**鮑叔が管仲を桓公に薦めた理由、**ウ**「置レ怨」の意味、**エ**管仲の三つの行動における鮑叔の評価と、その理由、**オ**「知レ我者鮑子也。」から読み取れる管仲の気持ち、**カ**「対偶」表現の指摘とその効果、**キ**本文に登場する人物の関係。それぞれグループで話し合い、代表者が発表してもよい。

ア…事前に「史記」斉太公世家のプリント（後出「『解説Ⅰ』『史記』斉太公世家について」参照）を作成し、それを用いてグループで話し合わせ、代表に発表させる。ポイントは、「小白が弓に当たったという報告を受けた魯の軍勢は、安心してしまい、子糾を斉に送るスピードをゆるめてしまった。実は、当たっていなかった小白は弓に当たって死んだようにみせかけ、管仲たちが死んだと思い込んでいることを利用し、一目散に斉に急いだ。」ということ。「語句の研究」キーポイント参照。

イ…「為政」（使役）の意味するところを、グループで話し合い、読み解かせる。現代語訳は「政治を執り行わせた」だが、敵方にいた管仲になぜ政治を執り行わせたのかを読み解かせる。

ウ…恨みを捨てた理由をグループで話し合い、読み解かせる。

エ…本文を丁寧に読み解かせる。

オ…自由に発表させてよいが、単なる印象ではなく、根拠に基づかせる。管仲が「鮑子」という呼び方に込めた心情を理解させる。

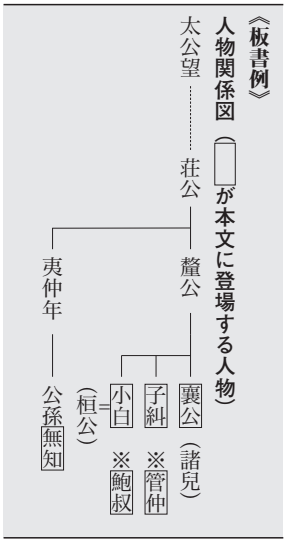
カ…「対偶」の意味について説明し、それに基づいて「対偶」表現とその効果についてグループで話し合い、見つけ出させる。「対偶」とは「二つの句をたがいに対応させて対（つい）にする技法。漢文の修辞法の中ではもっとも代表的なものである。…なお対句法は対偶法（たいぐうほう）ともいう。」（田部井文雄他『漢文学習ハンドブック』大修館書店、P65）ということ。どのような効果があるかについては「対句の箇所を音読してみよう。」という助言を与えるとよい。

キ…本文に登場する人物の関係図は、左のようになるが、この図の中で本文に登場してこない「太公望・荘公・釐公・夷仲年」については、指導者が語注などを用い簡単な説明をする。

図示の仕方は、グループで工夫させる。

《板書例》

人物関係図（□が本文に登場する人物）



主な登場人物の設定

襄公＝「無道」。無知に殺される。
子糾＝魯に亡命。魯が斉に送り込む。
小白（桓公）＝莒に亡命。斉の人々（大夫の高傒ら）が呼び戻す。
管仲＝子糾の守り役。小白殺害に失敗。桓公に重用される。
鮑叔＝小白の守り役。管仲を推薦。

【評価】 それぞれの読解のポイントについて、本文の内容をもとに的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶ 管仲が鮑叔に、鮑叔が管仲に抱く心情を、本文に即してまとめる。そのうえで、管仲と鮑叔は、それぞれどのような人物として描かれているか、グループで話し合い、代表が発表する。思判表B(1)イ　主態　**〔「言語活動」1〕**

❷ ❶で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。

❸「管鮑之交」とは、どのような関係か、グループで話し合い、代表が発表する。知技(1)ウ　**〔「言葉と表現」1〕**

❹「謀る」「図る」「計る」「測る」「量る」「諮る」の意味の違いを調べる。知技(1)イ　**〔「言葉と表現」2〕**

❺ まとめの朗読をする。

❶この活動の前に、場合によっては、話し合うポイントを指示してもよい。それは以下の通り。「①管仲の鮑叔に対する心情は、『仲曰、「生レ我者父母、知レ我者鮑子也。」』に描かれている。②鮑叔の管仲に対する心情は、『管仲字夷吾。…知二仲有一レ老母一也。』に描かれている。そのうえで、③それぞれの人物像を表現する適切な言葉をグループで考え、発表する。」

【評価】・管仲と鮑叔がお互いに抱く心情と、それぞれの人物の描

かれ方を捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

・管仲と鮑叔がお互いに抱く心情と、それぞれの人物の描かれ方について、グループ内で主体的な態度で話し合い、また、自分の考えをグループ内の他者に分かりやすく伝えようとしているか、分析する。

❷他グループの質問や意見を十分に検討させることは、生徒たちに考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。そこで、指導者は「他グループの発表を聞きながら、各グループはその理解に対する疑問点・質問や意見を考え、メモしておくこと。後ほど、それに対する話し合いをします。」という注意を与える。生徒が考えを深めるためには、他からの意見と自分たちの考えを検討するという言語活動が大事となる。

❸「言語活動」[1]で学習した内容を確認し、そこから「管仲」と「鮑叔」との関係を表すのに適切な言葉を、グループで話し合わせる。また、その言葉にした根拠も提示させる。

【評価】本文から「管鮑之交」とはどのような関係なのかを読み解き、我が国の言語文化に特徴的な語句の文化的背景に理解を深めているか、確認する。

❹漢和辞典の中の「同訓異義語」の項にまとまっているので、そこを確認させる。

【評価】同訓異義語の意味の違いを調べ、漢字への理解を深めているか、確認する。

❺大きな声で各文の意味を考えながら、音読させる。

発問例

●一三八ページ

問 **斉の桓公の活躍した時代はどのような時代か。**

答 「春秋時代」とは、周王室を中心とした封建制が崩壊しその権威が次第に衰え、諸国が対立・抗争を繰り返し小国を併合した有力諸侯、つまり「覇者」が台頭した時代をいう。この時の代表的な「覇者」が「春秋の五覇」である。後出「解説Ⅰ春秋時代の概略」参照。

補 国語便覧・漢和辞典などを用いて調べさせる。

問 **「無道」（3行目）とは、現代では具体的にどのような行為をする人をいうと考えられるか。**

答 **補** 模範解答はないので自由に発表させる。「人の道に外れた暴虐な行為」とはどのような行為をいうか。現代の高校生がどのように考えているかを知るのは興味深い。

問 **「禍」（3行目）とはどのようなことをいうか。**

答 暴虐な襄公に（いわれなき罪を着せられ不当に）殺されてしまうこと。

補 文脈に沿って具体的な例を考えさせる。

問 **「奔」（3行目）の意味を的確に表す二字の**

語句の研究

●一三八ページ

2斉　春秋戦国時代の大国。現在の山東省にあった。太公望呂尚が、周の文王を補佐し、殷を滅ぼした功績によって武王から封ぜられた国。「姜姓」とは、呂尚の祖先がかつて呂の国の諸侯だったので「呂」を姓としたが、本姓は姜といったの意。

2桓公　斉の君主。前六八五年～前六四三年在位。生年未詳～前六四三年。管仲の補佐を得て富国強兵をはかり、「春秋の五覇」の第一となった。管仲没後、竪刁・易牙・開方などを用いて政治を怠ったため、死後、斉の覇業は衰えた。「鑑賞Ⅱ 管仲の遺言」参照。

2覇　諸侯の旗頭になる。「覇者」とは、周王室を名目だけ尊びながら、その実、武力で他の諸侯を征服することにより天下を安定させる者をいう。

2五覇　春秋時代の五人の覇者。この五人については諸説あるが、いずれの場合も斉の桓公を第一に挙げる。他の四人は、晋の文公・宋の襄公・楚の荘王・秦の穆公（「呂氏春秋」当務・注）などである。

3襄公　斉の君主。前六九七年～前六八六年在位。名は諸兒。釐公の子。「学習活動のポイント」の「人物関係図」参照。

3無道　人の道に外れた暴虐な行いをする人。「史記」斉太公世家には「襄公は、異母妹で魯の桓公の夫人である文姜と以前から情を交わし（不義密通）ていたばかりか、たまたま斉を訪問していた魯の桓公を酔わせて殺すことや、臣下にいたずらに誅罰を加えるなどの無道を平気で行っていた。」（略述）とある。

3禍　具体的には、暴虐な襄公に（言われなき罪を着せられ不当に）殺されてしまうこと。

3子糾　襄公の弟。小白の庶兄。「人物関係図」参照。生年未詳～前六八五年。君位争いに敗れ、斉の命によって魯で殺される。

3奔　出奔する。逃げ出す。

3魯　春秋時代の国。現在の山東省曲阜市一帯にあった。子糾の母の国。

3管仲　斉の宰相。生年未詳～前六四五年。名は夷吾。字は仲。諡は敬。そのため、管敬仲ともいう。民生を安定させ、富国強兵を図り、斉の桓公を覇者とした。「倉廩実ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち栄辱

熟語を答えよ。
答　出奔。
補　漢和辞典で調べさせる。

問　「弑」（5行目）と「殺」（5行目）の意味の違いを調べよ。
答　「弑」は身分の下の者（臣下・子）が上の者（君主・親）を殺す。「殺」は、ひろく命を絶つ。

問　斉の人々が「小白」（5行目）を呼び戻した目的は何か。
答　斉の人々（大夫の高傒と国氏らが中心）は小白を莒から呼び戻し、君位につかせ、斉の実権を握ろうとしたから。
補　文脈から考えさせる。亡命していた小白を君主のいない斉に呼び戻すのだから、その意味は比較的容易に気付くであろう。「語句の研究」参照。

問　魯が「糾」（6行目）を軍隊を派遣してまで斉に送ったのはなぜか。
答　魯もまた自国に亡命していた子糾を斉に送り込み、君主にしようとしたから。
補　魯は、子糾を君主にし、その後ろ盾となって実権を握ろうとしたと考えられる。

問　鮑叔が管仲を桓公に「薦」（7行目）めたのはなぜか。
答　斉の桓公が天下の覇者となるには、管仲の国や天下を治める才能が必要だと知っていたから。

を知る」（「管子」牧民編）という管仲の言葉は有名。

4傅　守り役となる。教育係のこと。子糾には、この時、管仲と召忽が「傅」となった。召忽は子糾が殺されると、殉じて自殺したといわれる。管仲は鮑叔によって斉に推薦されるなどして生き延びた。

4小白　斉の桓公のこと。

4莒　春秋時代の国。現在の山東省莒県にあった。

4鮑叔　生没年未詳。斉の家臣。「鮑叔牙」ともいう。生没年未詳。管仲を桓公に推薦すると、その後は管仲の下にあって桓公の覇業を助けた（「史記」管晏列伝）。

4弟　無知は襄公の従兄弟に当たり、どちらも荘公の孫になる（「人物関係図」参照）が、中国では同世代の年下の者を「弟」という。

4無知　襄公の叔父（夷仲年）の子（「人物関係図」参照）。斉の荘公は、無知を寵愛し、公子諸兒と同じ待遇にした。そのため、公孫無知という。諸兒が斉の襄公となると、その待遇を下げたのでそれを怨んで反乱を起こし殺害した（「史記」斉太公世家）。

5弑　殺す。身分の下の者（臣下・子）が上の者（君主・親）を殺す。

5人　ある人。「春秋左氏伝」（荘公八・九年）によると、かつて無知が虐待した雍廩（ようりん）であるとする。雍廩は斉の太夫。

5召二小白於莒一　斉の人々は（協議して君主にしようと）小白を莒から呼び戻した。「史記」斉太公世家によると、小白と仲のよかった、大夫の高傒と、同じ大夫の国氏らが中心になって呼び戻そうとした。

6魯亦発レ兵送レ糾　魯もまた軍隊を派遣して糾を斉に送り込もうとした。魯も自国に亡命していた子糾を斉の君主にしようとしたのである。

6管仲嘗遮二莒道一　管仲は、魯の命令によって別動隊を率いて、莒から斉に通じる道を遮断し小白の斉への入国を妨害しようとした。そして、小白を殺そうと弓で射た（「史記」斉太公世家）。

6帯鉤　帯を締めるための金具。帯金。

7小白先至レ斉而立　小白が先に斉に着き即位した。

キー・ポイント　「小白」が「子糾」よりも早く斉に到着することができた理由　管仲は、魯の命令によって別動隊を率いて、莒から斉に通じる道を遮断し小白の斉への入

補 この発問をした場合、生徒は「才能があるから。」とだけ答える。そこで「どのような才能だと思うか。」とさらに発問し、それはどのような「力」かを答えさせる。そこで、事前に「史記」斉太公世家の現代語訳をプリント（この箇所が説明してある部分でよい）を用いて考えさせてもよい。「語句の研究」参照。

問 **「怨」（8行目）とは、具体的に何を指すか。**

答 管仲に弓で命をねらわれたこと。

補 管仲は小白に何をしたかというヒントを与えてもよい。

問 ◉**「置レ怨」（8行目）とは、どのような意味か。**

答 怨みを捨てる。

補 「置」の意味を漢和辞典で調べさせる。「語句の研究」参照。

問 **「賈」（9行目）と「商」の意味の違いを調べよ。**

答 「賈」は、店を構えて商売する。「居商」。「商」は、「行商」。

補 漢和辞典でそれぞれ調べさせる。

●一三九ページ

問 **「知レ我者鮑子也。」（2行目）から、管仲のどのような気持ちが読み取れるか。**

答 自分（管仲）に政治的手腕や才能があることを理解してくれる人物は鮑叔だけだという気持ち。

国を妨害しようとした。そして、小白を殺そうと弓を射た。その矢が小白に当たったという報告を受けた魯の軍勢は、安心して子糾を送るスピードをゆるめ六日もかかって斉に到着した。ところが、その実、矢は帯鉤に当たり小白は無傷であった。鮑叔は、管仲たちが矢が当たって小白は死んだと思い込んでいることを上手く利用しようと、温車（死骸を入れる車）を仕立て小白に死んだふりをさせた。このようにして、管仲を欺くと一目散で斉に向かい、先に入国を果たしたのである。（以上のことは、「史記」斉太公世家に記述されている。）

8薦二管仲一為レ政　「薦二……一〜」は使役形。「句法」参照。鮑叔が管仲をどのように薦めたかは「史記」斉太公世家に詳しい。その弁を略述しておく。「君将に斉を治めんとせば、即ち高傒と叔牙とにて足る。君且に覇王たらんと欲せば、管夷吾に非ざれば不可なり。（斉の国だけを無事に治めるなら、大夫の高傒と自分の二人で十分ですが、天下の覇王になろうとするならば管仲の力は不可欠です。）」

8置レ怨　怨みを捨てて。「置」は、すておく・やめる。「怨」は、かつて管仲に弓を射られたこと。

9字　成人した男性が本名の他に付ける呼び名。中国では、男子が成人（二十歳）になると「冠」（元服）し、字を付ける。字で呼ぶことは、相手に敬意を表すものなので、自分自身及び目下の人（君主が臣下、親が子、師が弟子）を呼ぶときには名を用い、それ以外の他人を呼ぶときには、字を用いる。名を呼ぶことは、相手を支配することも意味し、目上の者には避けることとなった。それが、死後にも引き継がれ、忌み避くべき名という意味で「諱（いみな）」が生じる。なので、生前にはない。

9与　並列の助詞。

9賈　商いをする。「賈」は、店を構えて商売する。「居商」のこと。「商」は、行商のこと。

9自与　自分で自分に利益を与える。多く自らが取ったの意。

10不二以為一レ貪　貪欲としなかった。「不下以二管仲一為上レ貪」の省略形。「以レA為レB」は「AヲもつテBトなス」と読み、「AをBと思う」と訳す。

10謀レ事　（管仲が鮑叔のために）物事を画策した。何を画策したかは分からないが、

とを理解し、逆境にあって不本意な行為をしても常に温かく善意をもって接し支援してくれた鮑叔への感謝の気持ち。

補 自由に発表させてよいが、単なる印象ではなく、根拠に基づかせる。

問 **登場人物関係図をグループで作成せよ。**

答 「学習活動のポイント」参照。

補 本文に登場しない「太公望・荘公・釐公・夷仲年」については、指導者が語注などを用い説明。図示の仕方はグループで工夫させる。

問 **「対偶」表現を抜き出し、その効果を説明せよ。**

答 《対偶》

・「嘗与二鮑叔一賈。—鮑叔不二以為一レ貪。知二仲貧一也。」

⇔

「嘗謀レ事窮困。—鮑叔不二以為一レ愚。知三時有二利不利一也。」

⇔

「嘗三戦三走。—鮑叔不二以為一レ怯。知三仲有二老母一也。」

・「生レ我者父母」

⇔

「知レ我者鮑子」

《効果》

「対偶」表現を用いることで、文章がリズミカルになり、読者にとって読みやすくなるばかりか理解しやすくもなる。さらに、「十八史略」に即するならば、その文章の特色の一つとして挙げられるスピード感は、「対偶」という修辞が支えているといっても過言ではない。

補 漢文では「対偶」表現が多く用いられていることに注意させる。

補 漢文では「対偶」表現が多く用いられていることに注意させる。

かえって鮑叔を苦しめる結果となってしまった。

● 一三九ページ

1 知三時有二利不利一也 時勢にはよい時と悪い時があるのを知っている。状況によってうまくいく時もありいかない時もあるの意。

1 三戦三走 三回戦い三回とも敗走した。戦うたびに卑怯にも逃げ帰ってきたの意。「三」は三回、またはしばしば・たびたびの意。

2 怯 臆病。

3 鮑子 鮑君。鮑叔のこと。「子」は、ここでは男子の敬称。そこで、現代語訳を「鮑君」とした。

4 九合 集め合わせる。「九」は「糾」（あつめる）と同じ。

4 一匡 天下を統一し、乱れを正すこと。「匡」は、正す。

5 仲父 管仲のこと。「父」は父のように尊敬できる人物に付ける。いかに信任が厚かったかを示す言葉。

句法

為二弟無知所一レ弑　受身形。「為二……所一レ〜」（ル・ノト・スル）の形で、「……ノ〜スルところトなル」と読み、「……に〜される」の意。

薦二管仲一為レ政。　使役形。「薦二……一〜」（メテ・ヲ・シム）の形で「……ヲすすメテ〜シム」と読み、「……を薦めて〜させる」と訳す。「命」「説」「教」と同じように使役を暗示する語なので、下の動詞に使役の助動詞「しむ」を接続させて訓読する。

解説

Ⅰ 春秋時代の概略

殷王朝を攻め亡ぼした武王が鎬京（陝西省西安市）に都をおき天子となり建てた国が周王朝である（前一一二二年）。武王没後の周王朝は、その子成王を補佐し摂政となった周公旦（武王の弟）が周王朝の礼楽・諸制度を整備し充実させ、後に孔子から「郁々乎文哉」（郁々乎として文なるかな）と賞賛された黄金時代を作り上げた。しかし、約三百年経つうちに次第に権威が衰え、諸侯を統率する力を失ってきた。加えて異民族の侵入も活発化し、幽王は侵入してきた犬戎によって攻め殺され、その子平王はその圧迫を避けるため、前七七〇年、都を鎬京から洛邑（河南省洛邑市）に遷した。これを「周の東遷」といい、これ以前を西周、以降を東周と呼ぶが、一般に、周の東遷から秦の統一までを春秋戦国時代と呼んでいる。周の威烈王のとき、晋の大夫であった韓氏・魏氏・趙氏が晋を滅ぼしてその土地を分割し、それぞれが独立する（前四五三年）と周王朝がそれらを諸侯と認めたため（前四〇三年）、それを画期として前期を春秋時代、後期を戦国時代と分けて称する。春秋時代は、周王朝の実力が著しく低下し、その権威はすっかり地に落ちた。その一方で、封建諸侯は周王室の統制を離れて各自の思惑によって土地の開発や軍備を盛んにし富国強兵に努め、同盟や戦争を繰り返しては領土の拡張にしのぎを削り、独立的傾向を強めていった。そして、次第に弱小の都市を併呑して周初に栄えた一千近くの都市国家は百あまりの有力諸侯に整理されていった。このうちでも秦・晋・斉・楚・魯・衛・燕・曹・宋・陳・蔡・鄭・呉・越の十四国が強大となった。こうして歴史の主役の座は諸侯へと移っていった。また、このころ異民族の動きも活発になってきたため、有力諸侯の間には、自分たちは共通の中華諸侯であるという意識が生じ、その連帯意識のもとで形式的に周王朝を奉じ、夷狄の侵攻を防ぐこと（尊王攘夷）を大義名分として同盟を結んだ。さらに、自らその同盟の長となって天下の実権を握ろうとする動きも生じた。覇者と呼ばれるのは実はこの同盟の長なのである。その覇者として、名宰相・管仲の補佐を得て諸侯を葵丘（河南省蘭考県の東）に会盟させ（前六五一年）、最初の覇者となった斉の桓公や十九年に及ぶ亡命生活を家臣によって支えられ晋の君主となり諸侯を践土（河南省内）に会盟させ（前六三四年）、覇者となった晋の文公などがいる。当時、このような有力諸侯が五人現れたので総称して「春秋の五覇」と呼んだ。（このため、春秋時代は覇者の時代ともいわれる）。その五人とは、斉の桓公、晋の文王、楚の荘王、宋の襄公、秦の穆公のことである。しかし、これには異説があり、宋の襄公、秦

の穆公に代わり呉王闔閭・越王勾践を入れることもある。このような権力の下降現象（下剋上）は、それぞれの諸侯内部でも例外ではなく、諸侯とその権臣、権臣相互の間にも勢力争いが起こった。これらの傾向に一層の拍車がかかったのは、戦国時代である（このため、戦国時代は簒奪の時代ともいわれる）。

春秋時代という名称は、孔子が魯国の史官の記録に基づいて著したとされる「春秋」に記載されている時代とほぼ重なっているため、そう称される。

Ⅱ「史記」斉太公世家第二

［本文］

而使三管仲一別将レ兵、遮二莒道一。射中二小白帯鉤一。小白詳死。管仲使二人馳報レ魯。魯送糾者、行益遅。六日至レ斉、則小白已入、高傒立之。是為二桓公一。桓公之中レ鉤、詳死以誤二管仲一。已而載二温車中一馳行。亦有二高・国内応一。故得二先入立一。

［書き下し文］

而して管仲をして別に兵を将ゐて莒の道を遮らしむ。射て小白の帯鉤に中つ。小白詳り死す。管仲、人をして馳せて魯に報ぜしむ。魯の糾を送る者行くこと益遅し。六日にして斉に至れば、則ち小白已に入り、高傒之を立つ、是を桓公と為す。桓公の鉤に中てらるるや、詳り死し、以て管仲を誤らす。已にして温車中に載りて馳せ行く。亦た高国の内応有り。故に先づ入りて立つを得たり。

［現代語訳］

（魯でも無知の死を聞いて、）又、兵を発して公子の赳を送り届けようとし、管仲に命じて兵を率いて、莒から斉への道を遮断させた。その射た矢が小白の帯留めの金具に命中した。小白は死んだようにいつわった。管仲は使者を馳せて、小白を射殺したと魯に報告した。魯の糾を送る部隊はのんびりして行程がますます遅れた。六日かかって斉へ到着すると、小白は既に斉の都へ入って高傒（斉の正卿。高敬仲。）に擁立されていた。これが桓公である。桓公が帯金に矢があたると、いつわって死んだふりをして管仲を誤らせた。やがて、死人を載せる温涼車に載って疾馳した。又、高氏と国氏の内応があったので、先に入国して位につくことができたのである。

（「史記上　世家上」〈新釈漢文体系〉吉田賢抗　明治書院　昭四十四　六一ページ～六三ページ）

鑑賞

Ⅰ「貧交行」杜甫

杜甫が管鮑の交わりを賞賛している詩があるので、それを紹介する。

貧交行

翻レ手作レ雲覆レ手雨　手のひらをちょっと上に向ければ雲となり、
紛紛軽薄何須レ数　今の世の人情はまことに定めなく、忽ちにして変わりやすい。世間無数の軽薄なやからは、いちいち数えたてる要もない。
君不レ見管鮑貧時交　君見たまえ、かの管仲と鮑叔との、貧乏時代の交わりを。

此道今人棄如レ土ノ　ああした美しい交友の道を、今の人は糞土のようにすててかえりみないのだ。

Ⅱ 管仲の遺言

管仲の人物を見抜く力の確かさを感じさせるエピソードがあるので、次に紹介する。

管仲が危篤に陥った時、桓公が見舞って、「（お前が死んだら）群臣の中で誰を大臣にしたらよかろうか。易牙はどうか。」と問うた。管仲はお答えして、「易牙はわが子を殺してその肉を君にすすめました。これは人情にはずれた行為です。かような者をお近づけになってはいけません。」といった。桓公がいうには、「では、開方はどうか。」と。管仲の答えに、「開方は親に背いて（国を飛び出し）君の思召に叶おうとしたものであります。これも人情にはずれた行為です。お近づけになってはいけません。」と。想うに開方はもとは衛の公子で、斉に逃げて来た者であるからだ。桓公が重ねて、「では竪刁はどうか。」と問うと、管仲は答えて、「竪刁はわれとわが身を去勢して、君のご機嫌を取って出世した男であります。これも人情にはずれております。お近づけにならぬがよろしい。」といった。間もなく管仲が死んだ。ところが桓公は管仲の言葉を用いず、ついに三人を近づけたので、三人は権力をほしいままにした。桓公にはお気に入りの婦人で、奥方のように羽振りのよい者が六人あって、どれにも男の子があった。公が亡くなると、五人の公子が位につくことを争って、互いに攻め合った。そのため桓公の屍体は寝台に横たわったまま、衣を着せるでもなく、棺に収めて祭るでもなく、六十七日も長いことうち捨ててあったので、屍体が腐って蛆がわき、戸外にまで這い出すという始末であった。

（「十八史略　上」〈新釈漢文大系〉林秀一　明治書院　昭四十二）

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　管仲の三つの行動における鮑叔の評価と、その理由をまとめてみよう。

【答】

管仲の三つの行動	鮑叔の評価	評価の理由
管仲と鮑叔は一緒に商いをしたが、管仲はその利益を自らが多くとった。	欲深いとしなかった。	家が貧しいことを知っていたから。
管仲は、鮑叔のために事を企てたが失敗し、行き詰った。	愚か者だとしなかった。	時によい時と悪い時があることを知っていたから。
管仲は、三回戦って三回敗走した。	臆病者だとしなかった。	養うべき年老いた母親がいることを知っていたから。

▼ポイント▲　まとめる視点は三つ、設問に指示されているので、それに従う。まとめる範囲は、「管仲字夷吾。…知三仲有二老母一也。」なので、その箇所を丁寧に読み取らせれば、容易にまとめさせられる。

言葉と表現の解答例

1　「管鮑之交」とは、どのような関係か、説明してみよう。

【答】　お互いに理解し合い、自分たちの立場が変わっても壊れることのない信頼の厚い友情。きわめて親密な関係のこと。

▼ポイント▲　漢和辞書やインターネット、故事成語辞典などを調べさせれば答えは出る。

2　「謀る」「図る」「計る」「測る」「量る」「諮る」の意味の違いを調べてみよう。

【答】　「謀る」＝よくないことをたくらむ。「図る」＝あることが実現するようにくわだてる。「測る」＝長さ・高さ・深さをはかる。「量る」＝重さ・容積を調べる。「諮る」＝上の者が下の者に相談する。

▼ポイント▲　漢字一つずつ調べれば理解できるが、資料集などの中にはまとまっているので、そこを確認させる。

言語活動の解答例

1 **管仲が鮑叔に、鮑叔が管仲に抱く心情を、本文に即してまとめてみよう。そのうえで、管仲と鮑叔は、それぞれどのような人物として描かれているか、分かりやすく説明してみよう。**

【答】

〔鮑叔が管仲に抱く感情〕

鮑叔は、管仲が自分に対し不本意な行為をしても常に温かく見守り好意的にその言動を見守り理解し、支援した。それは、管仲の政治的手腕や才能を高く評価するとともに友人として信頼していたからだ。つまり、鮑叔は管仲に対し常に信頼感を抱いていたのだ。

〔管仲が鮑叔に抱く感情〕

管仲は、鮑叔が自分を信じ続け、さらに桓公に推薦してくれた、その友情と自分の才能を認め活かしてくれたことに感謝の気持ちを持っていた。

〔管仲と鮑叔の描き方〕

以上のことから、管仲は政治的手腕の高い、才能ある者。鮑叔は、それを認めて支援する者というように描かれている。

▼ポイント▲　ここは、グループや隣同士で話し合わせ、他の人の様々な意見や視点を聞き、自分の意見を作り上げる活動が大事となろう。そのグループでまとめた意見は、必ず全体に発表させる。その際、自グループでまとめた意見に対する他のグループの質問や意見が出ると授業は活発化するし、深化する。

さて、指導者はこの言語活動の前に、次のことを理解しておく必要がある。それは、管仲は「桓公九レ合諸侯一、一レ匡二天下一、皆管仲之謀。一則仲父、二則仲父。」とあるように、その開花させた政治的手腕によって斉の宰相まで上りつめる。つまり、才能ある者として描かれているのだ。鮑叔は管仲の政治的才能を見出し、友人として信頼し、そればかりか、斉の桓公に有為な人物として推薦する。鮑叔の信頼や推薦がなければ、いくら才能がある管仲でも、その才能を開花させることはできなかった。鮑叔は人を見る目のある人物・才能ある者を支援する人物という描き方がされている。」ということだ。これを前提に、話し合うポイントを指示する。それは以下の通り。「①管仲の鮑叔に対する心情は、『仲曰、生レ我者父母、知レ我者鮑子也。』に表現されているので、グループで吟味しながらまとめよう。②鮑叔の管仲に対する心情は、『管仲字夷吾。…知二仲有二老母一也。』に表現されているので、グループで吟味し、わかりやすくまとめる。その上で、③それぞれがどのような人物として描かれているか、適切な言葉で表現してみよう。例えば、管仲ならば、『桓公九レ合諸侯一、一レ匡二天下一、皆管仲之謀。一則仲父、二則仲父。』と表現されているので、これより斉の宰相まで上りつめた人物ということがわかる。そこまで上りつめるような人物の像はどのようなものか、グループで話し合い、それを表現するのに適切な言葉を見つけてみよう。以上、話し合うポイントを三点指示した。それをベースに管仲と鮑叔の人物像をグループで話し合い、適切な言葉でまとめてみよう。」

という指示を出してもよい。それぞれの人物像を適切でなるべくわかりやすい言葉で表現できれば、言い換えの言語活動にもつながる。

何も助言を与えずに話し合いをさせるのも、いろいろな視点からの意見が出てくる可能性があり、授業は活発化する。その意味から考えると、助言・指示は視点や考え方を提示してしまうので、それぞれの意見の固定化につながるかもしれない。

話し合った内容を発表するので、伝え合うために、わかりやすい文章の工夫を意識することを期待したい。

最後に「研究資料漢文学」に、「史記」の本文と同箇所を論じた補足があり、面白い指摘があるので引用する。

「当時にあって、大夫としての第一の使命は、その主君を覇たらしめることであった。そのためには政治的手腕にたけた優れた人材が必要であり、鮑叔は交遊を通してその才能を管仲に見たのである。更に、鮑叔既進二管仲一、以レ身下レ之。…天下不レ多二管仲之賢一、而多二鮑叔能知レ人也。とあることからすると、鮑叔は管仲を推薦して管仲が活躍すれば、世間の人々は自分をどのように評価するかということまで考えていたはずである。」（「研究資料漢文学　第七巻　歴史Ⅰ」寺門日出男・吉原英夫　明治書院　平十五　P一〇〇）の指摘は面白い。

（前田　康晴）

臥薪嘗胆

要旨

呉王闔廬は伍子胥を用いて国事をつかさどらせ、越を伐ったが、敗死する。その子の呉王夫差は「薪中に臥す」苦難の末、越を夫椒で破る。敗れた越王句践は和睦を乞い、越から賄賂を受けていた宰相伯嚭の進言もあり、助かることができた。一方、引き続き呉王夫差に仕えた伍子胥は、伯嚭の讒言によって罪に陥れられ、呉王夫差の暗愚を罵り呉の滅亡を予言しつつ自害した。句践は、胆を嘗める苦難の末に重臣范蠡と共に国力を充実させ、ついに呉を討ち破った。呉王夫差は伍子胥に合わせる顔がないと恥じつつ自害した。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～ P一四〇・6〈以二呉兵一入レ郢。〉	呉王闔廬は子胥を登用して国政をとらせた。子胥は楚の人であったが、父が楚の平王に殺されたので、呉に逃げて来た。子胥は呉の兵を率いて楚の都に攻め入り、父の仇に報いた。
第二段	P一四〇・7〈呉伐レ越。〉～ P一四〇・9〈而忘三越人之殺二而父一邪。〉	闔廬は越との戦いに敗れて死ぬと、子胥は引き続きその子の呉王夫差に仕えることとなった。夫差は「臥薪」して敗北の屈辱を忘れないようにした。
第三段	P一四〇・10〈周敬王〉～ P一四一・2〈説二夫差一赦レ越。〉	夫差はついに越を夫椒で破った。ところが越から賄賂を受け取っていた呉の宰相伯嚭は、子胥の反対を押し切って呉王に説き、命乞いをした越王句践を許させた。
第四段	P一四一・3〈句践反レ国〉～ P一四二・2〈事レ謀レ呉。〉	帰国した越王句践は、動物の胆をなめては会稽山の恥を忘れないようにし、重臣范蠡と共に呉を討つ策を練った。

第五段	P 一四二・3〈太宰嚭〉～ P 一四二・7〈命曰二胥山一。〉	子胥は宰相伯嚭の讒言を受けいれた呉王夫差によって自害させられた。子胥は遺言で呉の滅亡を予言したので、怒った夫差は、死んだ子胥の屍を辱めた。呉の国の人は子胥をあわれに思って、その死を弔った。
第六段	P 一四二・8〈越、十年生聚〉～ 終わり	越は二十年にわたって国力を蓄え、ついに呉を破った。夫差も命乞いをしたが范蠡に斥けられた。呉王夫差は、あの世で子胥に合わせる顔がないと言って、布で顔を隠して自害した。

訓読と現代語訳

【第一段】 ①呉王闔廬、伍員を挙げて国事を謀らしむ。②員、字は子胥、楚人伍奢の子なり。③奢、誅せられて呉に奔り、呉の兵を以ゐて郢に入る。

【第二段】 ④呉越を伐つ。⑤闔廬傷つきて死す。⑥子の夫差立つ。⑦子胥復た之に事ふ。⑧夫差讎を復せんと志し、朝夕薪中に臥し、出入するに人をして呼ばしめて曰はく、「夫差、而越人の而の父を殺しを忘れたるか。」と。

【第三段】 ⑨周の敬王の二十六年、夫差越を夫椒に敗る。⑩越王句践、余兵を以ゐて会稽山に棲み、臣と為り妻は妾と為らんと請ふ。⑪子胥言ふ、「不可なり。」と。⑫太宰伯嚭越の賂を受け、夫差に説きて越を赦さしむ。

【第四段】 ⑬句践国に反るや、胆を坐臥に懸け、即ち胆を仰ぎ之を嘗めて曰はく、

【第一段】 ①呉王の闔廬は、伍員を登用して国政をとらせた。②伍員は字を子胥といい、楚の国の人伍奢の子である。③伍奢は（楚の平王に）罪をとがめて殺されたので子胥は（難を避けるため）呉の国に亡命し、（その後闔廬の計らいで）呉の兵を（借り、それを）率いて（楚の都の）郢に攻め入って（て父の仇に報い）た。

【第二段】 ④（その後）呉が越を攻撃した。⑤（敗れた）闔廬は傷を負って死んだ。⑥（そこで）子の夫差が（呉の）王位に就いた。⑦子胥は引き続き夫差に仕えることになった。⑧夫差は父の仇を討とうと心に決め、明け暮れ薪の上に寝（起きし）て（身にこたえる痛みで恨みを新たにし）、（また家の中の部屋に）出入りするごとに（恨みを忘れないようにするため）家来に言わせた、「夫差よ、お前は越の人間がお前の父を殺したのを忘れたのか。」と。

【第三段】 ⑨周の敬王の二十六年（前四九四年）に、夫差は（とうとう）越を夫椒の地で破った。⑩越王句践は、敗残兵を率いて会稽山に立て籠もり、（夫差に対して）自らは（あなたの）家来となり、妻は召し使いとなって仕えます（から、命だけは助けてください）と願い出た。⑪子胥は（強い口調で）言った、「（この願いを許すことは）よくない（殺してしまいなさい）。」と。⑫（ところが、）宰相伯嚭は越の賄賂を受け取っていたので、夫差を説得して越王をゆるさせてしまった。

【第四段】 ⑬（こうして）越王句践は越の都に戻ると、胆を寝起きする自分の部屋につり下げ、上を向いて肝をなめては（その苦さで敗北の屈辱を新たにし自分に言い聞かせ

「女 会稽の恥を忘れたるか。」と。⑭国政を挙げて大夫種に属し、而して范蠡と与に兵を治め、呉を謀るを事とす。

【第五段】 ⑮太宰嚭子胥 謀の用ゐられざるを恥ぢて怨望すと譖す。⑯夫差 乃ち子胥に属鏤の剣を賜ふ。⑰子胥其の家人に告げて曰はく、「必ず吾が墓に檟を樹ゑよ。檟は材とすべきなり。吾が目を抉りて東門に懸けよ。以て越兵の呉を滅ぼすを観ん。」と。⑱乃ち自剄す。⑲夫差其の尸を取り、盛るに鴟夷を以てし、之を江に投ず。⑳呉人之を憐れみ、祠を江上に立て、命けて胥山と曰ふ。

【第六段】 ㉑越、十年生聚し、十年教訓す。㉒周の元王の四年、越呉を伐つ。㉓呉三たび戦ひて三たび北ぐ。㉔夫差姑蘇に上り、亦 成を越に請ふ。㉕范蠡可かず。㉖夫差曰はく、「吾以て子胥を見る無し。」と。㉗幎冒を為りて乃ち死す。

て）言った、「お前は会稽山で受けた（あの苦い）屈辱を忘れたのか。」と。⑭国政の全てを重臣の文種に任せ、自分は范蠡と共に（もっぱら）軍隊を訓練し、呉を攻略する計画に専念した。

【第五段】 ⑮（一方、呉の方では）宰相伯嚭が（夫差に）子胥は自分の策が採用されなかったことを悔しいと思い（王様を）恨んでいますと讒言した。⑯（それを信じた）夫差はそこで子胥に（これで自害せよという意味を込めて）属鏤という名剣を賜った。⑰子胥は家族に次のように告げて言った、「（私が死んだら）必ず私の墓にひさぎの木を植えよ。ひさぎは（成長して、呉王夫差の棺桶の）材料にすることができる。（そして、）私の目をえぐり取って東の城門にかけておけ。この目で越の兵が呉を滅ぼすところを見てやろう。」と。⑱そうして（子胥は）自分で自分の首をはねて死んだ。⑲夫差は（その話を聞いて激怒し子胥の）死体を取って、酒を入れる馬皮製の袋に詰め、長江に投げ込んだ。⑳呉の国の人々は子胥をかわいそうに思って、ほこらを長江のほとりに建て（て子胥の霊を弔い）、そこを胥山と名付けたのであった。

【第六段】 ㉑越の国では、十年間人口を増やし、物資を蓄えて国力を充実させ、（次の）十年間で兵を訓練し（戦力を向上させ）た。㉒周の元王の四年（前四七三年）に、越は呉を攻撃した。㉓呉は何度も戦ったがそのたびに敗北した。㉔夫差は姑蘇台に登り、（先に越王句践が会稽山でしたのと同じように）講和を越に願い出た。㉕（しかし、）范蠡は聞き入れなかった。㉖夫差は言った、「私はあの世で子胥に合わせる顔がない。」と。㉗死者の顔に掛ける四角の布を作って（顔を隠して）とうとう自害した。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶「春秋時代」の呉楚の抗争の概略を理解する。

❶漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせる。この調査や説明に、多くの時間を費やすことができないので指導者が事前にまとめたプリントを用意し配布するか、そのポイントだけを板書して簡単に説明してもよい。

「『春秋時代』の呉楚の抗争」の概略プリントは、後出「『解説』春秋時代－呉楚の抗争－」を参考にして作成し、確認させるとよい。

展開

学習活動のポイント

❶本文を黙読する。その後、範読を聞く。
❷一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。
❸「臥薪嘗胆」の意味を調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめる。知技⑴ウ **〔「言葉と表現」 1〕**
❹現代語訳をする。知技⑵ウ
❺内容読解をする。思判表B⑴ア **〔「学習のポイント」 1・2〕**

❶範読はゆっくり丁寧に読む。

【注意させる読みの箇所】「挙二伍員一謀二国事一。」「奢誅」「事」「出入使二人呼一曰」「而忘二越人之殺一而父一邪。」「敗」「説二夫差一赦レ越。」「嘗」「女忘二会稽之恥一邪。」「恥二謀不一レ用」「怨望」「賜」「抉」「江上」「成」

❷辞書などで「臥薪嘗胆」の意味を調べ、それを参考に、要旨をノートにまとめ、発表させる（五十字程度）。その際、物語の展開が分かりやすくするため、P一四〇の「人物相関図」を利用させる。要旨の発表は、黒板に板書させてもよいし、口頭で発表させてもよい。

【評価】「臥薪嘗胆」の意味を調べ、我が国の言語文化に特徴的な語句の文化的背景に理解を深めているか、確認する。

❸「臥新」部分と、「嘗胆」部分に分けて現代語訳をする。ともに、生徒数名を指名し、現代語訳させる。難解な箇所については、生徒の発表状況を見て指導者が補足する。

・「臥新」部分

【注意すべき句形】「挙二伍員一謀二国事一。」（使役）「奢誅」（受身）、「出入使二人呼一曰」（使役）「而忘二越人之殺一而父一邪。」（疑問）「説二夫差一赦レ越。」（使役）

【注意すべき語句】「挙」「誅」「以」「事」「而」「敗」「略」

・「嘗胆」部分

【注意すべき句形】「女忘二会稽之恥一邪。」（疑問）「恥二謀不一レ用」（受身）

【注意すべき語句】「嘗」「事」「怨望」「賜」「抉」「江上」「北」「成」

【評価】【注意すべき語句】【注意すべき句形】を正確に現代語訳できているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。

❹次の**ア**～**コ**のポイントに注意する。**ア**「入レ郢」とは誰が何のためにそうしたのか、**イ**夫差が「薪中」で寝起きした理由、**ウ**「請二為レ臣妻為レ妾。」から読み取れる句践の気持ち、**エ**子胥が「不可。」と言った理由、**オ**太宰伯嚭が夫差に越王句践を許すよう助言した理由、**カ**句践が「仰レ肝嘗レ之」した理由、**キ**夫差が子胥に「属鏤之剣」を与えた理由、**ク**遺言から読み取れる子胥の気持ち、**ケ**夫差の子胥に対する気持ちの変化、**コ**夫差が「吾無二以見一子胥一。」と言った理由。それぞれグループで話し合い、代表が発表してもよい。

ア…本文からだけでは、「何のために」が分かりにくい。そこで、「子胥は、呉の兵を借りてでも、したかったこととは何か。」という助言を与える。

イ…「『而忘二越人之殺一レ而父一邪。』の一文に注意しよう。」という助言を与えてもよい。

ウ…「ここはどのような場面か。その場面で発せられた言葉だから、どのような思いで発したものか。」など助言をいくつか与えると、読み解きのためのグループワークがスムーズになる。

エ…「ここは、**ウ**で確認したように句践の命乞いの場面。これに対して子胥は『不可』と言う。なぜ命乞いを許さなかったか。」という助言を与えてもよい。

オ…「太宰伯嚭受二越賂一、説二夫差一赦レ越。」に注意させればよい。文脈を丁寧に確認させれば、さほど難しい問題ではない。

カ…「嘗レ之」の「之」は「胆」を指し、苦いもの。「臥新」と同じ意味を持つこと理解させる。「『臥新』と『仰レ肝嘗レ之』は同じ意味。」という助言を与えてもよい。復讐心・敵愾心を持続させるため。

キ…まず、君主が臣下に剣を与える意味（自害を命じる）を理解させる。その意味をグループの中に知っている生徒がいれば、その知識をグループ内で共有させる。そうでない場合は、「樹二吾墓檟一。」とあることから、生徒に「自害せよ」だと理解させる。次に、「なぜ、夫差は自害を命じたのか。その理由は、『太宰嚭譖下子胥恥二謀不一レ用、怨望上。』にある。この文より、誰の策略によって、誰と誰の人間関係はどうなったか。」という助言を与える。「語句の研究」「恥謀不用」参照。

ク…「子胥の遺言の中に、その気持ちを表現している箇所があるので、それを根拠に話し合ってください。」という助言を与えてもよい。子胥の気持ちは「以観二越兵之滅一レ呉。」に表現されているので、この言葉をどのように読み解かせるかが要点。そして、どのような言葉に言い換えられるか、その言

葉をグループで話し合わせる。

ケ…夫差の視点から子胥がどのように映ったかを理解させる問い。グループの話し合いによって、本文を丁寧に吟味させる。「気持ちの変化は、この場合は①夫差が子胥を自害させたときの子胥に対する気持ち、②夫差が「自刎」するときの子胥に対する気持ちがどのようなものかを読み解くことが要点です。」という助言を与えてもよい。

コ…場面展開より、ここは、呉王夫差が自分の不明を恥じながら「自刎」するところ。誰に対して何に恥じたのかをグループで話し合わせる。

【評価】　それぞれの読解のポイントについて、本文の内容をもとに的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

❺自分で本文を丁寧に吟味し、グループの内で発表させる。その発表内容をグループ内で検討させる。

■まとめ

学習活動のポイント

❶夫差が句践に敗れたのはなぜか。その理由をグループで話し合い、代表が発表する。思判表B(1)イ 主態 **〔「言語活動」1〕**

❷❶で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。

❸四字熟語を創作し、発表する。また、その作品の意味と使い方も解説する。**〔「言葉と表現」2〕**

❹まとめの朗読をする。

❶自由に話し合わせてよいが、本文の内容になるべく即した意見にするよう注意させる。やはり、諫言の臣が必要なことはいつの世も同じという読み解きをさせればよい。さらに、ここは話し合う活動なので、意見を述べることと、聞くことを大事にさせる。意見を述べるときは、「私は 意見（結論） のように考えます。なぜなら、 結論を導いた根拠 だからです。」のパターンで話し、聞くときは相手の意見をよく聞く傾聴の態度に徹するよう注意させる。

【評価】　・本文に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、夫差が句践に敗れた理由を解釈しているか、話し合いの観察などにより確認する。

・夫差が句践に敗れた理由について、グループ内で主体的な態度で話し合い、また、自分の考えをグループ内の他者に分かりやすく伝えようとしているか、分析する。

❷他グループの質問や意見を十分に検討させることは、生徒たちに考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。そこで、指導者は「他グループの発表を聞きながら、各グループはその理解に対する疑問点・質問や意見を考え、メモしておくこと。後ほど、それに対する話し合いをします。」と告知する。生徒が考えを

深めるためには、他からの意見と自分たちの考えを検討するという言語活動が大事となる。

❸ゲーム感覚で四字熟語を作らせたい。作品の発表は、グループ内でよい。

❹大きな声で各文の意味を考えながら、音読させる。

発問例

●一四〇ページ

問「挙」（3行目）の意味を的確に表す二字の熟語を答えよ。

答 登用。推挙。挙手。

問「奢詐（セラレテ）而奔レ呉（リ）、以二呉兵一入レ郢（ルニ）。」（5〜6行目）について、

1 **「詐」と同じ意味で使われている熟語として適切なものを次の中から選べ。**

(ア)詐伐　(イ)詐罰　(ウ)詐求　(エ)詐殺

2 **「奔」の主語は誰か。**

3 **[易]A「以」はどのような意味か。**

[中]B「以」と同じ働きのものを、次の中から選べ。

(ア)請以レ剣舞。
(イ)孔子以二詩書礼楽一教。
(ウ)宮之奇以二其族一行。　＊宮之奇＝人名。
(エ)文以二五月五日一生。　＊文＝人名。

4 **「入レ郢」とあるが、誰が何のためにそうしたのか。**

答 1 (エ)
2 伍子胥（員）
3 A 軍隊などを率いる
　B (ウ)
4 伍子胥が、楚王に殺された父（と兄）の仇に報いるため。

語句の研究

●一四〇ページ

1 臥薪嘗胆　「薪に臥し胆を嘗める」とは、仇（あだ）を討つために、長い間、苦難に耐えることの例え。非常な苦心を重ねて復讐を図ること、将来の成功を図ること。「臥薪」「嘗胆」ともに、過去の恥辱を忘れないように身を苦しめること。

3 呉　春秋時代（「管鮑之交」「解説1　春秋時代の概略」参照）の末期、長江下流域に急激に勃興し、一時中原に覇を称えた大国。姑蘇（現在の江蘇省蘇州市）に都した。「史記」呉太伯世家によると、周の文王の叔父といわれる太伯は、弟の季歴に位を譲るため南方の荊蛮の地に落ち延び、文身断髪（入れ墨をし、髪を切る呉越一帯の風習。野蛮とされた。）して呉国を建てたとある。その後、太伯から数えて十九代の寿夢（じゅぼう）は王号を称した。この頃中原の大国晋は、六卿と呼ばれる有力家臣の権力闘争から内紛が絶えなかった。するとその混乱をついて南方の大国楚が中原をうかがう。それを抑えようと、晋が呉と同盟関係を結び武器・兵法を伝えて援助した。これが、呉が強大化した原因の一つであったといわれる。前四七三年、不倶戴天の敵として激しく死闘を繰り返した越によってついに滅ぼされた。

3 闔廬　「闔閭」とも書く。呉が周王朝を無視し「王号」を僭称するようになった時を初代とするなら、初代の呉王は寿夢となる。それから数えて六代目の呉王が闔廬。ちなみに、太伯を初代とするなら寿夢は十九代。名は光。在位、前五一四年〜前四九六年。春秋五覇の一（別説もある）。即位には複雑な経緯がある。王寿夢には四人の息子があったが、末子の季札がずば抜けた賢人で、王位を譲りたいと考えた。しかし寿夢が死んでも季札は固く辞退し、やむなく長兄の諸樊が即位した。諸樊は父の遺志を継ごうと、王位を息子でなく弟に順に伝えて末弟の季札に及ぼそうとした。ところが余昧の次に季札が王位を継ぐ番になっても季札は固辞する。そこで余昧の息子の僚が即位した。だがこれが公子光には気に入らない。王位は、当然長兄諸樊の子供である自分に戻るべきだというのである。機会を狙っていた公子光は、王僚を暗殺して即位する。これが闔廬である。

［呉系図］数字は即位順

補 4本文だけからでは分からないので補足する。ただし、内容的には伍子胥（員）の人間性を暗示するエピソードとして重要。

問 **子胥はなぜ呉王に仕えたのか。**

答 楚王に父（と兄）を殺された仇に報いるため、呉の力を借りようとしたから。

補 「奢誅而奔レ呉、以三呉兵一入レ郢。」に注意させ、指導者が補足する。

問 **「伐」（7行目）・「討」・「撃」のそれぞれの意味を調べよ。**

答 伐＝軍隊を率いて攻撃する。討＝罪を言い立てて退治する。撃＝手や物で強く打つ。

補 漢和辞典を用いる。

問 **「讎」（8行目）の内容を説明せよ。**

答 父を殺された仇。

補 夫差は越王句践によって父（闔廬）を殺されたので、その仇を討とうとした。

問 **「臥二薪中一」（8行目）について、主語は誰か。**

答 [1] [2]

「薪中」で寝起きした理由は何か。

答 [1]夫差

[2]復讐の思いが鈍らないようにするため。

補 薪の上はデコボコして固く寝にくい、それによって心身を苦しめ、ともすれば柔弱になる気持ちを戒め、報復の念を励ますのである。

問 **「出入」（8行目）の主語は誰か。**

太伯…①寿夢
- ②諸樊——⑥光（闔廬）
- ③余祭　⑦夫差
- ④余昧——⑤僚
- 季札

3挙 登用する。挙げ用いる。

3伍員 生年未詳～前四八四年。楚の人。字は子胥。呉の闔廬・夫差二王に仕え、呉越の抗争を彩る呉側の謀臣。伍氏は楚の名族で、父の伍奢は平王の太子建に仕える大傅（たいふ）（侍従長）だったが、平王の寵臣、少傅（副侍従長）費無忌の讒言にあい、伍奢は長男の伍尚（子胥の兄）と共に処刑されてしまう。子胥は平王への復讐を心に誓って楚を逃れ、呉に亡命した。当時、呉は王僚の時代だったが、子胥は公子光の王位簒奪の意図を知り、専諸という勇者を公子光に推挙した。のち果たして専諸は王僚を暗殺し、闔廬（公子光）が即位、子胥は外交顧問に取り立てられて国政に参与することになった。

4字 「管鮑之交」の「語句の研究」「字」を参照。

4楚人 「楚」は春秋戦国時代に、長江中流域を領有した国。都は郢（現在の湖北省荊州市）。「鼎の軽重を問う」の故事で有名な荘王（前六一三年～前五九一年在位）の時代には、中原に覇を称え、以後、晋と覇者を争った。

5奢誅 伍奢が誅せられた。文脈から受身に読む。「誅」は、罪をとがめて殺す意。

キー・ポイント　伍奢が誅せられた理由の補足 伍奢が誅せられた事情は前出「語句の研究」「伍員」にあるとおりだが、多少補っておくと、費無忌は太子建の少傅でありながら太子などおかまいなしで、かえって何かにつけて太子を平王に中傷し、王に取り入ろうとした。太子を弁護して王を諫めた伍奢は、費無忌の入れ知恵によって捕らえられ、伍奢の二人の息子伍尚と伍員（子胥）も父の助命を条件に召し出される。思いやりの深い兄の伍尚は、殺されると分かっていながらこの命令に応じ、気性の激しい弟の子胥は命令に従わず、逃れて父と兄の復讐を誓った。獄中の伍奢は子胥の亡命を知ると、「楚の君臣はこれから苦しむことになるぞ。」と言ったと伝えられている。予言どおり、楚を滅ぼすが、「史記」伍子胥列伝によると、そのとき、平王はすでに死んでおり、息子の昭王も出奔したあとだった。やむなく子胥は平王の墓をあば

夫差。

補 家臣とする説もある。「語句の研究」の「出入使二人呼一」を参照。

問 **「使二人　呼一」（8行目）を書き下し文に改めよ。**

答 人をして呼ばしめて

問 **「而」（9行目）について、**
[易]**読みを、現代仮名遣いで答えよ。**
[易]**同じ読み方をする漢字一字を本文中から抜き出せ。**
[中]誰を指すか。

答 [3] [1]なんじ
[2]女
[3]夫差

問 **夫差は復讐を忘れないためにどのような対策をとったか。本文から該当する部分を抜き出せ。**

問 **「周敬王二十六年、夫差敗二越于夫椒一。」（10行目）について、**
周王の年号で時が指定されたのはなぜか。

答 [2] [1]
「敗」とはどのような意味か。
[1]権威が地に落ちたとはいえ、まだ周王朝の世であったから。
[2]敵をうちやぶる。

補 **● 一四一ページ**
他動詞である。

き、屍を引きずり出して三百回も笞打って父と兄の恨みを晴らした。この非道の仕打ちをとがめられた子胥は、「吾日暮途遠、吾故倒行逆施之」（私は日が暮れて遠い道を行くようなものだ。だから手段を選んでいるいとまはないのだ。）」と言ったとされる。

6 以二呉兵一入レ郢　「以」は動詞としての用法。「ひきヰル」と読み、ひきつれていく・みちびくの意。「率」と同じ。呉に逃れて以来十六年目の前五〇六年、子胥は闔廬に従って楚の都郢を陥れた。ところが、すでに、平王は死んでいた。前出「キーポイント」参照。

7 呉伐越　前五〇五年、呉王闔廬が楚の都郢にいる隙を突いて、越が呉を攻撃したことに対する報復として、前四九六年に、呉が攻め込んだ。「伐」は、軍隊を率いて攻撃する。なお、「討」は罪を言い立てて退治する。「撃」は手や物で強く打つ。「越」は、春秋時代末期、長江下流域、呉の南方に興起して呉と激しく争った国。会稽（現在の浙江省紹興市）に都した。「史記」越王句践世家では、夏王朝の禹の末裔で、始祖夏后帝少康の庶子が会稽に封ぜられ、文身断髪したが、その後二十余世を経て允常の代になって強盛となり、呉王闔廬と対立した。中原の晋と楚との対立において晋が呉と結んで楚を牽制しようとしたように、楚は越と同盟関係を結んで呉に当たろうとしたこと、また地理的にも呉と越とは近接し、どうしても両立しない関係にあったことなどから、両国は死闘を繰り返した。

7 闔廬傷而死　越では允常が死ぬとその子の句践が位に就き、初めて王号を称した。その元年（前四九六年）、呉王闔廬は越の喪に乗じて越を攻撃したが、これを檇李で迎え撃った句践は決死隊に敵軍の面前で自刎させるという奇策を用い、度胆を抜かれた呉軍の虚をつき敗走せしめた。この戦いで闔廬は、矢で射られ親指が傷つき、それが原因で死んだ。

7 夫差　呉王闔廬の子。呉の七代目の君主。在位、前四九五年～前四七三年。

7 事　上長の人の用事を務める。奉仕する。「師事」「兄事」。なお、「仕」は主人をもって奉公する。

8 復レ讎　仇を討つ。「讎」は敵対する相手。敵。

8 朝夕　朝と晩。転じて、明け暮れ、いつも。

問「請為臣妻妾」（1行目）について、

1 **現代語訳せよ。**

2 **[中][A]越王句践の気持ちとして適切なものを次の中から選べ。**

(ア)夫差はすばらしい人物なので是非仕えたいという気持ち。

(イ)戦争に負けるという恥を受けたのだから、殺してくれという気持ち。

(ウ)夫差の家臣になるのも仕方がないという諦めの気持ち。

(エ)何とか生き残って夫差に対して復讐してやろうという気持ち。

[難][B]どのような句践の気持ちを読み取ることができるか。

答 1 自らは家来となり、妻は召し使いとなって仕えたいと願い出た。

2 [A](エ)

[B]何とか生き残ろうとする気持ち、など。他にも切羽詰まった気持ち、口先だけで切り抜けようとする気持ち、死を恐れる気持ちなど、いろいろ答えが出るものと思われるが、ここは殺されそうになっている場面であることに注意させる。

補

問 ◉ **子胥が、「不可。」（2行目）と言ったのは、なぜか。**

答 伍子胥は、この会稽の勝利という絶好の機に句践を殺しておかないと将来に禍根を残

---

8 臥二薪中一　「臥」は寝ること。固い薪を積み重ねた上に寝起きすることで心身を苦しめ、復讐の思いが鈍らないようにした。

8 出入使二人呼一　「出入」はその主語を巡って、(1)夫差と、(2)家臣の両説があるが、ここでは「左伝」定公十四年の条に「夫差使二人立二於庭一若出入必謂レ己曰…」とあるのに従って(1)ととり、庭などに家臣を立たせておいて自分が出入りするたびに言わせたものとする。参考までに、(2)は、臣下が夫差の前に出るたびに挨拶代わりに叫んだものということになる。なお、「史記」呉太伯世家では、「爾而忘二句践一殺二汝一乎」という言葉は闔廬の臨終に当たっての夫差への遺言を踏まえたものということになっている。それに対し、夫差は、三年のうちに仇を報いますと答えている。

9 而忘二越人之一而父一乎　お前は越の人間がお前の父を殺したのを忘れたのか。「而」は「汝・女・爾・若」と同じ。二人称代名詞。「乎」は、疑問・反語を表す助字。「句法」参照。

10 周敬王二十六年　前四九四年。当時は春秋時代（前七〇年～前四〇三年）であり、権威が地に落ちていたとはいえ、周王朝の世であるので、周の年号でいう。

10 敗二越于夫椒一　句践は夫差が軍事力強化に努めていると聞き、先制攻撃をかけようとした。句践の臣范蠡はまだその時機でないとして諫めたが、句践は聞かずに出撃し、この敗戦となったのである。「于」は場所を表す助字。「夫椒」は江蘇省の南西、太湖の中にある山。この辺りが呉と越との国境になっていた。「于」は、「於・乎」と同じ用法の助字。ここでは場所を表す。

10 越王句践　越の二代目の君主。允常の子。在位、前四九六年～前四六五年。春秋五覇の一（別説もある）。呉平定後、句践は、貢ぎ物を周王に献上して覇者（侯伯）の称号を授けられた。功業成ったあと、越王のもとを去ろうとした范蠡（後述）の言葉に「越王為レ人長頸烏喙、可二与共一レ患難一、不レ可二与共一レ楽。（越王は首が長く口は烏のような不吉な人相だ。苦難をともにすることはできても、楽しみは分かちあえない人柄だ。）」とある。「句」は「勾」とも書く。

● 一四一ページ

1 余兵　敗残兵。五千人であったという。

1 棲　立て籠もる。もと、鳥などがねぐらに

すと考えたから。

補「なぜ句践の命乞いを許さなかったのでしょうか。許してしまうとどうなると考えたのでしょうか。」というヒントは与えてもよい。「史記」呉太伯世家では、「句践為レ人能辛苦。今不レ滅、後必悔レ之。」（句践の人と為り、能く辛苦す。今滅せざれば、後必ず之を悔いん。）とある。

問「太宰伯嚭受二越賂一、説二夫差一赦レ越。」（2行目）について、

「賂」はどのような意味か。

「説二夫差一赦レ越。」を現代語訳せよ。

太宰伯嚭が越王句践を赦すように夫差に助言したのはなぜか。

答 1 賄賂

2 夫差を説得して越王をゆるさせた。

3 太宰伯嚭は越から賄賂を受け取り内通していたから。

●一四二ページ

問「会稽之恥」（1行目）とは具体的にどのようなことか。

答 夫差に敗れた越王句践は、会稽山で夫差に命乞いをするなど屈辱的な目にあったこと。この故事より「会稽の恥」を敗戦の恥辱というようになった。

補

問「挙二国政一」（1行目）の「挙」はどのような意味か。

宿る、また、やすむ意。

1会稽山　浙江省紹興市の南にある山。風光の名勝としても名高く、麓に馬をまつった廟がある。

1請レ為二臣妻為一レ妾　自らは家来となり、妻は召し使いとなって仕えたい。妻ともども服従したい、の意。助命と和睦を嘆願する言葉。「臣」「妾」は、もと、男女の召し使い、奴隷。

1子胥言　「言」は、ここでは強く主張する・自分から言い出すの意。「曰」を用いてもいいところであるがそうしていないのは、「曰」は言語音声を発することをいう語なので、主張するというニュアンスを伝えにくいためともとれる。

2太宰　官名。宰相。王を輔け、すべての官を統括する。

2伯嚭　生年未詳～前四七三年。楚の人。大夫であった祖父が楚で誅殺されたので呉に亡命し、闔廬・夫差の二王に仕えた。夫差が即位すると宰相にとりたてられていっそう重きをなしたが、伍子胥が対越強硬論を唱えたのに対し、伯嚭はしばしば越から賄賂を受けて融和策を主張して対立した。この会稽の勝利のときがその初めで、伍子胥がこの機会に句践を討っておかないと将来に禍根を残すと説いても、夫差は伯嚭のほうを信任して聞き入れなかったのである。呉が滅ぼされたとき、伯嚭は不忠の臣として句践に処刑された。

2賂　賄賂。金帛の贈与。

2赦　罪をゆるす。刑罰を免除する。

キー・ポイント　李白の詩　越王句践が夫差に命乞いしたとき、美女の西施をおくったが、夫差が西施との愛に溺れているうちに句践は復讐の計画に没頭していたといわれる。次の詩は、李白が呉越の地を訪ねたとき、往時を偲んで作ったものである。

蘇台覧古（蘇台覧古）

旧苑荒台楊柳新
旧苑荒台楊柳新たなり
古い庭園と荒れ果てた高台にも楊柳が新しい芽を吹いている。

菱歌清唱不レ勝レ春
菱歌清唱春勝へず
（庭園の中の地では）菱の実を採る乙女たちの清らかな歌声が聞こえて春（の悩ましさ）に耐えられない。

只今惟有二西江月一
只今惟西江の月のみ有り

補 答 全て。すっかり。

補 答 「挙二伍員一」（一四〇・3）の「挙」とは意味が違うので注意させる。

問 **「治レ兵」（3〜4行目）とはどのような意味か。**

答 人員や装備を整えて軍隊を調練するの意。

問 ◉**「賜二子胥属鏤之剣一」（3〜4行目）とあるが、夫差が、子胥に「属鏤之剣」を与えたのは、なぜか。**

答 自害を促すため。

補 答 「賜レ剣」は、君主が臣下に自害を促すため慣用的な措置。

問 **「槨可レ材也。」（5行目）とはどのような意味か。**

答 櫝が成長して棺桶の材料になる頃には、呉は越に滅ぼされ暗君夫差の棺桶が必要になるだろうの意。

問 **「東門」（5行目）と言ったのは、なぜか。**

答 子胥は、越軍が攻め入るならば「東門」が真っ先に狙われると考えたため。

問 **遺言から子胥のどのような気持ちが読み取れるか。**

補 答 夫差への嘲罵の気持ち。伍子胥の生死を貫くキーワードは「恨み」である。それが、死に際では夫差に向けられ、越に滅ぼされるという予言的遺言となるのである。「解説」を参照。

（この地には）今はただ西方を流れる川を照らす（昔に変わらぬ）日があるばかり。

曽照呉王宮裏人
曽て照らす呉王宮裏の人
（この月は）かつて呉王の宮殿の中にいた美女（西施）を照らした（日な）のだ。

4反レ国　越の都に戻る。「国」は、国都の意。

4懸二胆於坐臥一　胆を寝起きする自分の部屋につり下げる。「懸」はつり下げる。ぶら下げる。「胆」は動物の胆のうを乾燥させたもの。「坐臥」は寝起きする自分の部屋。座ったり寝たりする日常の部屋。

4仰レ肝嘗レ之　上を向いて胆をなめた。苦い胆をなめることで夫差から受けた配線の恥辱を忘れることのないようにするため。

4女忘二会稽之恥一乎　お前は会稽山で受けた（あの苦い）恥辱を忘れたか。「女」は「汝・而・爾・若」と同じ。二人称代名詞。「乎」は、疑問・反語を表す助字。「句法」参照。「会稽之恥」とは、会稽山で受けた敗戦の恥辱。一般に「敗戦の恥辱」の意に用いる。

● 一四二ページ

1挙二国政一　国政の全てを。「挙」は、全て、すっかり残らず、みな。「挙国一致」「挙党体制」など。前出「挙二伍員一」の「挙」は登用するの意。

1属　任せる。委ねる。委嘱する。「嘱」と同じ。

1大夫種　「大夫」は周代の官名。家老職に相当する重臣。「種」は文種。生没年未詳。范蠡と並ぶ越王句践の重臣。越が会稽で呉に敗れ、句践が討ち死にを決意したとき、伯嚭に賄賂を贈ることを献策して句践を励まし、自ら使者にたち和議を成立させて句践の危機を救った。句践は国政を范蠡に委ねようとしたが、范蠡の「軍事なら自分が上だが、内政では文種のほうが上」とする意見に従って文種に国政を任せた。句践の覇業達成の後、范蠡は身を引いたが文種はその機会を逸し、句践から疑われて自害させられた。

1范蠡　生没年未詳。楚の人。字は少伯。越王句践の重臣。句践に仕えること二十数年にして、ようやく宿敵呉を滅ぼした。しかし范蠡は、「蜚鳥尽き良弓蔵され狡兎死し走狗烹らる。（人は利用価値のある間はこき使われるが、無用になると捨てられてしまう。）」

問 **「為二幎一」（10行目）して死んだのはなぜか。**

答 子胥の諫めを聞かずに、越王句践を赦し、呉の滅亡を招いてしまい、子胥に合わせる顔がないという自己を恥じる気持ちから。

補 自責の念を表現した言葉であることを理解させたい。

問 **夫差が「臥薪」し、句践が「嘗胆」するに至った経緯と、そうすることによって得られた結果とを、それぞれ整理せよ。**

答 夫差の臥薪＝父の闔廬が越との戦いに敗死し、その復讐の思いを忘れないようにするため。結果、越を夫椒に破り、会稽山で越王句践を降伏させた。
句践の嘗胆＝会稽山で呉に敗れた屈辱を忘れないようにするため。結果、呉を滅ぼし、夫差を自殺に追い込んだ。

（「史記」越王句践世家）と言ってさっさと句践のもとを去り、斉に行き農耕で財を築いたが、宰相就任を懇願されるやその資産を人々に分け与え、今度は陶に移り陶朱公と名乗り、農耕交易に従事して再び巨万の富を築いた。このように日本では、児島高徳の「天莫レ空二句践一、時非レ無二范蠡一」の句で忠臣として知られる范蠡も、本領はむしろその後半生の、名誉権力に恬淡とした明哲保身ぶりにあるといってもよい。

2 治レ兵　人員や装備を整え軍隊を調練する。

2 事レ謀レ呉　どうしたら呉を滅ぼすことができるかあれこれと考える。「事」は、そのことに専念する意。

3 譖　中傷する。讒言する。うその訴えをする。

3 恥二謀不一レ用　前四八五年、呉王夫差は斉国内の乱れに乗じて斉を伐とうとした。子胥がこれを諫めて「斉は呉にとって皮膚病のようなもの、越は内臓の病、句践が生きている限り油断はなりません。越こそ伐つべきです。」と言ったが呉王夫差には用いられなかった。この戦い（艾陵の戦い）では呉が勝利し、その後も夫差は戦勝を重ねて慢心するようになった。そこに子胥のみは呉の亡国の影を認め、たびたび諫言したが次第に夫差の不興をかうこととなった。呉の亡国を感じ始めた子胥は、斉に使いしたとき息子を斉の地に預ける。政敵の伯嚭はこれを好機と捉え、夫差に讒言し子胥を自害に追いやるのであった。「恥」は不名誉と思う。悔しいと思うの意。

3 怨望　恨む。思うようにならずに不満を持つ。「望」も、恨むの意。

3 夫差乃…　「乃」は、そこで。上のことと下のこととが密接せず、ある抵抗や経緯を踏まえてつながる気持ちを表す。ここでは、それまで子胥がたびたび諫言して夫差としてはおもしろくなかったが、ここにきてやっと子胥を罪する、という気持ちを表している。

3 賜二子胥属鏤之剣一　「賜剣」とは君主が臣下に剣を賜うこと。自害を強いる慣例的な措置。「属鏤之剣」は、名剣の名。地名に由来するとも、鋼鉄の糸を切るくらい鋭利であることを示す名であるともいわれる。

5 櫝可レ材也　櫝が成長して棺の材料になる頃には呉は越に滅ぼされ、暗君夫差の棺が必要になるだろうの意。「櫝」は木の名。ひさぎ。ノウゼンカズラ科の落葉高木。乾

燥すると堅くなり、よく湿気を防ぐので棺の材料として用いられた。

5東門　「東門」は呉の都・姑蘇の東門。子胥は、越の最善の戦略が「東門」から攻め入ることと考えこのように言ったとも、越が呉の東にあり、呉を攻めるには東から来るのでこのように言ったとも考えられる。

6自剄　自分で自分の首をはねること。自殺すること。時に、前四八四年。「剄」は、「くびきる・くびはねる」と読む。

6鴟夷　酒を入れる馬皮製の袋。一説に「鴟」も「夷」も鳥の名で、その腹や喉袋のように大きい袋だという。尸を鴟夷に入れて川に流したのは、子胥の霊の戻ってくることを恐れたためともいうが、いずれにせよ死者に対するひどい冒瀆の仕打ちである。

7立二祠江上一　「祠」はほこら。ほこらを建てたのは、非業の死を遂げた子胥に対する鎮魂のためである。「江」は長江。「上」は、ほとり。

7命　名付ける。命名。

8生聚　人口を増やし、物資を蓄えて、国力を充実させる。

8教訓　兵を訓練する。軍事訓練をする。国民を兵士として訓練する。

8周元四年　前四七三年。実際には、前年には呉は越に滅ぼされていた。

9三戦三北　「三」は、何度もの意。「吾日に吾が身を三省す。」（「論語」学而）の「三」と同じ。「北」はそむく。逃げる。敗北。前四八二年、呉王夫差が黄池に諸侯と会盟し、呉の兵力が手薄になったすきに越王句践は呉を攻撃し、太子を殺し呉都を陥れた。越はまだ一気に呉を滅ぼすには力不足と判断し呉の和議を受け入れたが、四年後弱体化した呉を伐ち、呉の都を囲むこと三年、ついに夫差は都を捨てて姑蘇山に逃げ込んで呉越の抗争は最終局面を迎えた。

9姑蘇　姑蘇台。姑蘇山（現在の江蘇省蘇州市にある山）にあった夫差の宮殿の名。ここで夫差は、越から贈られた美女西施をはべらせて遊宴したという。「キー・ポイント」の「李白の詩」を参照。

9亦請二成於越一　（先に越王句践が会稽山でしたのと）同じように講和を願い出た。「亦」は、同じく。句践が会稽山で敗れたとき、呉に講和を願い出たのと「同じように」。「成」は、講和・和解。

9范蠡不レ可　范蠡は聞き入れなかった。「史記」越王句践世家によれば、句践は夫差の助命嘆願を受け入れようとしたが、范蠡は「前に呉は天が与えたものを受け取らなかったまでのこと、今度は天が呉を越に与えようとしている。これを受け取らないのは天意にそむくこと。」と言って、呉の使者を追い返してしまった。それでも句践はかつて許された恩に報いようと夫差に百戸の領地を与え臣下とし助命しようとした。ところが、夫差は「私はすでに年老いています。とても君主にお仕えすることができません。」と辞退し、ついに自害したということだ。

10無二以見二子胥一　子胥に合わせる顔がない。子胥の諫めも聞かずに、越王句践を赦し、呉の滅亡を招いてしまった自己の不明を恥じる気持ちが表現された言葉。

10幎冒　死者の顔に掛ける四角の布。一尺二寸四方のもので、絹を用い、四隅に紐をつけて後ろで結ぶ。「幎」は顔を覆う布。「冒」は覆う。

句法

挙二伍員一謀二国事一・説二夫差一赦レ越　使役形。使役を暗示する「説・命・挙」などの動詞が上にくる場合、下の動詞を使役に読む。その場合、文語で使役を表す「しむ」という助動詞を動詞に接続させて訓読する。

出入使二人呼一曰　使役形。一般に「使ＡＢ」は、「ＡヲシテＢセシム」と読み、「ＡにＢさせる」意。

而忘二越人之殺二而父一邪　疑問形。「邪」は文末に置く疑問の助字。疑問の助字としては「乎・耶・与・歟・也・哉」などがあるが、「邪」は特に不審に思って言いとがめるような語気がある。ここでは、「まさか忘れはすまいな」というニュアンス。

奢誅・恥二謀不一レ用　受身形。文脈から受身に読む。その場合、文語で受身を表す「る・らる」という助動詞を動詞に接続させて訓読する。

解説

春秋時代――呉楚の抗争――

春秋時代の末期、長江下流域に呉と越の二国が急に勃興して楚や中原の国を脅かし、一時はそれぞれに諸侯を会盟して覇を称えたが、互いに死闘を繰り返した末、また急に滅び去ってしまった。呉越が最初に戦ったのは周の敬王の十年（前五〇四年）、越が呉を滅ぼしたのは前四七三年で、呉越の抗争は三十八年に及ぶことになる。が、その前後の事情、つまり両国が急速に勃興してきた歴史的、文化的背景や、呉を滅ぼしたあとの越の事蹟などについては不明の点が多い。この地方に青銅や製陶の技術などではむしろ中原より進んだ独特の文化があったことが知られており、そのような素地の上に、中原諸国の政治的情勢などから人的物的交流が盛んになり、急速に力を蓄えてきたものと思われる。

呉越の抗争は、その歴史舞台への登場退場の仕方、夫差・句践二王の抗争の経緯など非常に小説的であるが、もう一つ注目すべきことは、その舞台を彩る脇役としての伍子胥と范蠡との対照的なあり方である。伍子胥の生と死を貫くキーワードは「恨み」である。その「恨み」の激しさが楚の平王の屍に笞打たせ、死に臨んでは夫差への嘲罵の言葉となって、自らの死後にまでその悲劇を深めた。一方の范蠡が、全てを手に入れられるとき、逆に全てを投げ出して、結果として生を全うした。これらについて「十八史略」本文から詳しい経緯を知ることはできないが、適宜補いつつ進めれば、より深い理解が得られるだろう。

鑑賞

呉楚の興亡の地を訪れた李白（七〇一～七六二）は、その地で二首の詩を詠じている。そのうちの一首はキーポイントで紹介した。ここでもう一首を紹介しよう。

［本文］

越中覧古
越王句践破レ呉帰
義士還レ家尽錦衣

宮女如レ花満二春殿一
只今惟有二鷓鴣飛一

［書き下し文］

越王句践　呉を破りて帰る
義士家に還るに　尽く錦衣す
宮女は花のごとく　春殿に満ちしも
只だ今　惟だ鷓鴣の飛ぶ有るのみ

［現代語訳］

越王句践は、（夫差の治める）呉の国を破って凱旋した。
（呉に敗れた後、二十年間も越王句践に）忠義を尽くした戦士たちは、自分の家に帰って、みな（恩賞の）錦織りの衣服を着た。
（越の国は全盛をきわめ）宮中に仕える女性たちは、花のように美しく、春の宮殿に満ち溢れていた。
（ところが）今は（すべてが廃墟となってしまい、）ただ鷓鴣がわびしく飛んでいるだけだ。

（「研究資料漢文学　新装版　第四巻　詩Ⅱ」堀江忠道・大地武雄　明治書院　平十五　二七ページ～二八ページによった）

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **夫差が「臥薪」するに至った経過とその結果、句践が「嘗胆」するに至った経過とその結果を、それぞれまとめてみよう。**

【答】夫差の臥薪＝父の闔廬が越との戦いに敗死し、その復讐の思いを忘れないようにするため。結果、越を夫椒に破り、会稽山で越王句践を降伏させた。
句践の嘗胆＝会稽山で呉に敗れた屈辱を忘れないようにするため。結果、呉を滅ぼし、夫差を自殺に追い込んだ。
▼**ポイント▲**　どちらも、受けた屈辱を忘れないように心身を苦しめ、その結果、復讐を成し遂げることができたという点で共通する。本文を丁寧に吟味させれば、容易にまとめさせられよう。

2 **夫差の子胥に対する気持ちの変化を分かりやすく整理し、発表してみよう。**

【答】

夫差の行為	子胥に対する気持ち
①周敬王二十六年、夫差敗二越于夫椒一。	信頼
②（越王句践許しを請う。） 子胥言、「不可。」太宰伯嚭受二越賂一、説二夫差一赦レ越。	疎む
③太宰嚭、譖下子胥恥二謀不一レ用怨望上。夫差乃賜二子胥属鏤之剣一。…自剄。夫差取二其尸一、盛以二鴟夷一、投二之江一。	憎悪
④夫差曰、「吾無三以見二子胥一。」	後悔する・恥じる・面目ない・謝罪・許しを求める

▼**ポイント▲**　夫差の視点から子胥自身やその言動がどう見えたかを理解させる。この視点から、本文を丁寧に吟味させれば、容易に整理させられよう。

言葉と表現の解答例

1 **「臥薪嘗胆」の意味を調べてみよう。**

【答】かたきを討つために、また大きな目的を遂げるために、長い間の試練に耐え、苦労すること。
▼**ポイント▲**　辞書・資料集・インターネットを用いて調査させる。

2 **四字熟語を創作し、発表してみよう。また、その作品の**

意味と使い方も解説してみよう。

【答】①「臥床嘗薬」（風邪などの病気に罹り病床で薬を飲む）。（例文）今夜は体調がすこぶる悪いので「臥床嘗薬」の状態だ。
②「芋肉定食」（肉じゃが定食のこと）（例文）今日の夕飯は、「芋肉定食」だ。

▼ポイント▲　辞書やインターネットを用い、独創的な四字熟語を作らせたい。ゲーム感覚で作らせたい。発表はグループ内でよいが、場合によってはクラス全体に紹介してもよい。

言語活動の解答例

1　夫差が句践に敗れたのはなぜか、話し合ってみよう。

【答】夫差は「越王句践を殺すべし」という伍子胥の言葉に耳を傾けなかったばかりか、敵（越）から賄賂を受け取り内通していた太宰伯嚭の讒言を信じて、伍子胥を自殺にまで追い込んでしまう。結果、呉の滅亡を招くこととなった。句践は危機を脱した後、范蠡と共にねばり強く計画的に行動し、呉を敗り夫差の命乞いにも応じなかった。この二人には耐え忍んで目的を達成するという共通点はあるが、夫差は部下を見る目がなく忠義の臣・伍子胥を失ったことが越に敗れた最大の原因と考えられる、など。

▼ポイント▲　自由に話し合わせてよいが、子胥の助言を聞かなかったため「吾無二以見一子胥一。」（P一四二・10）という結果になったことに注意させたい。やはり、諫言の臣が必要なことはいつの世も同じという読み解きができればよい。ここの言語活動は「話し合い」（討論）なので、その仕方を学ぶのによい教材といえる。考えを深めさせるためには、他からの意見と自分たちの考えを検討させるという言語活動が大事。言語活動の仕方などについて、「学習のポイント」「まとめ❶❷」に詳述したので参照して欲しい。

（前田　康晴）

中国英傑伝

海音寺潮五郎

作者

海音寺潮五郎　明治三十四（一九〇一）年～昭和五十二（一九七七）年。小説家。作家。鹿児島県の生まれ。國學院大学卒業後、中学の国語教師を務めるかたわら創作に専念。歴史の真実を伝える「史伝文学」の復興者として知られる。

その主な代表作品と受賞歴は以下のようになる。

一九二九年　「うたかた草紙」。「サンデー毎日」大衆文芸賞入選。
一九三二年　「風雲」。「サンデー毎日」大衆文芸賞受賞。
一九三六年　「天正女合戦」「武道伝来記」他で第三回直木三十五賞受賞。
一九五三～一九五四年　「蒙古来る」
一九五四～一九五七年　「平将門」。大衆小説から歴史小説に脱皮。
一九五九～一九六一年　「二本の銀杏」
一九五九～一九六三年　「武将列伝」
一九六〇～一九六二年　「天と地と」
一九六一～一九六二年　「悪人列伝」
一九六一～一九六三年　「西郷隆盛」
一九六八年　第十六回菊池寛賞受賞。
一九七一年　「中国英傑伝」
一九七三年　第二十四回ＮＨＫ放送文化賞受賞。
一九七三年　文化功労者
一九七七年　第三十三回日本芸術院賞文芸部門受賞。
（以上、「現代作家辞典」東京堂出版・一九七八年。「日本近代文学大事典」講談社・一九八四年よりまとめる。）

海音寺潮五郎

海音寺を語るとき、「一九七三年文化功労者」の受賞理由に、「歴史文学の発展と普及につくすとともに、史伝の復活に貢献したことが評価される。」とあり、この中にある「史伝の復活」（＝「史伝」というジャンルの文学を復興させた作家ということ）という言葉に注目しなければなるまい。ここで言う「史伝」とは、歴史伝記として伝えられる記録の総称を指す。

海音寺自身も「史伝文学の再興とオーソドックスな歴史小説の育つべき土壌を培養することを意図して書いたものです。」（海音寺潮五郎全集　第十七巻武将列伝下・朝日新聞・あとがき）と、「史伝文学」の再興に執筆意図があることを述べている。また、「史伝文学」についても、「文章列伝が、最初に書いた六人を一冊にしてはじめて出版されたとき（　略　）ある知名な作家が、『よく努力して資料を集められているが、勝負はこれからだ、これをどう文学化するかが問題だ。』と、書いたのがありました。評者はこれはまだ文学ではないと考えていたわけです。たぶん、評者の考えている文学とは小説だけなんでしょう。私は苦笑せずにはいられませんでした。日本人の文学観から史伝というジャン

ルは長い間忘れられていたのですね。」（同前）と語り、「史伝」が文学のジャンルの中にあると強調する。つまり、海音寺は「史伝」は文学のジャンルの中にあるから「史伝文学」だとした。もう少し言うなら、海音寺の言う「史伝」とは、歴史の真実を伝えるため広範かつ詳細な文献調査などをもとに虚構を排した歴史の真実とはどのようであったかを明らかにしようとするもので、その「史伝」を読み物風に平易に読めるものにしたところに、海音寺の「史伝文学」の特色があるということになろう。

また、海音寺が中国の「史伝」「史伝文学」を書く意図やどのように書いたかについても、次のように語っている。

「日本の文化は中国文化の影響を最も濃厚に受けていますので、ある程度中国の歴史事実や、人物のことや、思想家達の思想や、故事成語の知識がなければ、日本の古典を読む場合はもちろんのこと、日常の会話にすらさしつかえるのです。……この戦後日本の学校教育の欠漏を補うために書こう。おもしろく、平易に読めて、史伝文学であるとともに、知らず知らずの間に中国史の知識や故事成語の知識が得られるように書こう。」（「中国英傑伝」あとがき）と。意義深い言葉だ。

出典

「中国英傑伝」〔昭和四十六（一九七一）年、文藝春秋〕によった。教科書に収録するに際して、漢字・送りがな・句読点などについては教科書として統一した体裁に改めた。

「中国英傑伝」とは、海音寺が「十八史略」をもとに、「呉越春秋」などの多くの史書を用いて、春秋戦国時代から前漢成立までに登場する種々の個性豊かな人物を描いた史伝である。

参考文献

❊**教師用**

「中国五千年（上・下）」（講談社文庫）陳舜臣　平元

「物語　中国の歴史－文明史的序説」（中公新書）寺田隆信　平九

中国の通史が分かりやすくまとめられているだけでなく、歴史の中に登場する人物たちの、欲望、生き様、生きる目的にも言及する良書である。

❊**生徒用**

「改訂版中国小史　黄河の水」（角川文庫）鳥山喜一　昭三十五

著者は、「少年子女のために、漢民族の歴史をつづったもの」と書いているように、逸話や伝承・伝記などを用いながらやさしく語りかける。

❊**教師・生徒共通**

▽「十八史略」や「史記」など中国の史書をベースにした小説

「伍子胥」（徳間文庫）伴野朗　平十七

復讐に捧げた伍子胥の生涯を、孫武、呂飛など魅力的な脇役とともに描く。

「晏子（一～四）」（新潮文庫）宮城谷昌光　平九

生き方や政治のあり方、補佐役としての在り方など、学べる点が数多くある作品。これは、「晏子春秋」をもとに再

現した。

「重耳（上・中・下）」（講談社文庫）宮城谷昌光　　平八

上巻では、春秋の五覇の代表格とされる晋の文公（重耳）の祖父称の晋の統一が描かれ、中巻では、重耳の父が描かれ、下巻では、重耳の長い流浪時代を含めた、その生涯が描かれる。

「管仲（上・下）」（文春文庫）宮城谷昌光　　平十八

管仲の前半生の苦難と後半生の成功の日々が描かれる。

「呉越春秋　湖底の城（一～九）」（講談社文庫）宮城谷昌光　　平二十五

伍子胥、呉王夫差、越王句践、范蠡の生涯を描く。傑出した人物のストーリーは読みごたえ十分。大作。

「小説十八史略（一～六）」（講談社文庫）陳舜臣　　平四

「范蠡ー越王句践の名参謀」（ＰＨＰ文庫）立石優　　平十二

傑出した軍才と優れた政治手腕で、越王句践を補佐した范蠡。その稀有な人生が描かれる。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶ 作者について理解する。［知技⑵イ］

❶教科書所収の作者紹介項目を用いて、「史伝文学の復興者」であることを確認するとともに、海音寺の「史伝文学」はどのようなものかを解説する。「作者」に詳しい。要点は、「史伝」＝歴史の真実を伝えるため、広範かつ詳細な文献調査などをもとに、虚構を排した歴史の真実とはどのようであったかを明らかにしようとするもの。海音寺の「史伝文学」＝「史伝」を読み物風に平易に読めるものにした。

【評価】 本文の作者・出典及び、「臥薪嘗胆」と本文の関係を理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶ 本文の黙読をする。
❷ 第一次感想をノートにまとめ、その後、発表する。
❸ 内容読解をする。［思判表B⑴ア・イ・エ］**［「学習のポイント」1］**

❶読めない語句については、辞書などで調べるよう指示する。
❷第一感想は、五十字程度の短い感想でよい。ノートに書かせて言語化させる。
❸次の**ア〜オ**のポイントに注意する。**ア**「同じこと」とは、具体的にどのようなことかをグループで話し合い、代表が発表する。

イ（　）内の書き下し文を現代語訳し、朗読する。**ウ**板書した現代語訳について、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。その返答の仕方も工夫する。**エ**（　）内の書き下し文を、その意味を考えながら、グループ内で朗読し合う。**オ**「ずっとずっと後年、子胥はそれを思い知るのである。」とあるが、どのようなことを「思い知る」かを漢文教材「臥薪嘗胆」をもとに、グループで話し合い、代表が発表する。

ア…「『拙者は楚に父と兄とを…ともに亡命の客臣です。境遇も同じです。』（P一四四・下3〜5）、また、リード文を参考に。」という助言を与える。

イ…「瀬下」「俱に」「胡馬は北風を望みて立ち」「越燕は日に

向かひて熙ぶ」「誰か…ざらんや。」などの語句や句形に注意させ、意味が通じやすいように現代語訳を工夫させる。

ウ…他グループの質問や意見に対する返答を十分に検討させることは、生徒たちの考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。

エ…朗読は、音の高低や強弱など工夫させる。

オ…ここは披離が子胥に助言する場面。この助言と「思い知る」内容を漢文教材「臥薪嘗胆」とを関連させて説明させる。

【評価】・それぞれの読解のポイントについて、本文の内容をもとに的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

・本文に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、伍子胥は伯嚭に対して、どのような思いを持っていたか、本文に即してまとめているか、確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶ 伍子胥は伯嚭に対して、どのような思いを持っているかをグループで話し合いながら本文に即してまとめ、発表する。思判表B(1)イ 主態 **〔「学習のポイント」2〕**

❷ ❶で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。

❸ 本文の意味を考えながら、グループ内で朗読する。

❹ 第二次感想をノートにまとめ、発表する。

❶伍子胥の伯嚭に対する思いは、「学習のポイント」2より、理解させられよう。ここで、大事なのは「共感」という言葉に生徒が気付くかどうかであろう。そのためには「『理解している』でもよいが、理解だけで官職に推薦するだろうか。『子胥は承服せず、益々親しみ』（P一四五・13）とあるように、伍子胥は伯嚭に対して、『完全なる信頼心』を持っていた。そこで『理解』より、強い気持ちを表す言葉はないか。」という助言を与える。

【評価】・披離が子胥に助言する場面で、この助言と「思い知る」内容を漢文教材「臥薪嘗胆」と関連させて理解しているか、確認する。

・「臥薪嘗胆」との関係を踏まえ、伍子胥が伯嚭に対してどのような思いを持っていたか、と「披離の忠告はあたっていたのだ。」という本文の言葉についてどのように思うか、グループ内で主体的な態度で話し合い、また、自分の考えをグループ内の他者に分かりやすく伝えようとしているか、分析する。

❷他グループの質問や意見に対する返答を十分に検討させることは、自分たちの考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。そ

こで「他グループの発表を聞きながら、各グループはその理解に対する疑問点・質問や意見を考え、メモしておくこと。後ほど、それに対する話し合いをします。」という確認をさせておく必要があろう。

❸大きな声で各文の意味を考えながら、グループ内で朗読させる。

❹第二次感想は、百字程度の感想を書かせる。ノートに書かせて言語化させる。第一次感想より教材への理解が深まっているか、確認したい。

発問例

●一四四ページ

問　**「子胥は伯嚭が自分と境遇を同じくし」（上7行目）とあるが、どのような境遇か。**

答　伍子胥も伯嚭も、楚に親族を殺され、国を追われて呉に亡命した客臣で、楚に復讐したいと考えているという境遇。

補　「拙者は楚に父と兄とを…ともに亡命の客臣です。境遇も同じです。」（下3～5行目）とある。この文では「…立場…境遇…」となっているが、「立場」は「その人の置かれている地位や境遇」のことなので、「立場」＝「境遇」として、解答を導いた。「客臣」とは、使者として来た外国の臣下。

問　**「胡馬」（下12行目）は、なぜ「北風にいななく」のか。**

答　北方の異民族の地に生まれた馬は、他国にいて北風が吹いてくると、頭をあげてその方に身を寄せてなつかしむ。転じて、故郷を忘れないたとえ。

補　漢和辞典などの「胡馬依北風」（文選・古詩十九首）の項目に詳しい。

問　**「越鳥」（下13行目）は、なぜ「南風に向かひて巣くふ」のか。**

答　南の越から来た鳥は、南方にある故国を慕って南の方の枝に巣を構える。転じて、故郷を忘れないたとえ。

補　漢和辞典などの「越鳥巣南枝」（文選・古詩十九首）の項目に詳しい。

問　**「同じこと」（下15行目）とは、具体的にどのようなことをいうか。**

答　**補**　「学習のポイント」**1**(1)参照。

問　**（　　）内の書き下し文（一四四ページ下16行目～一四五ページ上4行目）を現代語訳せよ。**

答　**補**　「学習のポイント」**1**(2)参照。

●一四五ページ

問　**「ずっとずっと後年、子胥はそれを思い知るのである。」（上16～17行目）とあるが、どのようなことを「思い知る」のか。漢文教材「臥薪嘗胆」と比べながら具体的な説明をせよ。**

答　伍子胥は、披離の助言を否定したことが、自分の「非」であった（自分が不明であった）と思い知る。

補　伯嚭は、伍子胥から信頼を得て大夫に推薦されたのにも関わらず、敵方の越から賄賂を受け取ったり、権力を手に入れようと呉王夫差に伍子胥の讒言をしたりした。その伯嚭の人柄を見抜いていたのが披離であった。そこで、披離は、伍子胥に「伯嚭に注意する」よう助言する。ところが、披離の助言を否定してしまうのだ。その判断ミス

語句の研究

●一四四ページ

上1伍子胥　「臥薪嘗胆」の「語句の研究」「伍員」参照。

上1闔廬　「臥薪嘗胆」の「語句の研究」「闔廬」参照。

上2伯嚭　「臥薪嘗胆」の「語句の研究」「伯嚭」参照。

下3～5拙者は楚に父と兄とを…ともに亡命の客臣です。境遇も同じです。　伍子胥と伯嚭の「同じこと」の整理。「発問例」**問**「子胥は伯嚭が自分と境遇を同じくし」とあるが、どのような境遇かに詳しい。「学習のポイント」**1**(1)参照。

上12披離　呉の太夫。未詳。

下12胡馬　北方の胡の国に産した馬。「胡」は、秦・前漢以前は、匈奴をいう。北狄とも。

下13越鳥　南方の越の国の鳥。「越」は、春秋時代の十二列国の一つ。当時の「越」は江蘇・浙江省、山東省の一部を領有していた。

下16同病相憐れみ、…　「呉越春秋」闔閭内伝の、一節の書き下し文。ここは、「呉越

が、自らを自害に追い込むことになる。

問 **伍子胥は伯嚭に対して、どのような思いを持っていたか、本文に即してまとめよ。**

答 **補** 「学習のポイント」**2** 参照。

春秋」（「欽定四庫全書」呉越春秋巻二闔閭内伝による）に基づき、その書き下し文となっている。「参考」参照。

下16驚翔　驚いて飛び立つ。「翔」は、鳥が空高く飛ぶ。

●一四五ページ

上2熙　楽しむ。好む。

上6憮然と　がっかりしたさま。暗く沈むさま。子胥が伯嚭の正体を知らずに高い地位に引き上げ登用することにがっかりした。

上15呉越春秋　呉と越、二国の興亡史。「春秋」とは、歴史の意味。「呉越春秋」、十巻。編年体。前半（一～五巻）が呉、後半（六～十巻）が越の歴史。その記述の中心は、呉＝闔閭・夫差。越＝勾践となる。巻は1呉太伯伝、2呉王寿夢伝、3王僚使公子光伝、4闔閭内伝、5夫差内伝、6越王無余外伝、7勾践入臣外伝、8勾践帰国外伝、9勾践陰謀外伝、10勾践伐呉外伝、となっている。

参考

Ⅰ「呉越春秋」との比べ読み

海音寺は、中国物を書く際、「十八史略」をもとに「春秋左氏伝」「史記」「国語」や「呉越春秋」などの多くの史書を用いて登場人物の事績や人物像を掘り出して書いたと言われる。確かに、この教材文の中に「呉越春秋は伝えている。」（P一四五・上15）と書かれているのも、その証左となる。

そこで、「呉越春秋」にある記述を読み、「中国英傑伝」の記述と比べ読みをし、「中国英傑伝」に対する理解をより深める活動も可能である。

［本文］

呉大夫披離承レ宴問二子胥一曰、「何見而信レ喜。」子胥曰、「吾之怨与喜同。子不レ聞二河上歌一乎。『同病相憐、同憂相救。驚翔之鳥、相随而集。瀬下之水、因復倶流。』胡馬望二北風一而立、越鷹向レ日而熙。誰不レ愛二其所一レ近、不レ悲二其所一レ思者乎。」披離曰、「君之言外也、豈有二内レ意以決疑一乎。」子胥曰、「吾不レ見也。」披離曰、「吾観二喜之為一レ人、鷹視虎歩、専レ功擅レ殺之性、不レ可レ親也。」子胥不レ然二其言一。与レ之倶事二呉王一。

［書き下し文］

呉の大夫・披離は宴を承りしとき子胥に問ひて曰はく、「何を見て喜を信ずるか。」と。子胥曰はく、「吾の怨と喜とは同じうす。子河上の歌を聞かざるか。『同病相憐れみ、同憂相救ふ。驚翔の鳥は、相随ひて集ふ。瀬下の水は、因りて復た倶に流る。』胡馬は北風に望みて立ち、越鷹は日に向かひて熙ぶ。誰が其の近き所を愛せざらんや、其の思ふ所の者を悲しまざらんや。」披離曰はく、「君の言外や、豈に意を内れて以つて決して疑ふこと有るらんや。」子胥曰はく、「吾見えざるなり。」披離曰はく、「吾喜の人と為りを観て、鷹の視虎の歩み、功を専らにし殺を擅にする性は、親しむべからざるなり。」子胥其の言を然りとせず。之と倶に呉王に事ふ。（「欽定四庫全書」呉越春秋巻二闔閭内伝闔閭元年）

［現代語訳］

呉の大夫・披離は宴会に招かれ、子胥に質問していった、「どういうところを見て喜（伯嚭のこと）を信じたのか。」と。子胥はいった、「私の（楚に対する）怨み（うらみ＝かたき）は喜の怨みと同じだ。あなたは、河上の歌をお聞きになったことはないか。『同じ病のものはお互い憐れみ、同じ憂いを持ったものはお互い助け合う。驚いて飛び立った鳥は互いにしたがい集まり、瀬の水は勢いを盛り返してともに流れる。』胡地の馬は（故郷の）北風を望んで立ち、越地の燕はいつも（南の）太陽に向かって嬉々としている。誰でもその近い関係の人を愛さないものはいないし、その思う人を哀れまないものはいないのではないか。」と。披離はいった、「あなたの言葉はうわべだけのことです。内心何か思うところがあって心配事を否定しようとされているのではないか。」子胥がいった、「私には何も心配事などありません。」披離がいった、「私は喜という人を観察しましたが、鷹のような鋭い目を持ち、虎のようなたけだけしい歩き方をし、功を独り占めにし、人をほしいままに殺す性格があります。近づいてはいけない。」子胥は披離の言葉に同意せず、伯嚭と一緒に呉王に仕えた。

（現代語訳は東洋文庫８７３「呉越春秋」呉越興亡の歴史物語・平凡社・佐藤武敏訳注より。）

Ⅱ「小説十八史略」ー臥薪嘗胆ー

陳舜臣氏は「十八史略」を小説化するにあたり、自身の膨大な中国史、中国文学に関する知識を総動員し、全六巻（毎日新聞社発行。その後、講談社文庫発行）という大著に仕上げた。一日に一つ、エピソードを読むだけでも中国史の勉強になる。挿入されたエピソードには、中国史の多様さと人間感情の複雑さがよく表れ、「読んで楽しい」小説となっている。そこで、ここに「臥薪嘗胆」の話の全てを掲載できないので、参考までにその一部を引用する。「臥薪嘗胆」教材と読み比べをしてみよう。

だが、江南の文化人である夫差は、そんな徹底した愛憎の念をもたない。彼は家臣の伍子胥の復讐にかけた執念を、

――どろどろしすぎている――と、不快に思うこともあった。

『史記』や『春秋左伝』にはのっていないが、『十八史略』には、夫差が父の怨みを忘れないために、ふわふわしたベッドで寝ないで、ごつごつした薪のうえに横たわった、と記している。これが有名な、

――臥薪――である。

これは一見、復讐心の強さをあらわすようだが、じつはそうではない。薪のうえに横になるような、そんな無理をしなければ、怨みを忘れかける。――執念の弱さを物語るエピソードと解せないこともない。

伍子胥はそんな方法を用いないでも、復讐心が弱まることはなかった。

ここに呉王夫差とその家臣伍子胥の違いがあり、それが二人を悲劇に導いたのである。

夫差は物心のついたころから王の子であった。しかも、王の後継者として、人びとに認められていた。父の闔閭のように、「王位を奪ってくれよう」と、長いあいだはげしい闘志を燃やすこともなかった。おっとりと育ったのである。

だから、夫差はこれまで、どろどろした怨念のかたまりのような伍子胥を、心のなかで毛嫌いしていた。ところが、父の最期の言葉によって、彼も怨念の人の仲間入りをすることになった。

呉王夫差と伍子胥のあいだが、最もうまく行ったのは、夫差が越にたいする復讐の念を燃やした三年間だといってよい。

夫差は約束どおり三年目に越を破った。

（「小説十八史略一」講談社文庫・陳舜臣　P二〇三・2～P二〇四・5）

《板書例》

■伍子胥は伯嚭に対して、どのような思いを持っていたか、グループで話し合いながら、本文に即してまとめてみよう。（学習のポイント2）

▼話し合うポイント▲

①リード文を参考に、伍子胥と伯嚭のそれぞれの立場・境遇を読み取る。
②披離の助言の意味を読み取る。
③伍子胥の伯嚭に対する評価を読み取る。

全段落

《①伍子胥の立場・境遇は？　伯嚭の立場・境遇は？》
・伯嚭の立場・境遇
　＝リード文「楚に父を殺され…来たのである。」
・伍子胥の立場・境遇
　＝「子胥は伯嚭が…志を同じくしている」（P一四四・上9）
　←
立場・境遇を同じくすること（学習のポイント1(1)）

《②披離の助言の意味は？》
・披離の助言＝「ごもっともです。…伯嚭は警戒すべき人物のように、拙者には見えます。」…殺を嗜む性質がありま す。」（P一四五・上7～12）
《③伍子胥の伯嚭に対する評価は？》
・子胥は承服せず、益々親しみ、闔廬にとりなして、重く用いさせた（P一四五・上14～15）
　←
①②③をもとに、伍子胥は伯嚭に対する思いをグループで話し合いながらまとめてみよう。

板書
A班……
B班……
C班……

まとめ

伍子胥は伯嚭の楚を恨み復讐したいという気持ちに**共感**していた。（伍子胥は伯嚭の志に**共感**した。）**共感**できたのは、伍子胥と伯嚭が、楚に親族を殺され、亡命したという同じ立場・境遇にあったからだと考えられる。

学習のポイントの解答例

1　**「唄」（一四四・下7～一四五・上4）について、(1)「同じこと」（一四四・下15）とは、具体的にどのようなことをいうか、説明してみよう。(2)（　）内の書き下し文を現代語訳し、発表してみよう。**

【答】

(1)　楚に親族を殺され、国を追われ呉に亡命した客臣で、楚に復讐したいと思っていること。

(2)　同じ病のものはお互い憐れみ、同じ憂いを持ったものはお互い助け合う。驚いて飛び立った鳥は互いにしたがい集まり、瀬の水は勢いを盛り返してともに流れる。胡地の馬は（故郷の）北風を望んで立ち、越地の燕はいつも（南の）太陽に向かって嬉々としている。誰でもその近い関係の人を愛さないものはいないし、その思う人を哀れまないものはいないのではないか。

▼ポイント▲

(1)「発問例」**問**「子胥は伯嚭が自分と境遇を同じくし」とあるが、どのような境遇かに詳述。「ここは、『私（伍子胥）と同じことを思う』という意味。」という助言を与える。

(2)は、書き下し文の現代語訳。「わかりやすい漢詩の現代語訳を作ってください。発表してもらいます。」と告知するとよい。単なる現代語訳ではなく、わかりやすい現代語訳という指示によって言語活動のポイントが示されよう。また、「学習のポイント」として提示してないが、生徒に自身が作った現代語訳と海音寺のものと比較させ、言葉の違いを分析させるのも興味深い言語活動となろう。

2　**伍子胥は伯嚭に対して、どのような思いを持っていたか、本文に即してまとめてみよう。**

【答】伍子胥は伯嚭の楚を恨み復讐したいという気持ちに共感していた。（伍子胥は伯嚭の志に共感した。）共感できたのは、伍子胥と伯嚭が、楚に親族を殺され、亡命したという同じ立場・境遇にあったからだと考えられる。つまり、「同病」「同憂」の関係であったから共感できたということになろう。

▼ポイント▲　伍子胥と伯嚭が、同じ境遇の関係であるため、伍子胥は伯嚭の気持ちが理解できた。そこで、伍子胥は伯嚭を太夫に推薦するくらいなので「理解」よりももっと強い気持ち、「共感」が、ここでは適切だと考え、そのようにした。また、「子胥は承服せず、益々親しみ」（P一四五・上14）とあるように、伍子胥は伯嚭に対して、「完全なる信頼心」を持っていたとも考えられる。ちなみに、生徒から「伍子胥が伯嚭を『重く用いさせた』（P一四五・上14～15）とあるから、『共感』だけではなく、やはり、伯嚭に政治的な手腕を感じていたからだと思う。なので、政治的に有能な人物とも思っていたということも考えられないか。」という意見が出てくる可能性はある。この本文にその意見についての根拠はないが、類推できる範囲であろう。もしこのよ

うな意見が出てきたら、取り上げ、これに対する意見を他の生徒に聞いてみたい。

（前田　康晴）

単元の言語活動3　登場人物の魅力を紹介する

活動のねらい

「単元のねらい」に示したとおり、史伝の背景を理解しつつ内容理解を深め、自分のものの見方・感じ方・自己の生き方に対する考え方を広げたり深めたりすることをねらいとする。

この「登場人物を紹介する」言語活動は、主体的に興味深く取り組みやすい活動なので、漢文世界を学ぼうとする学習意欲につながるし、漢文世界に親しむことにもつながるものと考えられる。

さらに、この言語活動は、以下の四点の「力」の育成にその特色があるので、ここでそれを示しておく。

①「史伝」作品や文章の、歴史的・文化的背景などを**調査する力**。
②生徒自身が主体的に、作品や文章の内容をより深く広く理解する**解釈する力**。
③文章の構成や展開・表現の仕方・表現の特色について**評価する力**。
④紹介文を読者・聞き手にわかりやすく魅力的に**表現する力**。

タイトル・序文の解説

まず「十八史略」の概略を記した。それは、本活動では、作品や文章の歴史的・文化的背景などを調査するので、それを補完するためである。特に、「そこには歴史を切り開いた躍動的な人物の個性的な生き方や奥深い考え方が示され」が要点となろう。このことは、「登場人物の魅力を紹介する」という言語活動設定の理由ともなっている。ただし、これだけでは情報量が少ないので、生徒各自が選んだ人物についてはインターネットや資料集などで主体的に調べさせ、多くの情報を得させたい。そのためには、図書館などで調査させる時間を取りたい。

「課題」の解説

課題　この教科書掲載の「史伝」教材の中から、紹介したいと思う人物一名を選び、その人物の魅力を紹介する文章を、四百字〜五百字程度で書いてみよう。

序文に述べたように、「十八史略」には魅力的で躍動的な人物が多く登場するので、それを活かした「その人物の魅力を紹介する」という課題は、生徒にとって学習しやすいだろうとも考えた。

また、この「登場人物の魅力を紹介する」活動は、「活動のねらい」で述べたように、四つの「力」の育成に特色がある。そこで、課題にどのようにちりばめられているかについて、課題文を用いて示す。

この教科書掲載の「史伝」教材の中から紹介したいと思う人物

一名を選び（①②）、その人物の魅力を紹介する文章（②③④）を、四百字〜五百字程度で書いてみよう（②③）。

活動の解説

1 紹介する人物一名を選び、その人物の魅力を探ろう。

①その人物の、ものの考え方や生き方、おもしろかった場面や言動などを多面的に分析し、その魅力を探り出す。 思判表B (1)イ

内容を解釈する力

・史伝教材に登場する人物の中から興味を持った人物を自由に選ばせる。

・本文に即し、人物像やその魅力を探り出す。箇条書きにしたり、図表にしたり文字化させる。

【具体例】紹介する人物↓鮑叔

鮑叔についての本文と、人物像・魅力をまとめた表

本文	人物像（ものの考え方など）とその魅力
①小白先至レ斉而立。 ②鮑叔牙薦二管仲一為レ政。 ③鮑叔不二以為レ貪。知二仲貪一也。 ④鮑叔不二以為レ愚。知三時有二利不利一也。 ⑤鮑叔不二以為レ怯。知三仲有二老母一也。 ⑥（管仲）…知レ我者鮑子也。	①小白を君主に据える ⬇計画的に目的を達成する緻密さが魅力。 ②管仲を薦める ⬇管仲の治世能力をいち早く見抜くなど才能がある。 慧眼力が魅力。 ③④⑤鮑叔の行為に理解を示す ⬇情に厚いのが魅力。 ⑥管仲からも感謝 ⬇損得勘定のない支援のできる人物像が魅力。

【評価】 紹介する人物の、ものの見方や考え方、おもしろかった場面など、多面的に分析し、内容理解を広げたり深めたりしているか、確認する。

②辞書・インターネット・資料集などで人物の略歴やエピソード・人物像などを調べ、分析の参考資料にする。 知技(1)イ

情報を調査する力・メモする力

・スマートフォンなどを利用させてもよい。インターネットには不確実な情報も多いので、注意させる。

・調査した内容はメモなどにまとめておく。箇条書きでよい。出典などは明確にさせる。

・聞き手の知らないエピソード、聞き手が聞きたくなるようなエピソードなどを発見する。

【調査メモの具体例】

「当時にあって、大夫としての第一の生命は、その主君を覇たらしめることであった。そのためには政治的手腕にたけた優れた人材が必要であり、鮑叔は交友を通してその

才能を管仲に見たのである。更に、鮑叔既進管仲、以身下之。…天下不多管仲之賢、而多鮑叔能知人也。とあることからすると、鮑叔は管仲を推薦して管仲が活躍すれば、世間の人々は自分をどのように評価するかということまで考えていたはずである。」（研究資料漢文学『7 歴史Ⅰ・明治書院』）の指摘は面白い。

⬇鮑叔はなかなか狡猾な奴かもしれない。この意見を使うことも必要か。友情だけでまとめるか迷うところ。この漢文は「史記」（管晏列伝）によっている。「史記」の見方は深い。

【エピソードメモの具体例】

管仲の遺言（「管鮑之交・鑑賞Ⅱ」参照）

　管仲は、誰に宰相を任せれば良いかと桓公と話し合いになった時、桓公は「鮑叔牙が良いのでは？」と管仲に聞きました。管鮑の交わりでも有名な二人。鮑叔牙が後任だと管仲も安心なのでは？　と思いましたが管仲は「ダメです」と却下。理由は、鮑叔牙はあまりにも剛直、清廉すぎるから、だというのです。

⬇なるほど。宰相という器ではないということですね。エピソードとしては面白い。紹介文に用いることができるか？

【評価】紹介する人物の略歴やエピソード・人物像などを、辞書・インターネット・資料集などで調べ、内容理解を広げたり深めたりする分析の参考にしているか、確認する。

③探り出した人物の魅力を、箇条書きにしてまとめる。思判表 B(1)ア・イ

内容を解釈する力・メモする力

【《鮑叔》の人物像のメモの具体例】

○一言でいうなら、（小白を王位につけるなど）智謀家で名伯楽。
○（友情に厚い）人情家の面も持つ。また、客観的判断に優れ、その判断に自信を持つ自信家でもある。
○鮑叔は政治的手腕や能力を持つという観点から、管仲の才能を見抜き、信頼し続け、宰相の地位まで押し上げる。
○……（さまざまな人物像が考えられよう。生徒には自由に想像させたい）

【評価】紹介する人物の魅力を的確に捉えてまとめているか、確認する。

2 紹介する人物の魅力を、効果的に伝えるための構想を練り、紹介文を書き上げよう。

①人物の魅力を伝えるために、表現のしかたを工夫する。 思判 表B(1)ア・イ

・読み手や聞き手が引きつけられる題名や見出しを考える。
・人物の魅力を伝える印象深い話題などをまとめる。
・適切な構成や展開を考え、構成メモを作成する。

文章を構想する力・文章を構成する力

・自分の言いたいことが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えさせる。

【《鮑叔》を用いた文章構成の具体例】

見出し…一言で鮑叔の魅力を表現するもの（キャッチコピー）
序論…紹介する人物の提示（その人物を選定した理由）
本論…紹介する人物の魅力とは何かを説明する
結論…紹介する人物の魅力をまとめる

【評価】 紹介する人物の魅力を的確に捉え、それを伝えるための表現の仕方を工夫しているか、確認する。

②①を踏まえて、人物紹介文を書き上げる。 思判 表B(1)イ

【人物紹介文の具体例】

鮑叔の魅力「信じ続ける」力　○年○組○番　氏名○○○

私は、鮑叔の「信じ続ける」力に魅力を感じました。

鮑叔は、小白を斉の君主（桓公）に、管仲を名宰相に育て上げ、後世、名伯楽と賞賛されました。その育成の仕方を教材「管鮑之交」から読み解いてみます。「…知仲貧也。…知時有利不利也。…知仲有老母也。…生我者父母、知我者鮑子也。」とあり、鮑叔は管仲のことを「知」り尽くし、徹底的にその才能を「信じ続け」、育成をしていたことが分かります。鮑叔の生きた春秋戦国時代は、弱肉強食の戦乱の世、裏切りが日常。そのような時代に、相手の立場に立ってものを考え、「信じ続ける」など、無理な話だと思います。

ところが、鮑叔はそれをするのです。使命感にも似た強い思いで鮑叔は管仲を「信じ続ける」のです。私にとって、この意志の強さに魅力を感じました。それは、なかなかできないことだからです。「史記」に「管仲の能力は確かにすごいが、鮑叔が管仲の才能を認め、それを信じ続けたことの方が偉い」（管晏列傳）とありますが、納得です。

最後に、このような人物が私のそばにいてくれたら、私ももっと成長できたかもしれません。

【評価】 紹介文を書くために、資料を集めて整理分類するとともに内容理解を広げたり深めたりし、その上で、構想を練

り、それを文章化しているか、確認する。

③①を踏まえて、書き上げた人物紹介文を、推敲する。

3 人物紹介文を、発表し合おう。

①グループを作り人物紹介文を発表し合い、相互評価する。

・①で書いた相互評価表の用紙を各発表者に手渡す。

「自己・相互評価のポイント具体例」参照。

・相互評価表を受け取った発表者は、そこに書かれたコメントをもとに検討し、2で書いた原稿に朱で加筆訂正をする。清書なし。

②相互評価をもとに、人物紹介文を加筆訂正する。主態

【評価】相互評価をもとに、人物紹介文を加筆訂正しているか、確認する。

③加筆訂正した人物紹介文の自己評価を行う。

【自己評価のポイント具体例】も【相互評価のポイント具体例】と同じなので、ここの例を参照とする。

【自己・相互評価表のポイント具体例】

自己・相互評価のポイント	評価　1よい　2普通　3わるい
①見出しは、読者や聞き手をひきつけるものになっているか。	1　2　3
②紹介する人物の魅力を読者や聞き手に適切に伝える内容となっているか。	1　2　3
③紹介する人物の魅力を読者や聞き手に適切に伝える表現になっているか。	1　2　3
④紹介する人物の魅力を読者や聞き手に適切に伝える文章構成になっているか。	1　2　3
⑤紹介する人物の魅力を読者や聞き手に興味深く伝える逸話が適切に挿話しているか。	1　2　3
⑥発表する際、発表内容が読者や聞き手によく伝わる声の出し方になっているか。	1　2　3

（前田　康晴）